

---

# スケバン！

万墨人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スケバン！

### 【Nコード】

N6738C

### 【作者名】

万墨人

### 【あらすじ】

只野太郎は少年執事である。高倉男爵家に召し使いとして雇われ、一人娘の美和子にたいし”忠誠の誓い”をはたす。この誓いをした執事は、主家がどのような災難にみまわれようと、忠誠をはたすという義務を負うのである。

## 前（前書き）

高倉家は破産、美和子は高倉家再興のため、番長島でおこなわれるトーナメントに出場を決意する。彼女をまもるため太郎も同道することになるのだが……。

## 前

1

「卒業生代表！ 只野太郎」

よばれて只野太郎は立ち上がった。まっすぐ前に進むと、講堂の壇上にあがる。前を見ると、講堂にずらりとならんだ卒業生がきちんと膝をそろえ、勢ぞろいしている。

その後ろには二年生、一年生がすわって、さらに父兄の席とつづく。太郎は口を開いた。

「今日、わたしたちは卒業の日をむかえました……」

以下、父兄と教師たちへの感謝の言葉がつづくがこれは略するほうがいいだろう。たいていの卒業式で話されるのとおなじであるからだ。

卒業式はどこおりなく進んだ。

ここ小姓村こしょうむらでは三月になるというのに、今日は豪雪で講堂の窓の外はまっしろな雪がつもっていた。この村は北の大地にあった。

卒業式に出席した生徒たちの服装はいわゆる詰襟、セーラー服ではなく、男子はモーニングで女子はメイド服だ。

扶桑国滝間郡赤岩県小姓村《ふそうこくたきまぐんあかいわけん こしょうむら》。縮尺のちいさい地図などでは記載されていないようなちいさな村である。しかしこの村にある学校である意味有名である。

この学校はふつうの高校ではなく、執事学校である。つまり執事やメイドになるための学校なのだ。この学校を卒業した卒業生は、さまざまな屋敷へ伺候し、執事やメイドになるのだ。

卒業の辞を読み上げる太郎の両手はまっしろな絹の手袋につつまれ、きちんとのりのきいたズボンはいびかぴかに磨き上げられた黒靴

と調和している。いちぶの隙もない服装は、執事の条件である。

やがてひとりひとりが卒業免状を受けとり、校長の訓示があつて散会となつた。

太郎はやつと緊張から解放され、ほつと息をついた。吐く息がしろい。気温は零下で、講堂には暖房などいれられていない。むろん、教室にも最低限度の暖房しかいれられていない。執事は暑い、寒いなどという理由で休むことはできないからだ。

講堂を出ようとする太郎の肩をぽん、とたたく手があつた。

ふりむくとメイド服を着たひとりの少女が満面の笑みをうかべて太郎の顔を見つめている。

山田洋子である。

彼女は太郎の同級生だつた。

「おめでと！ やつと卒業ね」

うん、と太郎はうなずいた。洋子のまるい顔は興奮でピンク色に輝いていた。洋子の笑顔を太郎はまぶしく思った。

「あんた、これからどうすんの？ 勤めるお屋敷はきまっているの？」

「ああ、きまつてる。大京市の、高倉男爵のお屋敷にはいることになつている」

まあ、と洋子の口がまるくなった。

「うらやましいわあ！ あたし、まだきまつていないのよ。はやく、どこかのお屋敷から口がかからないかしら……」

「きみだつたらすぐにきまるよ」

太郎の言葉に洋子にはっこりとなつた。

天真爛漫な洋子の態度に、太郎のころはちくりと痛んだ。

じつは洋子の勤め先がきまらない理由を太郎は知っていたのである。

洋子の父親が反対していたのである。

洋子の父は、ここ小姓村でホテルを経営していた。洋子はそのひとり娘である。父親の山田宗助は、娘に婿をとらせるつもりだつ

た。だから執事学校を卒業したとしても、大京市の屋敷に勤めさせるつもりはなかったのである。卒業生が屋敷につとめるには親の同意が必要となる。父親は洋子に内緒で、学校から紹介された勤め口を片っ端から断っていた。

なぜそんなことを知っていたかというところ、じつは太郎の母親は山田宗助のホテルでメイドとして働いていた。母親は宗助に信頼されていて、洋子のことも聞かされていたからである。

小姓村になぜ執事学校が開かれたかというところ、もともと山田宗助がここにホテルをつくったことにあった。冬はここは豪雪地帯になるが、夏は絶好の避暑地となる。夏には大京市から避暑に企業の幹部や、爵位をもつ人々があつまり、やがてかれらのあいだでよい執事やメイドがほしいという要求がここに執事学校を開設することになったのである。したがって卒業生の就職先も、山田ホテルを通じることになる。その洋子の父親が彼女をメイドとして就職させることに反対しているのだから、無理なことだ。

太郎は講堂の外へ出た。

いきなり舞い散る雪に太郎と洋子の全身はつつまれた。

と、傘が差し出され、雪からふたりをまもってくれた。

傘を差しのべたのは太郎の母だった。

「おめでとう」

母は今日は着物を着ていた。

太郎はうなずき、洋子と肩をならべて校庭へ出た。校庭にも雪がつもり、校舎のちかくに植えられた桜の木はまだ芽さえなく、さむざむとした姿をさらしている。まだこの地方では来月にならないと満開の桜というわけにはいかない。この桜が咲くころは太郎はすでに大京市の屋敷に勤めているだろうから、卒業あとの桜は見ることはできないわけだ。

校庭には卒業生が三々五々、父兄と一緒に帰宅の途についていた。校門にでると一台の高級車が停まっていた。ボンネットはまるくふくらみ、煙突がつきだしている。煙突からはもくもくと大量の煙

がふきだしていた。蒸気のちからで走る蒸気車である。この村、ただ一台の自家用車であった。

「がちゃり、と後部ドアが開き、なかからでっぷりと太った紳士が顔をのぞかせた。」

「パパ！」

歓声をあげ、洋子はおおきく開いた紳士の腕のなかに飛び込んだ。洋子の父親の宗助である。

「卒業おめでとう、洋子！」

洋子はうなずき、宗助のとなりに腰をおろした。そして太郎と太郎の母をふりむき声をかけた。

「太郎、送っていくわ。ね、パパ。いいでしょう？　こんな雪だもの。一緒に乗せていってよ」

宗助氏はうん、とうなずき手招きをした。

「ふたりとも乗りなさい」

礼を言って太郎と母親は高級車に乗り込んだ。後部座席はひろく、六人が向かい合わせに座れる。前部の運転席のあいだにはしきりガラスがあり、ふたりが乗り込むと宗助氏はマイクをつかつて運転手にやってくれと命じた。運転手はうなずき、ハンドルをにぎり、車を発車させた。

高級車はすべるように走り出す。タイヤにはチェーンがまかれ、がちゃがちゃと騒音をたてた。雪が正面から吹き降り、ワイパーがせわしくなく回転した。

「ねえパパ。太郎は大京市の高倉男爵のお屋敷に勤めることになったんだって。どうしてあたしには口がかからないの」

洋子につめよられ、宗助氏は困った顔になった。彼女を勤めさせる気はないことをまだ言っていないからだ。太郎と母親はふたりの正面の席にきちんと膝をそろえ、静かにすわっていた。

「ねえ、教えてよ。パパのところに大京市のいろんなお屋敷から紹介の手紙がくるんでしょう？」

宗助氏は息をつめ、なにかを決意したようだった。

「お前には勤めさせる気はないよ」

なんですって……！

洋子は目を丸くした。

宗助氏は言葉をかさねた。

「考えてみる。おまえはわたしのホテルのたったひとりのあととりだ。そのお前がふらふら大京市へいったら、ホテルはいったいだれが継ぐんだ。おまえは婿をとって、わたしのホテルを継ぐんだ」

洋子は真っ赤になった。ふたつの目に涙がたまる。

「ひどいわ……。それじゃパパがあたしのところへ来る紹介状を握りつぶしていたということじゃない。どうしてあたしを執事学校にいかせたのよ！」

「ホテルの経営に執事学校でならったことは役に立つと思ったからだ。なにしろ客商売だからな。大京市のお金持ちや爵位をもつ主人につかえるのと、ホテルのお客にじゅうぶんなおもてなしをするのは同じ事じゃないか」

違うわ！ と、洋子はさげんだ。

両手で顔をおおうとひいーっ、と泣き始めた。宗助氏は無然とした顔でいる。

車は山田ホテルの玄関に近づいた。

雪の中、ホテルの全景が見えてきた。古典様式の、ふとい列柱が前面に特徴的な建物であった。いまはシーズン・オフでホテルには客はほとんどいなかった。

車が停車すると太郎と母親は宗助氏に礼をいって車から降りた。

洋子はまだ泣いている。父親の宗助氏は腕をくみ、黙っていた。

ふたりの住んでいるのはホテルに隣接している従業員宿舎だった。車がホテルについたところは雪もやんでいて、ふたりは雪がつもったホテルの前庭からまわって宿舎へ帰った。

ふたりにあたえられているのは二間と台所、そしてちいさな浴室がそなえられている部屋である。部屋にはほとんど家具らしい家具はなく、太郎がつかっている勉強部屋には粗末なすわり机があるだ



けだった。机のうえには太郎が使っていた教科書がきちんと積み重ねられている。教科書のタイトルを見ると執事学校で教えられている教授内容が推測される。

礼儀作法の本が置かれているのはもちろんなのだが、国語、歴史、数学、英語などふつうの教科の本もある。さらに格闘術の本があるのを目を引く。なぜなら執事の主人になる人間はたいいてい社会的に重要な位置にいるものが多く、そういう人間は暴漢におそわれる可能性もあるからだ。したがって執事の教科課程には、主人を守るための格闘術も教えられる。主として合気道のようなものだが、主人を守ることに主眼がおかれているため特殊なものになっている。たとえば銃にねらわれたとき主人の盾となって犠牲になるというような心得も教えられる。

太郎はここで母親と二人暮しである。

父親はいない。

太郎がものごころつくころはすでにふたりだけで、なんとか母親に父親について質問したのだが母は言葉をにこしていた。

やがて太郎もそういうものだと思いはじめ、父親のことを母にたずねるのをやめていた。

ふたりは四畳半にきちんと正座して相對した。母親はふところから一通の手紙をとりだした。

まっしろな、刺繍のついた封筒である。封蝋があり、未開封であった。

「高倉男爵のお屋敷からとどいた手紙。まだ封はきっていないからおまえお読み」

うん、とうなずくと太郎は母親から手紙を受け取ると机の引き出しからペーパー・ナイフをとりだし封をきった。

なかからは男爵邸からの紹介状があり、地図と汽車の切符が同封されていた。切符は一等席が予約されている。

いよいよお勤めだ。

太郎の胸にあらたな希望がふくらんだ。

「高倉様のお屋敷にはおまえの父親が勤めていたのよ」

母親の言葉に太郎ははっ、となった。

彼女の口から父親のことが出てくるのは今日が初めてだ。

「父さんが？」

母親はうなずいた。

「あたしも高倉様のお屋敷で勤めていたのよ。それで父さんであつて……」

母親はきちんと膝においた手に目を落として話していた。

「お父さんは高倉様のお屋敷で筆頭執事まで昇進して、当時は最高の召し使いと言われたわ。だからおまえに高倉様から勤めるよう紹介状がきたのよ。おまえが高倉様に勤めることになったら、父さんのことを聞かれるかと思つて話すことにしたのよ」

太郎はゆっくりとうなずいた。

「わかつた。ぼくも父さんに負けないようがんばるよ」

母親の目はうるんでいた。今日、はじめて見せた彼女の表情であつた。

太郎はたずねた。

「それで父さんはいまどこにいるの？」

「おまえが生まれたころ死んだよ」

母親はそう言う顔と顔をそむけた。太郎はなにかほかのことを聞きたいとおもつたが、彼女はそれ以上言う気はなさそうだった。

「そう……」

太郎はあきらめた。

翌日、太郎は汽車の車中であつた。

駅ホームは太郎と同じく、大京市やその他の都市のお屋敷に勤めることになった執事やメイドの卵が汽車に乗るため混雑していた。小姓村のこの駅が込み合うのは執事学校が卒業生をおくりだすこの時期である。ホームでは息子や娘をおくりだす両親と、いまから勤めに出る執事やメイド服の卒業生が最後のわかれをおしんदै

る。

列車の先頭の気動車からは、しろい蒸気ともくもくとした黒い煤煙がさかんに噴きあがっている。燃料の石炭の品質がわるいのか、かすかに硫黄くさい匂いが漂っていた。

太郎はただひとり、汽車の一等席にすわっていた。母親はこなかった。ホテルの仕事があつたからだ。

洋子はこなかったな……、と太郎は思った。

あのあと洋子は父親とどんな話をしたのだろう。聞くところによれば洋子の母親も父親とおなじ意見だそうだ。両親が反対しているからには、彼女が北京市のお屋敷に勤めることは不可能である。太郎は母親がホテルの従業員であつた関係で幼なじみだった。学校でもっとも親しくしていたのは彼女であり、だから出発のとき見送りにくるのではないかと淡い期待もあつたのだが、やはりくるはずもなかったのである。

ぴりりりり……。

駅員が笛をふき、ぴーっ、と汽笛がさけぶ。

ごっとな、と汽車が揺れ、走り出す。

ゆつくりと駅ホームが窓の外、後ろにながれ、見送りの父兄が手を振っていた。

やがてホームがとぎれ、小姓村の雪景色となった。

この日、前日の雪はやんですっかりと晴れ上がり、真つ青な空に雪景色がしろく輝いていた。

太郎は窓のガラスをふいた。車内は暑いくらいに暖房がきいていて、ガラスはふいてもふいてもすぐ曇った。

「ここ座ってもいい？」

声をかけられ、太郎は硬直した。

この声はまさか……。

顔をあげると洋子の姿があつた。

両手におおきなバッグをかかえている。

太郎が答える前に洋子はとなりに腰をおろしていた。

「どうしたんだい」

ぼうぜんと太郎は口を開いた。洋子は悪戯っぽく舌をだした。

「黙って出てきちゃった。あたし、どうしてもメイドになりたいんだもの」

「黙って出てきたって……、それじゃきみのお父さんとお母さんは？」

「知らないわ！ あたし、ホテルを継ぐ気はないもん」

彼女はすまして答えた。

ああそう……、と太郎は答えるしかなかった。洋子の頑固さは子供のころから知っていた。いったん言い出したら最後、洋子はじぶんの決心を翻したことはない。

洋子は足もとにおいたバッグの口を開き、なかから蜜柑をとりだした。

「ね、食べる？」

いいよ、と太郎は断った。ああそう、と洋子は蜜柑の皮をむきはじめ、房を口にほおりこんだ。もぐもぐと口を動かしながら太郎に話しかけた。

「ねえ、あんたの勤め先の高倉男爵さまにあたしのこと話してくれない？ あたしもそこに勤めたいんだ！」

「そんなこと、できるわけないよ」

ケチねえ……、と洋子は肩をすくめた。太郎は彼女のことを心配になった。

「いったい黙って出てきて、これからどうするつもりなんだい？」

「あんたが紹介してくれないなら、あたしはあたしでなんとかするわよ。大京市には職業安定所ってのがあるでしょ？」

「でも、きみは未成年だぞ」

「なんとかなるわよ」

自信満々に洋子はこたえる。まるつきり、へこたれる様子はなかった。

窓の外の景色が一面の雪景色から緑の芽吹く春の景色になった。汽車は一週間走り続けた。夜になると乗車係がまわって客席の椅子をベッドに仕立ててまわる。太郎と洋子は二段ベッドの上下で就寝した。朝昼晩と太郎と洋子は食堂車で食事をとった。途中、太郎の同級生は乗り換えのため汽車を降りていき、残ったのは太郎と洋子だけだった。なんとかトンネルをくぐると春らしく、点在する桜が満開の花吹雪を散らしている。やがて家々が密集しはじめ、都会の景色となった。

旅の間、洋子は息も継がせず喋りまくった。都会についたらすぐ就職先をさがすこと、そしてメイドになったら最高のメイドになって見せることなど将来の希望を途切れなく話した。太郎はただ、聞いているだけだった。

都会に出るのははじめてであるが、それでも洋子の話すことはあまりにも希望的観測がおおいことはわかった。もしも、という要素がおおすぎるのである。太郎はほんとうに彼女のことを心配になっていた。

建物は二階建て、三階建てがおおくなり、やがて一面に十階以上のビルが立ち並ぶ景色となる。車内を車掌がまわり、あと数分で駅に到着することを連呼し始めた。乗客は思い思いに荷物を手に、ざわざわとしはじめた。

ごこん、ごこん、と汽車の速度が遅くなり最終駅に到着した。

さすがに都会の駅だなあ、と太郎は思った。

見上げると鉄骨の天井がアーチになっていて、ホームにもいままで見たことがないほどの人々が行き交っている。太郎と洋子は肩をならべて駅のホームに降り立った。同級生のほとんどはその前の中継駅におりていて、ホームに下りた学校の卒業生はふたりだけだった。

汽車はもくもくと煙をあげ、ホームの煙だしから煤煙が吸い込まれていく。天井には明り取りの窓があり、しろい陽光が何本もななめに差し込んでいた。

「なあ、やっぱりきみの両親には連絡したほうがいいよ。これからぼくは高倉男爵のところへ行くんだけど、一緒にこないか？ 男爵に頼んで、きみの家に連絡してもらおうから」

「いいわよ！ あんたの世話にはならないわ！」  
憤然として洋子はこたえた。

くるりと背を向けると両手にバッグをかかえ歩き出す。

彼女の背に太郎はさげんだ。

「かならず連絡してくれよ！」

洋子は振り向きもせず、さっさと人ごみに消えた。太郎はあきrameて肩をすくめた。

駅を出ると太郎は立ちすくんだ。

これが大京市か！

目の届く限り背の高いビルが立ち並んでいる。ビルの間に見えるのはあれは高速道路だろう。あらゆるところに人が群れている。そして車の数！

太郎はその車のおおくが内燃機関であることに注目した。小姓村でただ一台の車は山田宗助氏がもっていたあの高級車であるが、ここには道路という道路を車がうめつくしている。その多くがガソリンを燃やす、内燃機関であった。山田宗助氏所有のあの車は蒸気エンジンで動く。太郎の鼻はガソリンが燃えるにおいをかぎとっていた。これがガソリンのにおいか……。

太郎はバス停に急いだ。

地図にはバスに乗るよう指示があつたのである。

バスをおり、太郎は手に持った地図を確認した。

高倉邸はたしか、このあたりのはずである。

所番地をたしかめ、ゆつくりと歩く。

駅前の騒々しさとくらべ、このあたりは静謐が支配している。かつてはこのあたりは旧幕府の旗本が住んでいた地域で、いまはお屋敷町になっていた。ひとつひとつの屋敷の敷地はひろく、閑散とし

ていた。

ようやく太郎は目的の屋敷を見つけた。

巨大な石造りの門が太郎の行く手に立ちはだかっていた。鉄製の門扉は閉まっていた。

手紙には門柱のボタンを押すよう指示されていた。

それを探し当てると近づいた。

指を押し当て、まつ。

と、ボタンのうえの四角い窓が明るくなって、そこに人の顔がうかんだ。

黒縁の眼鏡をかけた、長い顔の男である。男はじろりと太郎の顔を見つめた。

「だれかね？」

太郎は息をすいこんだ。これがテレビジョンか……。話しには聞いていたが、目にしたのははじめてである。

「只野太郎ともうします。このお屋敷に執事見習いとしてまいりました」

男はうなずいた。

「ああ、話は聞いている。はいりなさい、いま門を開ける」

がちゃん、と音を立て鉄製の門扉が開いた。どこかでモーターのうなる音がする。

太郎の目の前に高倉男爵の屋敷が姿をあらわした。

「さあ、ぐずぐずしないで中にはいりなさい」

スクリーンの向こうで男が指示した。太郎はうなずいて屋敷に足を踏み入れた。

ふたたびモーターの音がして門扉が閉じはじめた。門に押されるようにして、太郎は歩きはじめた。

ざくざくざく、と足もとの砂利が音をたてる。屋敷への道にはこまかな砂利が敷き詰められている。はるかむこうに三階建ての建物が見えていた。やや黄色がかった石造りの建物である。太郎は歴史の授業で習ったフランスのベルサイユ宮殿を思い出した。道の両側

には芝生と、きちんとかりこんだ木々が生えていた。

建物の正門が開き、さきほどの眼鏡の男が待っていた。

太郎が近づくと男はじろりと太郎の全身をながめた。男の背はゆうに二メートルはあり、その高みから見下ろしている。太郎は見上げる格好になった。

「わたしはこの屋敷の執事頭の木戸だ。今日からおまえの面倒を見るよう、だんな様に命じられている。ついてきなさい！」

そう言くと、さつさと背をむけて歩き出した。太郎はあわてて男の背後について歩き出した。正門から屋敷の内部にはいり、応接間から廊下へ出る。廊下は広々としていて、窓からはななめに日差しが差し込んでいた。廊下の壁には無数の油絵がかけられ、天井からはシャンデリアが下がっている。

かつかつかつ、と木戸と名乗った男は革靴の靴底をひびかせ早足で歩いていく。靴底には鋳がうつているらしい。やがてひとつのドアの前に立ち止まった。

どっしりとした檜の木の一枚板でできたドアである。木戸はドアのノッカーをたたいた。

おはいり、という声がして、木戸はかるく頭を下げると両手でドアを開いた。

暖かな空気が室内から押し寄せた。窓側に暖炉がしつらえ、炎がゆらめいていた。

そのちかくに巨大な事務机があり、ひとりの老人が驚ペンをはしらせていた。老人は車椅子にすわっていた。

「ああ、ちよつと決済しなければならぬ書類があるから待っていてくれ」

老人は片手で応接セットを指し示した。太郎は木戸を見上げると、木戸はかるくうなずいた。指し示された応接セットの椅子に太郎はそろりと腰をおろした。

その老人はそうとうな年令らしく、頭のはんぶんはきれいに禿げ上がり、そのまわりをとりまいている髪の毛はすっかり白くなって



いた。鼻のうえにはちょこんとまるい老眼鏡がのっついて、ペンはしらせながらときどき老人は眼鏡の位置を直していた。

さらさら、さらさら……

ペンのはしる音が室内に響いている。

数枚の書類に署名を書き終えた老人は、書類を箱におさめるとペンを置き、両手を組み合わせ顔をあげた。木戸が老人のうしろにまわり、車椅子を押して部屋の真ん中に移動させた。

「待たせてすまなかったね。きみが只野太郎くんか」

さつと立ち上がった太郎は老人の前に進み出ると片膝をつき、頭をさげた。

「お目にかかれて光栄です。高倉男爵とお見かけします」

うん、と男爵はうなずいた。

「きみのお父さんの只野五郎くんことは覚えているよ。わたしがまだこんな車椅子のやつかいにならなくてもいいころ、仕えてくれたが、とても優秀な執事だった。きみもそうなるといいんだが」

「努力いたします」

「さてと、これから例の儀式をしなくてはならないんだが……。しかし儀式をするのはわたしではない」

え？ と、太郎は顔をあげた。

太郎の顔を見て、老人はにっこりと笑い木戸を見た。木戸はうなずいた。

つかつかと部屋の一方に歩いていくと、続き部屋へのドアを開いた。

「お嬢さま、お父さまがおよびです」

はい、と返事がしてひとりの少女が室内にはいつてきた。

ぱつ、と室内に花がさいたようだった。

上から下まで白づくめの衣装に身をつつんだ少女がはいってくる。髪は毛はながく背中まで達している。肌は磁器のような白さだった。「娘の美和子だ。儀式は娘とやってもらいたい。美和子、こちらが

只野太郎くんだ」

美和子とよばれた娘はかるく頭を下げ、太郎を見つめた。

卵形の顔にはつとめるほどおおきな瞳の少女である。化粧はまったくしていないのに、唇は朱をさしたように赤い。

「美和子は今年十六才でね、きみとひとつ違いだ。おなじくらいの年頃だから、むしろ儀式は娘にさせたほうがいいと思ったんだ」

太郎は娘の前に進み出るとふたたび片膝をついた姿勢になった。

「お嬢さま、只野太郎でございます。あなたのしもべとさせていた  
だきたくお願い申し上げます」

くすくすと娘は笑った。笑いながら片手をのばし、太郎の頭にちよこんと触れた。触れたとたん、すぐひっこめる。

男爵はにつこりと笑いをうかべた。

「さあ、これで忠誠の誓いは終わった！ 今日からきみはこの屋敷の召し使いだ」

はっ、と太郎は頭をさげた。

「ありがとうございます！ だんな様、お嬢さま、そして高倉家のお家族のみなさまのため忠誠をつくします」

これで只野太郎は高倉家の召し使いとして認められたのである。

忠誠の誓いは、あらたな召し使いが奉公にあがると同時に屋敷の主人とかわされる儀式である。これによっておたがい、主人とその召し使いとしての自覚を得るのである。

太郎の執事としての人生がはじまったのだ。その日、太郎は母親に手紙を出した。

## 2

執事の仕事は無限にあった。

といっても太郎は見習いであるから執事というよりした働きにすぎない。最初は窓の開け閉めからはじまった。

高倉家の屋敷は广大で、部屋数は百をこえる。その部屋の窓を朝起きるとひとつひとつまわって開け放つのが仕事である。なぜなら

窓をしめきりにしておくくと空気がこもり、家具や柱にわるい影響がでるからである。

すべての窓を開け放ったところ昼過ぎになる。そしてつぎは窓を閉める作業になる。こんどは窓を閉め終わるころ日が暮れるのである。そんな作業を数日続けたあと、ようやく執事らしい仕事があたえられた。

つぎにあたえられた仕事は手紙の運搬であつた。高倉家には毎日大量の手紙が届けられる。たいていは高倉家の財産に関する報告書で、男爵は朝一番にそれらの手紙に目を通し、承認のサインをするのである。

郵便局差し回しの車は毎朝、数個の袋いっぱいの手紙を届けにくる。それを受け取り、男爵へ運ぶのが太郎の仕事だつた。男爵は承認を要する手紙を選ぶと、午前中いっぱいをつかつてそれらにサインをする。あるとき男爵は太郎に話しかけた。

「まったく毎日、毎日サイン、サインだ。いいかげん、わしの署名など必要ないようにしてくれんかな」

太郎が黙っていると男爵は続けた。

「ほんらいはわしの署名など必要ないんだよ。わしはほとんど引退している身だからね。これらの書類はわしが後見している会社の決裁書だ。そろそろこういう書類仕事から解放してくれないと困る……」

ぶつぶつとつぶやきながら男爵はペンをはしらせた。どうやら男爵は書類にペンをはしらせるだけで、中身はほとんど読んではいないようだった。

ひとしきり署名をおわると、その書類は太郎が木戸の元へもっていく。木戸はうけとり封筒に入れて返信にまわす。朝まわってくる郵便局の車が手紙のたばを届けるさいに受け取る手はずになっているのである。受け取った太郎がそれを持って木戸の事務室にもって部屋を出ようとすると、男爵は太郎をよびとめた。

「待った。明日、娘の美和子が入学式なのは知っているかね」

は、と太郎は頭をさげた。彼女は明日、都内の師範女学校に入学する予定であることは木戸から聞かされていた。

「わしはこんな体だからね、入学式に出席はできない。かわりにきみについていつてもらいたいんだよ」

老人は車椅子の車輪をたたいた。

太郎はぼかん、と口を開けた。

「ぼくが、ですか？」

「そうだ。これからはわしについてまわるより、美和子についてあれの世話をしてもらいたいんだ。なにしろこの屋敷には娘とおなじくらいの年令の友達はひとりもない。メイドはいるにはいるが、みんな母親とおなじくらいの年頃ばかりだ。きみが娘についてくれれば安心だ」

太郎はうなずいた。執事の誓いはその家の娘との恋愛感情を禁じている。いくら年令が近いといっても、太郎は召し使いの身分をこえることはない。それは執事学校の教えに反し、徹底的に教え込まれることだ。つまり美和子にとってはもっとも安心できる存在であるわけだ。

「わかりました」

太郎は答えた。

その日から太郎は美和子付きとして屋敷のほかの召し使いに申し送りをされた。もちろんこの屋敷には太郎や木戸以外に多数の召し使いがいる。太郎が最初にすることになった窓の開け閉めもそんな召し使いのひとりの仕事だった。太郎以外の召し使いは、召抱えられて十年、二十年とたつベテランばかりで、太郎のような年令の召し使いはひとりもいなかった。

木戸とともに美和子のもとに連れて行かれると、彼女は手をたたいてよろこんだ。

「すてき！ あたし、太郎さんとはいいお友達になれそうね。よろしくお願いね」

はい、と太郎は頭をさげた。

それから太郎は朝起きると美和子のもとへ参上し、彼女のあとをついてまわることになった。

女学院への通学は、木戸が屋敷の車を運転して送り迎えをする。屋敷の車は蒸気車だった。たいてい、上流階級の車は蒸気車であるのがふつうである。内燃機関の車は、上流階級の家庭には普及していない。なぜなら内燃機関の車は騒音がひどく、またガソリンが燃えるにおいがきられるからだ。発進が容易という内燃機関の利点は、上流階級にはあまりアピールしない。蒸気機関の欠点は、ボイラーを温めておかないと機関を動かすことができないことだが、上流階級の人々の予定はふつう数週間、あるいは数ヶ月さきまでびっしりとうまっていることがふつうで、その予定にあわせて車を整備しておけるから静かな蒸気機関の車を利用することを好む。

木戸の運転で、美和子と太郎は後部座席にならんですわる。運転中、美和子はさかんに太郎に話しかけるのだが、太郎は必要最低限のことしかこたえないようにしていた。

あるとき美和子は太郎にこう話しかけた。

「まったく、あなたたつてあたしがなにを言っても”はい”か”いいえ”しか言わないのね」

運転席の木戸は美和子の不満にこたえた。

「それが召し使いの心得です。分を越えた発言は、執事になる教育で厳しく制限されております」

美和子はむっ、となった。

「でも、あたしは太郎さんを召し使いなんて思っていないませんわ！

お友達と思っているのよ」

太郎はこたえた。

「お嬢さまのそのお気持ちだけで十分でございます。わたしはつねにお嬢さまとお家族の召し使いであることを忘れたことはございません」

「もっ……」

美和子はぶつ、とふくれそつぽをむいた。あとで木戸に太郎は美和子への答えをほめられた。

「あれでいい」

木戸は肩をすくめた。

「召し使いはあまりでしゃばらないことがかんじんだ。お嬢さまはああいっご性格だから、われわれにも友達のように接してくださるが、おまえはつねにじぶんが召し使いであることを忘れてはならんぞ」

はい、と太郎はこたえた。

女学院へ美和子が登校すると太郎は学院の召し使い部屋へ通される。そこには美和子とおなじように召し使いを同道した同級生の執事や、メイドたちがひかえていた。そこで一番若いのはやはり太郎だった。ほかの召し使いはほとんど老人であつた。かれらは太郎がやってくるといちように歓迎した。

「あんた、小姓村出身だつてね？」

召し使いのなかで最長老の老人が太郎に話しかけてきた。太郎はうなずいた。

「そうかい。小姓村の執事学校出身者は、この業界で多いんだよ」

「間宮さんは？」

老人は間宮健一といい、執事になって五十年だという。間宮老人は首を振った。

「いいや、あたしは父親が執事だった関係で、親爺にしこまれたんだ。むかしはたいていそうだったね。只野太郎さんと言ったね。もしかして只野五郎とはなんか関係あるのかね？」

「ぼくの父親です」

太郎のこたえに間宮老人は目をまるくした。そしてほかの召し使いたちも、ふたりの会話を黙って聞いているだけだったが耳をそばだてていた。

「間宮さんは父さんのことをなにか知っているんですか」

老人はややあわてた様子だった。

「ん、いや……。知っているとも。うん、知ってるよ。なにしろ最高の召し使いだっただからね」

どういうことだろう？ 太郎は思った。父親の話が出ると、みないちようにこういう反応が返ってくる。なにか太郎の父親で話したくないことがあるのだろうか？

召し使い部屋には一台のテレビの受像機が置いてあった。太郎はそんなものを見たのはじめてだった。ためしにだれもいないとき、こっそりスイッチを入れてみたことがある。とたんに騒々しいバラエティ番組がはじまり、太郎はあわててスイッチを切った。こんなもの、だれが見るのだろうかと思った。そういえば、美和子と登校するとき、車の窓から家々に無数のアンテナが林立しているのを見て不思議に思ったことがある。木戸に質問すると、あれはテレビのアンテナだと教えられた。木戸はさも不愉快そうに、あんなものを見るのは平民だけだとはきすてたものだ。

そういうものかと思っていたが、それでも太郎はこっそりとだれもいないとき召し使い部屋でテレビを楽しんだ。

授業が終わると放課後である。しかしまだ帰れない。美和子の課外活動があるからだ。美和子は女学院で合気道や弓道などの武道を習っていた。もちろん華道や茶道、書道なども習うので、彼女の自由時間というものはほとんどない。もっとも上流階級の子弟というものは例外なくそういうものを習っておかないと、社交界で恥をかくからである。

夕暮れ近くなってようやく美和子の課外活動の時間がおわり、木戸が車を運転して女学院の門の前にやってくる。美和子と太郎は乗り込み、帰宅する。

毎朝、太郎は美和子を起こしにかかる。寝室にはいり、美和子をおこし、洗面器にぬるま湯を用意する。美和子は洗顔し、歯を磨き朝食となる。太郎は屋敷の調理場から美和子の朝食をささげもって給仕をする。

彼女の朝食がおわるころ郵便局の車がやってくる。太郎は郵便物

をうけとり、昨日まで男爵が決済した書類を封筒に入れたものを局員にわたす。

ある日のことだった。太郎はいつものように朝の郵便をうけとり、男爵にとどける決裁書の封筒をよりわけていた。決裁書の封筒には男爵家の家紋が印刷されているから見分けがつく。そのなかに見慣れない印刷の封筒があり、いつものように別にしようとしたところ、木戸が口をはさんだ。

「ああ、それもだんな様にお渡しして、署名をいただいでくれ」

「でも、これは決裁書の封筒ではないですよ」

「いいんだ！　ともかくだんな様の署名をもらえばいいようになっている」

木戸はむつとなつて命令した。太郎は内心首をかしげつつもその封筒を男爵に届けた。

男爵はいつもと違う封筒がまじっているのに気づき、太郎に質問した。

「これは？」

「木戸がだんな様に署名をいただくよう、命じられました」

ああそうか、木戸がね……、と男爵はさらさらといつもものようにペンをはしらせた。太郎はその書類と一緒にまとめ、木戸にわたした。

太郎は木戸が書類の束をうけとるとかれの仕事部屋（木戸は執事頭という地位により屋敷で専用の部屋をあたえられていた）からさがるときふりむいた。木戸はあの書類をさつとふところにしのばせていた。

そんな生活が一月も続いたころ、彼女に來客があった。

その日は日曜だった。

太郎は木戸に命じられ、庭の草むしりをやっていた。

門の外に車が停まる音がして太郎は顔をあげた。

まぶしいほどぴかぴかに磨き上げたてられたまっしろな塗装の車が停まっていた。金のラインが車体にはしり、ボンネットには銀製



のマスコットが輝いている。運転手は女だった。後部座席には若い男とその召し使いらしい老人がならんでいた。老人はドアを開けると門の呼び出しボタンを押し、門番となにやら会話をかわした。やがて鉄製の門扉が開き、車は屋敷内にはいつてきた。

正面ドアの前に車は停車すると、あの若い男が外へ出てきた。ドアが開き、木戸をはじめ屋敷の召し使いが勢ぞろいをして若い男を出迎えた。男は太郎とおなじくらいの年頃だった。背は高く、頭ひとつくらいは太郎より高い。着ている服は詰襟で、色は目を奪うほどの真紅だった。詰襟の服はコートくらい長く、膝丈であった。髪の毛は金髪に染め、それをリーゼントにしていた。男が屋敷にはいるとき、その背中が見えた。背中には金色の刺繍で”男”という文字が描かれている。

太郎は目を見張っていた。

若い男に注目していたわけではない。車を運転していた女の運転手を見ていたのである。

運転していたのは山田洋子だった。

「ひさしぶり」

太郎が駐車場に近づくと彼女は気づいて声をかけてきた。洋子は車体に羽簾をかけ、ほこりをはらっているところだった。

「ああ、ひさしぶりだね。運転手になったんだね」

洋子はうなずいた。

「紹介所を見つけて、あのお屋敷にメイドとしては入れたの。でもあまりメイドの仕事はないから、思い切って運転免許をとって、運転手の仕事をさせてもらっているのよ。どう、この服にあってる？」

彼女は運転手の制服の胸をはった。太郎はうなずいた。

「ああ、にあってるよ。ところでご両親に知らせたのかい」

洋子は口を真一文字にむすんだ。

「知らせてないわ。知ったら、お父さんきつとやってきて連れ戻そうとするにちがいないもの。ねえ、太郎。あんた、手紙なんか書いてないやよ。あたしまだまだ一人前のメイドになってないんだから」

一人前のメイドになったら村に帰るから、それまで知らせないでね」  
「わかった。ところできみのご主人はなんてひと？」

「知らないの？ いやーだ！ 肝心なことであんた、なにも知らないのね。あのかたは緒方勇作さまといって、ここの一人娘の美和子さまの許婚よ！」

どきん。

太郎の心臓がはねあがった。

「なんだ、こんなところにいたのか」

背後から木戸の声がして、太郎はふりむいた。木戸は不機嫌そうな顔つきで立っている。

「お嬢さまがおよびだ。すごい」

はい、と太郎はこたえ洋子にちらりと目をやると駆け出した。

「あまりほかのお屋敷の召し使いと仲良くなるのは考え物だぞ」

さきにたった木戸はあたりにだれもないのを確かめ怖い顔でそう言った。

「わかってます。彼女はぼくと同郷なんです」

「なんだ、そうか……。まあいい。お嬢さまがお前を紹介したいと言つてな。それで呼びにきたんだ。お客は緒方勇作さまとおっしゃって……」

「許婚なんでしょう？」

「なんだ、知っていたのか。まあ、そうだ。緒方財閥のあととりだよ。さあ、こちらだ」

来客用の部屋に美和子と父親の高倉男爵、そして緒方勇作とその執事がひかえていた。木戸にともなわれ入室した太郎を、勇作が正面から見つめてきた。

勇作はにっこりと笑いかけた。

「やあ、ぼくは緒方勇作。美和子さんの許婚だ。きみが彼女の身の回りの世話をしていると聞いて、一度お目にかかりたいと思ったので呼んでもらったんだ」

そう言つと勇作は右手をさしだした。太郎は進み出て握手をかわ

した。

「只野太郎といえます。お目にかかれ、うれしく思います」

勇作はじつと太郎を見つめた。

「ふむ。もしぼくが美和子さんと結婚することになったら、きみはぼくの召し使いになるわけかな？」

「ぼくは美和子さまの身の回りをおおせつかつておりますから、美和子さまがひきつづき仕事をおあたえくだされば、とうぜん勇作さまのお世話もいたします」

「なるほどね。執事らしいこたえだ。今日は一度、美和子さんの顔を見たいと思つて押しかけてきたんだ。なにしろ許婚といつても、一度も会つたことないからな。でも来てよかったよ。こんな美しい女性が許婚とは思つてもみなかつたからね」

最後の言葉は美和子に向けられた。勇作の賛辞に美和子は顔をあからめた。

車椅子の高倉男爵は声をあげて笑つた。

「わしも勇作さんのうわさは聞いているが、なるほど聞きしに勝る伊達男だ。これからもうちの娘をよろしくたのむ」

男爵は上機嫌だった。

今日は顔合わせだけのようで、勇作は太郎の給仕で紅茶をいっぱいすすただけで帰つていった。

勇作が帰り、美和子と太郎はふたりだけになった。

美和子は窓のそばにたち、庭を見下ろしていた。太郎は彼女の背後から声をかけた。

「お嬢さま、なにかご用は？」

「いいえ、ないわ……」

頭をさげ、退室しようとするふいに美和子はふりむいた。

「待つて！　ねえ、太郎さん。許婚の話し、はじめて聞いたのよね」  
はい、と太郎はこたえた。美和子は唇をふるわせていた。

「お嬢さま？」

「本当はあたし、許婚なんていやなの。子供のころから結婚相手が

決められているなんて……どうしたらいいのかしら」

太郎は黙っていた。召し使いがなにか言うべき場面ではない。

美和子はふたたび窓に顔を向け、そつとカーテンに手をかけた。

「下がっていいわよ」

太郎は頭をさげ退出した。

翌日、郵便局員が自転車にのって高倉家の正門にやってきた。対応したのは太郎だった。

「郵便です」

正門のインタフォンで局員が話しかけるのを、太郎は屋敷内の応答装置でうけた。太郎は内心首をかしげた。いつもは朝一番に郵便局さしまわしの車で届けにくるはずなのだが、今日はこういう風のふきまわしだろう。

ともかく受け取りに太郎は出て行った。

門の扉のすきまから差し出される手紙を、太郎は受け取りあて先を確認する。あて先は男爵になっていた。

「ごくろうさま」

一応礼をいい、太郎は手紙を手にも男爵の部屋へ急いだ。

部屋には男爵が美和子とともに昼餉をとっていた。今日は女学院は休日だった。

「だんな様、郵便がまいりました」

ああそつかと男爵は太郎から手紙を受け取った。封を切り、手紙に目を通した。

目を走らせた男爵の顔色がかわった。最初真っ赤になり、そしてあおざめた。ぐしゃりと男爵は手の中の手紙を握り締めた。

男爵の様子に美和子はかけよった。

「お父さま、どうなさったの？」

男爵は美和子を見上げた。車椅子の手すりをしっかりと握り締め、たその手はわなわなとふるえている。

「お、おしまいだ……。我が家は破産した！」

ぐっ、と息をのむとがくりと首がうしろに折れ曲がり目がくるりと白目になる。

「お父さまっ！」

美和子は悲鳴をあげた。

つかつかと太郎は男爵に近寄ると、心臓に耳をあて鼓動を聞き取った。男爵の心臓の鼓動はあきらかな不整脈を呈している。その鼓動が止まった！ 心臓麻痺だ！ 唇を見ると紫色になっていた。チアノーゼである。

太郎は男爵の上着のボタンをはずし、胸をあらわにした。両手をくみあわせ、いきおいよく心臓のあたりに打ち下ろす。

どん！

男爵の体のはねた。

太郎は男爵の体を床に横たえ、心臓マッサージをはじめた。一、二、三！ もう一度一、二、三！ リズミカルに手を動かし、その合間にマウス・ツー・マウスで人工呼吸をほどこす。

はっ、と男爵が呼吸をとりもどした。

「お嬢さま、お医者をおよびください」

太郎の命令に美和子のはっとなり、電話に駆け寄った。震える手で電話のハンドルをまわし、交換手をよびだした。

太郎は蘇生措置をつづけていた。

「太郎くんの緊急措置がよかった。あのままだと、男爵は死んでいただでしょう」

かけつけた医師は男爵の胸に聴診器をあて、つぶやいた。医師は若く、まだ四十にもなっていないようだった。もっともかれは親の代から高倉家のかかりつけで、美和子とも顔見知りだった。美和子は医師につめよった。

「お父さまの病状はどうなのですか？」

医師は首を振った。メタルフレームの眼鏡をはずすと神経質にレンズを磨く。

「よくないです。お年ですし、よほど心臓に負担をかけるようなことがあったようですな。たぶん、今夜が峠でしょう」

美和子の目に涙がたまり、ほろり、と一粒こぼれた。一粒こぼれたことでぼろぼろとあとからあとから涙が零れ落ちる。唇をかみしめ、美和子は立ちつくした。

男爵の寝室には太郎をはじめ、木戸やそのほかの召し使いがつめかけていた。みな心配そうな顔で男爵の寝顔を見つめている。

太郎はそつと男爵が最後に手にとった手紙を取り出した。あとき男爵の手を離れた手紙が床に落ち、それを拾っていたのだ。

「なんだそれは」

木戸は見咎め、太郎の手から奪い取った。文面に目をはしらせた木戸は太郎をにらんだ。

「読んだのか？」

「はい。いけないことは知っていたのですが」

うむ、と木戸は顎をひいた。

「なんとということだ。男爵の事業がすべて抵当になっていたとは。これでは男爵にはなにも残らない」

木戸の言葉遣いが微妙に変化していた。

手紙の文面は男爵が資金をだしていた事業の一つが破産し、その連帯責任ではかの事業も連座破産になり、結局男爵のすべての財産が没収されたことをしめしていた。

破産。

衝撃は男爵の弱っていた心臓を直撃したのだろう。

医師が治療をつづけるため、寝室につめかけていた召し使いたちを追い出しにかかった。そろそろと召し使いたちは廊下に出てあちこちにかたまり不安げに顔を見合わせた。

木戸は手をぱんぱんと打ち合わせた。

「さあさああ、ここにいってもわれわれにできることは何もない。みんな自室に戻り、おとなしくしているんだ」

「あのう……」

庭番の老人が木戸の顔を見上げた。となりにはつれあいの老婆が夫の上着の裾をつかんでいた。

「なんだ？」

木戸は老人を見下ろした。老人はおそろおそろ尋ねた。

「いったいわしらはどうなるんでしょう。なんでもだんな様は破産なさったと聞きましたが、本当でしょうか」

空気が張り詰めた。みな、木戸の口元を見つめている。木戸は息をすいこみ、うなずいた。

「本当だ。だんな様は破産なされた」

「やっぱり、と召し使いたちはうなずきあつた。」

「それではこのお屋敷は？」

「没収となるな。家具も同様だ。男爵には何も残らないだろう」

「わしらはどうなるんで？」

木戸はにやりと笑いかけた。

「心配しなくてもいい。あとのことはわたしが手配する。みな、この屋敷に何年も奉公してきた仲間じゃないか。男爵のあと、この屋敷を受け継ぐ次の主人に仕えることができるよう、わたしが保証する」

召し使いたちの動揺が一気に鎮まった。みな嬉しげに木戸に頭を下げ、これからよろしくと口々に言い合った。

「だから心配しないで、いつもどおり仕事を続けてくれ。いいな」

はい、と召し使いたちはいつせいに声をそろえ自室へ引き上げていった。太郎は残り、木戸を見上げていた。木戸は太郎に気づくと眉をあげた。

「なんだ。まだ用があるのか？」

いいえ、と太郎は首を振ると自室へひきあげた。

引き上げながら太郎は思った。

木戸の態度はおかしい。なんだか事前にこのことを知っていたとしか思えない。しかもこの屋敷を没収することになる相手を知っているような口ぶりだった。

男爵の命は夜明け前に絶えた。

医師は懸命に手当てをしたのだが、どうやら男爵に生きる意欲というものがすっかり枯れ果ててしまったようだった。寝室から美和子の号泣が聞こえ、太郎は走り出した。寝室にたどり着くと、医師が聴診器をまとめ、診療カバンを看護婦から受け取って出てくるどころだった。

「だんな様は？」

ああ、と医師はつぶやいた。

「なくなられた。午前二時三十分だった」

そうですか、と太郎は医師をねぎらい、寝室に入った。美和子は男爵のベッドに身をなげかけ、身も世もあらずという風に泣き崩れている。

太郎は立ちつくした。

やがて美和子は顔をあげた。そこに太郎がひかえているのに気づくと、ようやく自分を取りもどしたのか涙を拭いて立ち上がる。

「太郎さん、ありがとう。あのときあなたが心臓マッサージしてくれなければ、お父さまはあのままお医者さまにかかることもなく死んでいたわ」

「いいえ。あの処置は学校で習ったことを実行したにすぎません。だんな様のことは残念でした。わずか数ヶ月だけのおつきあいでしたが、男爵さまはすばらしいおかたでした」

そうね、と美和子は鼻をすすらせた。太郎は胸ポケットからハンカチを取りだし、彼女に手渡した。手にハンカチを押し込まれ、ようやく彼女はそれに気づいた。ありがとうとつぶやき、美和子は鼻をかんだ。そこではじめてじぶんが太郎のハンカチで鼻をかんだことに気づいたようだった。うつすらと笑い、あやまった。

「ごめんなさい。あなたのハンカチで鼻をかんだりして」



いいえ、と太郎は首を振り言葉をかけた。

「お嬢さま、元気を出してください。お父様はお嬢さまのお幸せを願っておいでです。いつまでもお泣きになっていると、どんな様がお嘆きになりますよ」

美和子はうなずいた。

高倉男爵の葬儀は簡素だった。男爵の血縁者はあまり存命しておらず、集まった人々も男爵の破産を知っており、そのことに触れられはしないかとびくびくして盛り上がらなかった。

葬儀が終わり、太郎は屋敷の後片付けをしていた。木戸は書類の整理があると言って屋敷を留守にしていた。

車の接近してくる音がして太郎は顔をあげると、緒方勇作のしろい自家用車が敷地内にはいつてくるところだった。太郎は美和子の部屋へ急いだ。

ドアをノックして入ると、美和子がベッドの端に腰をおろし、ぼんやりとしていた。

「緒方勇作さまがいらっしゃいました」

太郎が声をかけると美和子は「え？」と顔をあげた。目の焦点があっていない。太郎の言葉を理解していないのかもしれない。太郎はさっきの言葉をくりかえした。

「そう……お通しして」

太郎は正面ドアに走った。ドアを開けると、勇作がやってくるのが同時だった。勇作のうしろに洋子が続いていた。今日の彼女は緒方家のメイドの服に身をつつんでいた。正式にメイドになれたんだな、と太郎は思った。洋子は太郎と目が合うと一瞬、口の端で笑いかけた。

「やあ、きみか」

「ようこそいらっしゃいました」

うん、とうなずくと勇作は両手をつしろ手に組んで屋敷内に入ってきた。

「美和子さんにお目にかかりたい」

「お部屋でお待ちになっております」

「案内してくれ！」

はい、と太郎は頭をさげ、先にたった。

美和子の部屋にはいると彼女はさきほどまでのぼんやりとした態度をかなぐりすて、いつもの毅然とした姿勢になっていた。ふたりは応接セツトの椅子にすわり、向かい合わせの姿勢をとった。

「お父さまのことは残念だった。ここからお悔やみを言わせてください」

勇作がそう話しかけると、美和子はかるくうなずいた。

「ありがとうございます。でも、今日は弔辞を言いにきただけではないでしょう？」

太郎はお茶の用意をしつつ、室内にはりつめた空気に神経をとがらせた。美和子の様子はどこかおかしい。

勇作はふつ、と笑った。

「まあね。今日から僕がこの屋敷のあたらしい主人というわけだ。それでこれからのことを相談したいと思ってね」

美和子のはつ、と息をのんだ。

「あなたが……」

「そうだ。僕が何をいうと思ったんだい？ この屋敷のすべての権利は、僕が買い取った。なにしろこれだけのお屋敷だ。政府の競売にかけるにはしのびなくてね。ああ、そうだ。召し使いのことは心配しなくてもいい。僕が責任をもつて、いままでの仕事を続けられるよう手配する。もちろん、きみもこの屋敷でいままでとおなじに生活していい」

美和子はどきまぎとしていた。

「わたし、わたしは……」

勇作はかるくうなずいた。

「ああ、そうか。きみと僕との結婚のことか。たとえきみのお父さんが破産なさったとしても、僕はきみとの結婚を破談にするつもり

はないよ。いずれ適当なとき……そうだな。きみが女学院を卒業したころ、結婚式をあげようじゃないか。卒業までの学費はすべて僕が負担しよう」

美和子は息をすった。

「お断りしますわ!」

「なんだって?」

「わたし、あなたと結婚するつもりはございません!」

勇作は太郎が運んできたティー・カップにちらりと目をやりおもむろに手を伸ばした。香料いれから一粒、ハーブの粒をとると紅茶にいれ、ゆつくりとかきまぜる。ひとくちすすり、唇をしめらせる口を開いた。

「なぜだい」

「それではわたし、あなたと対等のおつきあいはできませんもの。あなたのお金でこの屋敷に住み、あなたのお金で学業を進める。あげくのはてはあなたのもとへ嫁入りをはたす……。それではわたしはあなたの持ち物のひとつではありませんか!」

にやりと勇作は笑った。いままでかれが見せたことのない酷薄な表情だった。

「おもしろい……。きみがそうに考えると、ますますきみと結婚したくなってきた。それでこそ、僕にふさわしい花嫁といえる! いいだろう。それなら僕からきみにひとつ条件をだそう」

勇作は椅子から立ち上がった。

胸のボタンをはずし、そこからしろい封筒を取り出した。

太郎ははっ、となった。あの封筒は、あのとき男爵に渡したあの封筒と同じものだ。

勇作は封筒を美和子に渡した。

「開けてみたまえ」

美和子は封を切り、なかから一枚の紙を取り出し開いた。目を走らせ、奇妙な表情をうかべた。

「なんですの? これは」

「僕の所有する島のひとつに番長島というところがある。僕は年に一度、そこでトーナメントを開催している。国内で最強の番長をきめる大会だ」

「番長？」

「喧嘩に強いものの称号だよ。女ならスケバンと称される。その島に招待された全国の腕自慢の男女が、ここで一週間、勝負を決するのだ。そして最後に勝ち残った人間が、僕への挑戦権を獲得できる。僕との試合に勝てば、百万両の賞金を手にすることができる。もつともいままでその賞金を手にできた挑戦者はあらわれていないがね。どうだい、きみもこの大会に出て、僕と勝負をしてみないか。僕に勝てば、百万両を進呈しよう。それだけあれば、きみはこの屋敷を買い戻し、お父さんの事業を継ぐこともできるだろう。聞くところによると、きみは幼少から上流階級のたしなみとしてさまざまな武芸を身につけ、すでに師範代の腕前を持っているそうだな。大会に出るには十分な資格だ」

百万両。まるごと一企業を買収できるだけの金額である。たしかにそれだけの金があれば高倉家の再興にはじゅうぶんだ。美和子は尋ねた。

「なぜそんなことを？」

勇作はくりりと美和子に背をむけた。背中に刺繍されている”男”の文字が、窓からの日差しに照らされきらきらと輝いた。

「これは伝説のガ克蘭だ！ 初代の番長は全国の番長の頂点に立ち、このガ克蘭を作らせた。以来、最強の番長の称号を継ぐものは、このガ克蘭に身をつつみ最強であることを証明している。僕がこのガ克蘭を手にしてから五年になるが、いまだに僕がこのガ克蘭を奪い取ったものはいない。この五年、僕は待ち続けた。僕からガ克蘭を奪い取る人間を待つてね……。だからきみに挑戦してもらいたいんだ。最強の番長と、最強のスケバンの組み合わせの夫婦なんて、最高じゃないか」

勇作は美和子に顔を近づけた。ほほが紅潮し、目はきらきらと輝

いている。

「ごくり、と美和子はつばをのんだ。  
かすかにうなずく。」

「いいですわ！ わたし、その大会に出場します」

「よく言った！ それでは番長島で会おう！」

「わかりました。太郎さん。勇作さまを玄関までお送りなさい」

はっ、と太郎はうなずきドアを開けた。勇作はにやりと太郎に笑いかけた。

「きみも番長島にくるのかい？」

太郎はうなずいた。

「はい。わたしはお嬢さまの召し使いですから、お身の回りのお世話をさせていただくのは当然です」

ふん、と勇作は鼻で笑うと大股に歩き出した。メイド服の洋子がそれに続く。

玄関に來たところで木戸のひょろりとした姿が目に入った。

「お帰りですか」

木戸の言葉に勇作はうなずいた。

「ああ。すぐ帰る。番長島のトーナメントの準備にかからなくてはならないからな」

「わかりました。お手伝いいたしましょう」

ふたりの会話に太郎は立ちつくした。太郎の様子に勇作はふりむいた。

「ああ、紹介しよう。こんど、僕の事業部の筆頭重役に就任した木戸だ。おたがい、知り合いだったよな」

「木戸さん！」

木戸は肩をすくめた。

「そういうことだ。高倉男爵はあんなことになったし、わたしも身の振り方を考えなくてはならないからね」

「あの封筒……。まさか木戸さんが？」

木戸はけわしい表情になった。

「なんのことだ？ まさかわたしが男爵に罽をしかけたとも言うつもりじゃないだろうな。男爵はどんな書類でも、目を通さず署名なさるかただった。こんなことになったのも、身から出たさびといつていいよ。わたしだって執事の仕事が一生涯の仕事とは思っていない。能力に応じた仕事を得ることを、お前に非難されることはない！」

くるりと背を向けると木戸は勇作が外に出たあと勢いよくドアを閉めた。

玄関のドアが大きな音を立て閉まった。

太郎は唇をかみしめた。

執事学校での授業を太郎は思い出していた。

教師が生徒の前で講義を続けている。

どういふ話の運びでそのようなことになったのか思い出せないが、あるとき召し使いに一番必要な資質はなんだという質問を教師は生徒に尋ねてきた。

あるものは礼儀作法だといい、あるものは優雅な身ごなしだと答えた。すべての答えに教師は首をふった。

「いいや。召し使いに一番必要なのは忠誠心だ！ かつての侍が主君に対したような忠誠心が求められるすべてだ。かつての武士は主君が命じれば死も覚悟した。その主君がどのような暗君でも、武士はよろこんで死地におもむいたのだ。諸君はこれからさまざまな上流階級の家庭に召し使いとして赴くだろう。そのさきの主人がどのような人間であつても、いったん主従の関係をむすんだら、主人が死ぬまできみらは召し使いだ。そのことを肝にめいじておくように……」

そうだ。ぼくは召し使いなのだ。男爵が死んだとしても、只野太郎が忠誠の誓いをしたのは美和子である。いったん召し使いの誓いをしたなら、彼女のために一生をささげるのが使命である。

翌朝、太郎は屋敷を出た。

ある場所へ行くためである。

高倉家に執事として勤めて、太郎は外出したのは美和子の通学以外まるでなかったから、自主的な外出はこれが初めてだった。太郎には目指す場所があった。

大京市は大都会である。行けども行けども巨大な建物がつらなり、目に入る場所はすべてコンクリートと敷石でしきつめられ、自然の場所というのは公園くらいしかない。

それでも太郎はこころおぼえの道をてくてくと歩き、事前に調べておいた交通手段をもって目的の建物をさぐりあてた。

建物の正面にたち、かかっている看板を見上げる。

「全国執事協会」とあった。

玄関には木枠にガラスがはまったスイング・ドアがあった。そのドアをくぐりぬけ、太郎は建物の内部へと足を踏み入れる。

はいったすぐにクロークがあり、蝶ネクタイをしめた黒服の男がいた。男は太郎をみとめ、職業的な笑みをうかべた。

「なにか御用でしょうか？」

太郎は名刺をとりだした。こういつときのため、用意しておいたものである。黒服の男は太郎の名刺を受けとり眉をあげた。

「あなたが高倉家の執事頭？ お若いすな」

太郎はうなずいた。それまで執事頭の木戸が緒方勇作のもとへ就職したので、高倉家の筆頭執事は自動的に太郎となるのだ。

「それで、どういうご用件でしょうか？」

「高倉家の執事頭として協会に救済をお願いにあがったのです」

男の眉はいっそう持ち上げられた。執事として表情を変えない訓練をつけているにもかかわらず、太郎の言葉に驚いたのだろう。

「つけたまわりましょう。少々お待ちを……。いま、担当のものをうかがわせます」

そういうと男は手元に目をやり、内線電話をつかんだ。受話器をとり、小声でだれかとやりとりをする。

「はあ……、協会に救済をと……、はい。規約ではそうなります。しかし……わかりました……それでは」

「がちやりと受話器をおくと太郎に向き直る。

「それでは理事のかたがお待ちになっております。ここから廊下をまっすぐすみ、エレベーターで三階において307という部屋にいらしてください。担当がお話しをうけたまわりますので」

太郎は礼を言うとクロークを横切り、エレベーターへ向かった。扉をあけると、真っ赤なお仕着せを着た少年が待っていた。

「三階へ」

太郎が言つと少年はうなずき、扉を手で閉め、エレベーターのハンドルをぐるぐると回した。ごとごとと音をたて、エレベーターは上昇していった。がちやんと音を立て、エレベーターはやがて停止した。三階へついたので。

がらがらとシャッターが開き、太郎は三階の廊下へ吐き出された。ひとつひとつドアの番号を確認し、太郎は「307」のドアの前に立った。ドアの横にベルのボタンがある。太郎はそれを押した。「どうぞ」

おくから声がして、太郎はドアを開けた。

部屋は窓がなく、天井から照明が内部を照らしている。装飾というものはなにもなく、そっけない部屋にはどっしりとした机と、そのむこうに座る五十代の女性がいた。彼女はやせており、半分が白髪、髪の毛を頭のでっぺんでひつつめている。遠近両用の眼鏡をかけ、レンズのむこうから鋭い視線が太郎を目踏みしていた。

「なるほど、あなたが高倉家の筆頭執事というわけね。只野太郎さん、とおっしゃったかしら？」

「はい、そうです」

「おすわりなさい」

女性は机のちかくにあるパイプ椅子をしめした。太郎は腰を下ろした。女は机のうえに肘をつき、両手を顔の前で組み合わせた。どうやらそれがなにか考え事をするときの癖のようだった。



「わたしは協会の理事の一人で田村美香ともうします。まあ、わたしの名前なんかどうでもいいことですけど、あなたが奉公なさっている高倉家のことについてはよく知っていますよ。なにしろ全国の執事をたばねるわが協会では、爵位をもつ名家の動向についてはつねに情報を仕入れるようにしていますからね。それで、あなたはわが協会に救済処置をもとめにいらしたというわけですね？　高倉家は破産したということですね。それならべつの華族か、資産家のところへ再就職したいなら……」

「違います！」

話をさえぎられ、彼女は目をぱくりさせた。

「僕は高倉家の跡取りである美和子さまのもとで”忠誠の誓い”をした身です。ですから当然、ほかの家へ再就職する気はありません。僕が協会にもとめたいのは、高倉家についての救済処置です」

話をさえぎられた田村女史はそれでもなんとか立ち直ることに成功した。

「”忠誠の誓い”……。それは執事として勤めるときにおこなう儀式のことですね？　それをかわしたからほかの家に召し使いとして勤める気はないと——そう考えていいのかしら？」

「そうです」

彼女は頭をふった。

「でも、それは儀式ですよ。たしかにそれは執事として忠誠を誓うことになりますけど、いまだきそんな儀式にしばらく召し使いはいません。あなたは小姓村の執事学校を卒業なさった優秀な執事ですから、再就職しようと思えば、すぐにでも……」

「いいえ。僕は最高の召し使いをめざしています。主人に対する忠誠心でも、僕は最高をめざします。再就職の話はこれまでにしてください」

田村女史は肩をすくめた。

「わかりました。お話を続けてください。なんでも高倉家への救済を願いにきたとおっしゃるのね？」

太郎はうなずいた。

「そうです。協会の規約によれば、執事がつとめる主家に危機が生じた場合、その回避のために協会が救済をもとめられるとあります。執事協会規約第十二条六項……執事は主家のためのあらゆる危機を回避する努力をせねばならない。そのため協会は当該執事に協力をする義務をおう……と」

女史はしぶしぶうなずいた。

「たしかに規約にそうさだめられております。しかしそれには制限があります。あなたの高倉家の破産はすでにきまったことです。その負債を協会が肩代わりするなど、許されていません！」

「いいえ、そんなことを求めてはいません。僕がもめているのはべつのことです」

そう言うとき太郎は上着のボタンをはずし、ふところから一枚の書類をとりだした。

書類を受け取った田村女史はその内容に目をはしらせ、驚愕の表情になった。

「これは……この書類はどうやって？」

「これをつかいました」

太郎はそう言うときポケットから小さな箱をとりだした。箱にはレンズがついていた。太郎の取り出した箱は小型のカメラだった。

「これで書類を撮影して、引き伸ばしたものです。もしものときを考え、複写を用意しました。これを協会で預かってもらいたいんです」

田村女史は用心深そうな顔つきになった。

「それで、どうなさるおつもりなんですの。これをあなたはなににお使いになるおつもりなの？」

「高倉家の再興です。ぼくはこれから高倉家の跡取り、美和子お嬢さまとある場所へおもむきます。僕の考えが正しければ、いずれ決定的な瞬間にこの書類の内容が意味をもってきます。そのとき、協会は僕の指示にしたがい、行動してもらいたいのです。そうなれば、

高倉家は元の通りになれるでしょう」

女史の口元に面白がるような笑みがじわりとうかんだ。

「なるほど……面白い話ね。どうすればいいのかしら」

「それは……」

太郎は女史の顔を見つめ、ある計画を話し始めた。女史は太郎の話をじっくりと聞いた。やがて太郎の話がおわると、ひとつうなずいた。

「わかりました。それなら協会もあなたに協力をしましょう。なによりも、あなたの主家にたいする忠誠心が気に入りました。召し使いはそうならなければなりません」

女史は手をさしだし、太郎は握手をかわし、部屋を出て協会をあとにした。

その夜、太郎は母親に手紙を書いた。高倉男爵が破産してそのシヨックで死亡したこと、美和子が男爵家の再興のため、番長島トーナメントに参加することなどを報告するためである。洋子のことはとうとう最後まで報告するのはひかえた。洋子は洋子でじぶんの人生がある。太郎の口出すことではないように思えたからだ。

やがて母親から返事が届いた。

母親はその手紙で太郎は忠誠の誓いをしたのだから、なにがあっても美和子のもとで働くことを指示していた。太郎は母親の手紙を読んでひとりうなずいた。やっぱり彼女は骨の髄からの召し使いである。太郎と母親の思いはおなじだった。

4

船は混みあっていた。客船であつたが、定員の倍は乗り込んでいるようだった。

「お嬢さま、お飲み物です」

トレイにジュースを載せ、太郎は美和子に差し出した。

礼を言つて美和子はトレイからジュースのはいつたグラスを受け取った。グラスにうかぶ氷がちりと鳴った。

「どこからこんなもの、もってきたのです？　ほかの人は見たところ飲み食いはしていないようですが」

「キッチンで、そのコックと話をしまして、おたがい小姓村の卒業生であることがわかつて意気投合しました。それでコックからお嬢さまにプレゼントというわけです」

美和子はため息をついた。

「あなたがた執事学校の出身者はかたいきずなで結ばれているのですね」

今日の美和子はセーラー服に、長い髪の毛を後頭部で三つ編みにまとめた活動的な格好をしていた。ほかの乗客も男は学生服、女はセーラー服かブレザーという格好だった。知らない人が見れば、修学旅行の途中かと思うだろう。しかし乗客のあいだにあるのは敵意だけだった。おたがいの力量をはかるような鋭い眼差しが飛び交っている。武器を手に行っているものもある。竹刀や木刀、あるいはメリケン・サックをこぶしにはめているもの、自転車のチェーンを腕にまきつけているものもある。銃器や弓矢などの飛び道具は禁止されていたが、打撃を目的とした武器はみとめられていた。客船に乘せられてすでに数日が経過していた。大京市はすでに遠くはなれ、水平線をさえぎるものはなにもなかった。

客船の乗客のほとんどは学生の格好だったが、このなかに本来の学生はほとんどいないようだった。その学生服も、参加者のほとんどが奇妙な改造をくわえている。襟をやたら幅広くしたり、ボタンの数をふやしたり、あるいは丈をうんと長くしたり、または極端に短い丈にしたりとさまざまである。たいていの者はじゃらじゃらと安っぽい装飾品を学生服のあちこちに鎖でたらしていたり、女学生は腿をむきだしにするようなミニ・スカートにしていたりしていた。そんななかでノーマルな美和子と太郎の格好は逆に目立っていた。

空は青く晴れ上がり、潮風が心地よい。

かもめが二羽、三羽と近づき、船のマストに休憩のため羽根をやすめた。

そのとき乗客のだれかが声をあげた。

「島だ！」

おお……、と船内にざわめきがはしり、みな舷側に駆け寄った。

太郎は目をほそめた。

水平線のかなたに島影が見える。

しろい石灰岩の岸壁に、ところどころ緑がへばりついていた。コンクリートやレンガ造りの建物が岸壁ぎりぎりに立ち並んでいる。遠めにもそれらの建物が無人となつて長いことが見てとれた。それらの建物は雨風にさらされ、まるで白骨をおもわせた。

「軍艦島です」

太郎はつぶやいた。

たしかにその島影は軍艦を思わせるシルエットをもっていた。ぐつと立ち上がった岸壁は軍艦の船体、そして島の頂上ちかくまで立ち並んだ廃墟は軍艦の構築物に見える。むかしはこの島は軍艦島と称せられていたが、勇作が所有してから番長島と名称を変えられていた。

もともとこの島は炭鉱でさかえたのだが、長年の採掘ですっかり掘りつくしてしまい、それまで炭鉱で職を得ていた人々は島を見捨てた。あとに残されたのは廃墟だった。

ぼおおおつ、と船の汽笛が接近を知らせている。岸壁の船着場には出迎えの係員がわらわらと集まつてきた。

ラダーがおろされ、乗客がぞろぞろと降りていった。

係員は上陸した船客ひとりひとりにバツジを手渡し、胸にとめるよう指導した。バツジは銅製で、表面には緒方家の家紋が浮き彫りになっている。太郎と美和子もそれを受け取り、胸にとめた。

ぐおおおん……

腹に響くようなエンジン音が頭上からふってくる。日が翳り、みな上を見上げた。

見上げたかれらの口がぽかんと開いた。

日差しをさえぎり、巨大なものが浮かんでいる。

飛行船だった。

いわゆるツエッペリン・タイプの飛行船で、六個のエンジンを吊り下げプロペラが回転していた。飛行船の横腹には巨大なスクリーンがあった。

そのスクリーンが明るくなり、ひとりの人物の顔が映し出された。緒方勇作であった。

「やあ、わが番長島にようこそ。今日から一週間、最強の番長、スケバンをきめるトーナメントをはじめ。みな、バッジを受け取ったはずだな？ そのバッジはこの島での身分証となるものだから、大事に持っているように。この島での生活のための飲み食いは島のあちこちにある食堂でやれる。そのバッジを提示すれば、どの食堂でも無料で食事が用意される。宿泊もおなじだ」

勇作の言葉にみな、じぶんのバッジをたしかめた。

「ここで勝負をきめるのはいつはじめてもいい。一対一でもいいし、複数で一人を襲ってもかまわない。ルール無用の戦いだ！ そして勝利者は敗者のバッジを奪うことができる。そのバッジをもっとも多く奪ったものがこの島での勝利者だ。どうだ、簡単なルールだろう？」

全員がすばやくおたがいを見合った。

「しかしあまりにも多くのバッジを持つことは大変だ。それで島のあちこちに交換所を用意した。銅のバッジ十枚で銀のバッジ。銀のバッジ十枚で金のバッジと交換できる。つまり金のバッジひとつを持つものは、百人の敵を倒したということになる。ただし金のバッジや銀のバッジを銅のバッジに交換することはできない。苦労して金のバッジを手にしても、勝負に負ければ没収だ。バッジを取られたものは取り返すか、あるいは島から出て行ってもらう。三日目以後、バッジを持っていない参加者は島を出て行ってもらう。一週間後、もっともバッジを所有していたものが僕と勝負ができる。そし

て勝利したならこの伝説のガクランと、賞金百万両を進呈しよう。  
諸君、いい勝負を！」

スクリーンのなかの勇作はにやりと笑うとくるりと背中をカメラに向けた。「男」の金の刺繍がまぶしくきらめいた。飛行船は船首を島の中央に向けた。プロペラが回転し、飛行船は遠ざかった。

「おもしれえ……。まったくおもしれえぜ！」

ひとりの巨漢がにやにやと笑いをうかべつつ、まわりの参加者たちをじろりと見やった。裾がぼろぼろになった学生服に、手垢にまみれた古そうな学生帽をかぶっている。顔には無数の傷跡がのこり、そうとうな歴戦の勇士のようだ。

男はとなりにいた学生服の参加者をにらんだ。ぐっ、と手をのばし、その肩をつかむ。つかまれた男は驚いて目を白黒させた。

「おい！ 勝負だ！」

いきなり宣言すると巨漢はこぶしをふりあげ、となりの男の顎にたたきこんだ。

「ぐえっ！」

男は巨漢のこぶしに叩き潰され、宙に吹っ飛んだ。あまりの早業に防御する間もなかったらしく、あぐりと開けた口から鮮血がしたたっている。

巨漢はのしのしと近づくと、男の胸にひかっているバッジをむしりとった。

自分の胸にバッジをとめるとふん、と鼻をならし、倒れている男をにらんだ。

「なんでえ、手ごたえがないのものはなはだしいぜ。もうちょっと齒ごたえがあるやつはいねえのか？」

「うわあああつ、と喚声を上げひとりの男が木刀をふりかぶった。

巨漢はその木刀をむんずと片手でつかみ、ふりまわした。

「うわあ！」

木刀を持った相手は、巨漢の片腕だけでかるく振り飛ばされ、地面にたたきつけられた。巨漢は木刀を両手につかむと、いきなり膝

でふたつに割った。

「こんなもの！」

からん、と割れた木刀を投げ捨てると巨漢はだっ、とひととびで相手のところまで近づき、その胸倉をつかんだ。

がんと巨漢がそのまま頭突きをくれると相手はそれだけで気を失ってしまう。バツジを奪い、また自分の胸にとめた。

巨漢はじぶんを見つめている視線を感じ、ふりむいた。

「女か」

そこに立っていたのは美和子と太郎だった。太郎は美和子の背後にひかえている。

「おれは女は相手にしねえ。いまはな。あとであんたが勝ち進んだら、決勝で会おうや」

「いまここで勝負をしてもいいですよ」

巨漢の口がぽかんと開いた。

「なんだって？」

美和子はさつと構えた。巨漢はじろりとその構えを見て目を細めた。

「ふうん、ただの女じゃなさそうだな。あんたの名前を聞かせてもらえないか」

「わたしの名前より、まずあなたから名乗りなさい」

「そうかい、それじゃ名乗らせてもらおう。おれは勝田勝<sup>かつたまさる</sup>。前回で

は最終決戦まで勝ち残ったんだ。もっとも勇作には負けたが、今回こそ勝つてやる！ あんたは？」

「わたしは高倉美和子と申します。さあ、勝負なさるの？」

「やってやろうじゃないか……。どうやらあんたはただのスケバンじゃなさそうだ」

勝田勝はさつきとはまるで違い、用心深く美和子に近づいた。ひくくかまえ、じりじりと近づいていく。かれの本能的な勝負勘が、美和子の戦闘能力の高さを感じとっているようだった。

「！」



だしぬけに勝は飛び出した。その巨体からは信じられないほどの素早い動きである。

さっと片腕をのばし美和子の腕をつかみにかかる。と、それはフエイントで、美和子がさけるところを足をのばして転ばそうという策略であつた。

が、勝の全身は硬直した。

美和子がほそ腕をのばし、勝の伸ばした手首をつかんでいる。ただそれだけなのだが、勝はまるつきり動けないでいた。どこをどうつかんでいるのか、美和子のほそ白魚のような指が勝の手首をつかんでいるだけなのに、かれはびくとも動けないでいた。

「く！」

勝の顔に脂汗がうかんだ。

「動かないで。無理に動こうとすると骨折するかもしれませんよ。太郎さん、このかたからバッジをいただきなさい」

「失礼いたします」

太郎は身動きできないでいる勝の胸にとまっているバッジをひとつひとつはがしていった。すべてはがすと、そつと後ろにさがる。

「お嬢さま、いただきました」

「そつ、ご苦労さま」

ふつ、と美和子は手を離れた。それまで全力で美和子の捕縛からのがれようとしていた勝はたたらをふんで二、三步前になる。

はっ、とじぶんの胸を見る。

バッジはひとつ残らず奪われた。

「くそお！」

勝の顔が真っ赤に染まった。

「うわあああ！」

顔中を口にして勝は絶叫して飛びかかる。美和子はさつとふりむくと勝の突撃をかわした。かわす直前、美和子はまるでダンスを踊っているような優雅な動きで勝の腕をつかんだ。さつとばかりに彼女の腕が一閃すると、勝は肩を中心に円を描いて回転した。

どつ、とばかりに勝は地面に倒れこんだ。

ぐう、と勝はうなり齒を食いしばった。背中を地面に散らばっているコンクリートの破片に打ちつけたらしい。それでも立ち上がると両腕をのばしてつかみかかったのはあっぱれだった。美和子はさつとその両腕をはいくぐり、抜き手を勝の鳩尾にたたきこんだ。

美和子の抜き手は手首まで勝の鳩尾にうまつていた。勝の顔色が真っ赤から、真っ青に変わった。

「ぐふう……ぐふう……！」

しゅーっ、というような息をはいて勝はがくりと膝をおった。

どた、とあおむけに倒れこむ。

かれの両目がくると白目を見せた。

そのまま気絶していた。

「おもしろい！ 美和子のやつなかなかやるな！」

勇作は上機嫌だった。

かれの目の前に無数のスクリーンが島のあちこちの映像を映し出している。かれは島全体に多数のテレビ・カメラをしかけていた。

目的は参加者による不正の監視であつたが、もうひとつの目的は現在の状況を同時中継で全国放送で上映するためである。そのひとつのカメラが、さきほどの勝と美和子の勝負をとらえていた。

ここは島の中央部にある司令部である。勇作はこの司令部で島の現在の状況をとらえ、見守っているのだった。

勇作の背後に洋子がひかえていた。彼女はお気に入りのメイド服を身につけ、勇作の命令を待っている。

しかし勇作は仕えがえのない主人だった。かれはじぶんのことはじぶんでやるという主義の持ち主で、およそ召し使いというものを必要としない性格だった。それらの仕事をやろうと出て行くと、いつも丁重に断られるのだった。せいぜい部下の連絡の取次ぎくらいしかやることはない。それでも洋子は退屈そうな顔ひとつ見せず、しずかに控えていた。

監視センターのドアが開き、木戸の背の高い姿があらわれた。いまは木戸は眼鏡を金縁に変え、身につける服装はりゆうとしたスーツになっている。首のまえに派手なスカーフをたらし、絹の腹帯をまきつけ、金鎖の懐中時計を身につけていた。両手の長い指には色とりどりの宝石が輝いている。洋子は高倉家で働いていたころの木戸とはなんという違いだろうと思っていた。

「視聴率の結果ができました。五十パーセントを超えています」

木戸の報告に勇作は不機嫌になった。

「それだけか！ 七十パーセントはいくと思ったが……。大京市のテレビ局はなにか言ってきたか？」

「はっ、高倉美和子の映像をもっと流したいと……。視聴者からの要望が多かったようです」

勇作はにやりと笑った。

「やつぱりな……。よし、各テレビ・カメラを美和子に注目させる！ オペレーターの数をやせ。それから勝田勝にも注目させておけ！ いずれあのふたりは対決するはずだからな」

はっ、と木戸はそのながい上体をおりまげてセンターを出て行った。勇作は洋子を振り向いた。

「きみの同級生、たしか只野太郎といったな。知り合いなんだろう？」

「はい、そうです」

「聞くところによると、執事学校では主人をまもるための特別な格闘術を教えているようじゃないか。あれでは太郎の出る幕はなさそうだ」

洋子は首をふった。

「そうでしょうか。わたしは太郎が活躍する場面はあると思います」  
洋子の言葉に勇作は肩をすくめた。

ふたたび無数のスクリーンに向き直り、じっと見つめる。

この映像は同時中継で大京市のテレビ局に送られている。そして映像は全国に配信され、数千万の視聴者が熱心に観戦してい

るはずだった。この番組にはさまざまな大企業が協賛し、宣伝費をかけている。この瞬間にも、勇作のもとにはばくだいな広告費が払われるのだった。

賞金の百万などやすいものだ。

ばかりと勝の意識がつかびあがる。ぱちぱちと勝は目をしばたかせた。青空をバックに、数人の男女がのぞきこんでいた。

むくり、と勝は上半身をおこした。

わっ、とばかりにまわりに取り巻いていた数人が逃げ散った。

「くそお……」

顔を真っ赤に染め、勝はくやしさにうなった。あんな屈辱ははじめてだ。女に、あんな負け方をしたのははじめてである。

勝は自分の胸を見下ろした。とっくにバツジはとられてなくなっている。

立ち上がるとまわりにこちらをおそろおそろ見ている数人に気づいた。それらの胸にひかるバツジに目がとまる。

勝はいきなり走り出した。

わあ、と恐怖の声をあげ、男女が逃げていく。そのひとりの襟首をつかみ、片手で宙につりあげた。

「よこせ！」

もう一方の手でその胸のバツジをむしりとると、ぶん、と放り投げた。

「ぐえ！」

地面に転がって、バツジをとられた男は腰のあたりをコンクリートの破片にうちつけたのだろう、妙な声をあげのたうちまわった。

「くそお……」

勝は怒りに顔を真っ赤にさせ、両手の握りこぶしをわなわなと震わせ立ちつくした。

「あいつら……絶対倒してやる！」

そう宣言すると、つぎの獲物をねらって歩き出した。

「十、十一、十二、十三、十四……。全部で十四枚になります」

岸壁のちかく、島を見下ろす高台で太郎と美和子は体を休めていた。太郎は美和子が勝ち取ったバツジの数をかぞえていた。あたりを夕暮れがオレンジ色に染めている。水平線のかなた、太陽がその姿を没しかけていた。

じやらじらとバツジをまとめると、袋につめ美和子に手渡した。「あとで交換所で両替いたしましょう」

そうね、と美和子はうなずいた。なんだか沈んでいるようだ。

「どういたしましたか？　ご気分がお悪いのですか」

いいえ、と美和子は首を振った。

「それだけの相手を倒したことがじぶんでも信じられないのです。わたしが学園で学んでいたころは、このような勝負をするために格闘術を学んでいたわけではありませんでした。わたしを教えた先生が、いまのわたしを見たならなんとおっしゃるでしょう。こんなことをするために技を教えたのではないと叱られるでしょうね」

これには太郎もなんともこたえようがない。黙っていると、美和子は太郎に話しかけた。

「ねえ、太郎さん。どうしてわたしにこんなにつくしてくださるの？　知つての通り、高倉家は破産して一文無しになっちゃったわ。あなたにお支払いする給料もないのよ。もったいから、あなたは次の就職先をさがすべきだわ」

太郎は首をふった。

「そういうわけにはいきません。わたしが召し使いとして忠誠の誓いをしたのはお嬢さまです。執事学校の教えで、いったん主人として仕えたなら、あいてがいついかなる状況でも、仕えるのが召し使いとしての本文です。お嬢さまが一文無しでも、世界一のお金持ちでもおなじことです」

太郎を見つめる美和子の両目に涙がたまってきた。唇が震え、やっと声を押し出した。

「ありがとう……。正直、あなたがついていてくれて嬉しい……」  
ほろほろと彼女は涙をこぼした。

太郎は彼女の前に膝まづいた。

「お嬢さま、お願いがあります」

はっ、と美和子は顔をあげた。

「ここであらためて美和子さまに忠誠の儀式をやっていただけないでしょうか？ 前のときは男爵さまに命ぜられてお嬢さまは誓いをなされました。このたび、お嬢さまの意思によりあらためて忠誠の誓いをたてたいと思います」

太郎を見つめる美和子の両目がおおきく見開かれた。

うん、と彼女はおおきくうなずいた。

すっ、としろい腕を伸ばし、手のひらを太郎の頭にのせる。

「わたくし、高倉美和子は只野太郎を生涯の執事として任命する。

いついかなるときも、わたくし高倉美和子は只野太郎をかけがいのない召し使いとして従えるであろう」

太郎はこたえた。

「わたくし、只野太郎は高倉美和子さまにお仕えます。いついかなるときも変わらぬ忠誠心をもつてつくすことを誓います」

夕日が完全に水平線の向こうに没し、最後の残照があたりを染め上げている。

「視聴率がはねありました。七十パーセントに達する勢いです」

監視センターで木戸は勇作に報告した。勇作は椅子に腰掛け、うなずいた。モニターには太郎と美和子の誓いの姿が映し出されている。

「いい場面だ……。洋子、おまえはどう思う？」

木戸の隣で控えていた洋子はだしぬけの質問にとまどった。

「どう思うと言われても……。でも、執事学校を卒業した太郎ならあたりまえのことだと思えます」

「そうだろうな……。しかし執事学校の卒業者があれほどの忠誠心

をしめすとは意外だった」

勇作は木戸をながめた。木戸は真つ赤な顔になった。

「わたしは小姓村の執事学校のことは知りません。主人を選ぶのはあくまで召し使いの特権です。主人に能力がなければ、見限るのもあたりまえのことです」

「まあいいさ。ところで全国からどんな反響が出ている？」

「はあ、妙なことに全国の執事学校に入学希望者が殺到しているようです。通年の倍ほどの入学希望者が出ているようです」

はははは……、と勇作は顔をあおむけて笑った。

「こいつは傑作だ！ まったく只野太郎には楽しませてもらえるよぱん、と腰かけの肘あてをたたくと立ち上がった。

「そろそろ今日の放映はおしまいだ。あとを頼む！」  
そう言つと返事も待たず歩き出した。

ふiiiiiiiiいん……

殷々と島の全体にわたってサイレンが響き渡った。島での決闘の終了をつげる合図である。これ以後、勝負をしてもそれはカウントされない。それまで向かい合っていた男女は、その音色で構えをとき、ほつと息をついた。

「ま、待て！ あのサイレンを聞いたろう？ 勝負はおわりだ！」

島の一角で、勝に追いつめられていた学生服の男は手をあげた。

こぶしを固めていた勝は男の抗議の声も耳にはいらず、無言でなくりかかった。

ぼくつ、という低い音が鳴り、男は白目をむいて気絶した。勝は男のバッジをむしりとろうと身をかがめた。

「勝田勝！ やめなさい！ 勝負の時間は終わっている」

だしぬけにスピーカーから呼びかけられ、勝はその場で目をきよときよととさせていた。あきらかに制止の声を理解していない。

ざつ、と物陰から数人の制服を身につけた兵士が銃を構えて勝に狙いをつけた。

「これは麻酔銃だ。もしバッジをとるなら、おまえに麻酔をうたなければならなくなる。サイレンがなったら勝負は終了だ！ バッジはそのままにしておけ！」

けっ、と勝はつばをはくと横をむいた。まったく手ごたえのないことおびたらしい。

「そうかよ……。つまんねえの」

肩をゆすり、立ち去った。それを確認して兵士たちは構えていた銃をおろした。

かれらは緒方家の私兵である。このトーナメントのため、監視の任務をあたえられているのだ。

島のあちこちからぞろぞろと男女が姿をあらわし、点在する食堂へ急いだ。

食堂では食事の用意ができていた。

バイキング方式で、好きなものを好きなだけ採れるようになっていた。この食堂だけが島での明かりである。今日一日、死に物狂いで勝負を続けていた男女は、誘蛾灯にひきよせられる虫のように集まってくる。

食堂に今日一日、戦ってきた男女が集合すると、それまでの敵意はすっかり消滅していた。戦いあったもの同士の間で連帯感のようなものが醸成されていた。

といっても、それはバッジを勝ち取ったものだけで、バッジを奪われたものは明日以後、どうやって暮らそうと絶望的な表情になっている。なにしろバッジを持っていないものは、食事すらできないばかりか、三日目以後島を追い出されるのである。かれらは簡単にバッジを奪えそうな相手を明日のために物色していた。

「聞いたか、去年の最終予選に勝ち残った勝田勝が、女にひねられたそうだが」

「ああ。朝一番の勝負で、やつは気絶したそうだが」

「本当か、おい？」

くくくくく……、と忍び笑いがおきた。勝の敗北の噂は島じゅう



に駆け巡っていた。

「おれがどうしたって？」

ひくい押し殺した声に噂をしていた男たちは凍りついた。ふりかえると、とうの勝田勝が席についている。

「い、いや……ただの噂だよ」

「つまらねえ噂だ」

「そ、そうだな。うん、つまんない噂だよ」

ははは……、とちからなく笑うと、かれらはそろりと立ち上がり二階へあがっていった。食堂の二階は宿泊施設になっている。

テーブルにやまと食料を積み上げ、勝は無言で食事をつづけていた。その両目は怒りのため充血している。あまりの視線のものとすごさに、部屋に同席している男女は落ち着きをうしなっていた。まるで勝の両目から目に見えないレーザー・ビームが出ているようであった。

がぶり、と勝は巨大な肉塊にかぶりつく。碁石のような歯が肉塊から肉を噛みとり、咀嚼する。ピッチャーに注いだ一リットルのオレンジ・ジュースを一気に飲み干し、皿いっぱい飯をかきこんだ。食堂には酒類は提供されていない。勝が運んできたのはゆうに十人分はありそうな食事の量であった。かれの巨体をささえるには、ふつつの人の食事量では足りないらしい。

野獣のような勝の食事風景に、その場の男女はいたたまれなくなり、ひとり、ふたりと食堂から出て行った。

手負いの獣はおそろしい。

みな、一様に思っていた。

時計の針が九時をまわると、島の施設の明かりが落とされる。

ふつつの都会生活なら宵の口であるが、なにしろ今日一杯、死に物狂いで戦ってきた参加者はみな目をあけていられない。すでに半数はベッドに倒れこむように眠り、あとの半数も明日のために休んでおこうと宿泊施設で眠れぬ夜を迎えている。

食堂で太郎はアイロンをかけていた。

美和子はすでに部屋着に着替え休んでいる。太郎は明日のために彼女の制服にアイロンをかけていたのである。主人の身の回りの世話が執事の本分である。丁寧にアイロンを滑らせ、今日のしわをのばす。

物音に太郎は動きをとめた。

食堂にはだれもいないはずだ。

振り返ると、ドアのちかくに人影があつた。

「だれ？」

「あたし」

人影は食堂のあかりに身をさらした。太郎は目をまるくした。

洋子だった。

緒方家のメイドの服を身につけ、太郎の顔を見つめていた。

「やあ」

太郎はまたアイロンをかける作業を続けた。洋子はゆっくりと太郎に近づいた。

「あなたの忠誠の誓い、見たわ」

太郎は目を丸くした。

洋子はふふつ、と悪戯っぽく笑った。

「知らなかったの？ この島のアチコチにはテレビ・カメラがしかけられているのよ。だから、だれがどこでどんなことを言ったか、やったか、ぜんぶお見通しなの。それに全国ネットで流されているから、あなたたちの活躍も全部知られているわ」

「そうかい」

太郎はアイロンがけの作業を続けている。

「ねえ、本気であのお嬢さまの世話を続ける気なの」

「なぜだい」

「だって、高倉家は破産したんでしょ。一文無しのよ。そんなところの忠義だてするなんて、信じられないわ」

「学校で習ったんだ」

「そりや理想の召し使いとしての心構えとしてはそうよ。でも、本当のところそんなことだれも守っちゃいないわ。あの木戸だってそうじゃない？　なのに、なぜあんただけ馬鹿正直に守る必要があるのよ？」

「僕はその理想の召し使いを目指している。父さんは最高の召し使いだったそうだ。その息子の僕も、最高の召し使いになるのが、使命だと思ってる」

「へええ、理想の召し使いねえ……」

洋子は馬鹿にしたような口調になった。太郎は眉をひそめた。

「なんだい、その言い方は？」

「あたし、緒方さまのメイドになってちょっと調べたのよ。あんたの父さんのことは召し使い仲間ではちょっとした有名人なのよね……」

「……あんた、知りたい？」

太郎はアイロンをおいた。

「なにか知っているのか」

「この島の、北の端に洞窟があるわ。興味があるなら、尋ねてみたら？」

にやっ、と笑うと洋子はバイバイと手をふって出て行った。

夜空には満天の星空で、月は満月で足もとはあかるい。それでもごつごつとした岩があちこちにつきだし、太郎は懐中電灯を手に、島の北端をめざしていた。

左手に岸壁がそそりたち、右側は浜辺でよせてはかえす波がざあああ、ざあああ、と白い波頭を打ち寄せている。

太郎は洞窟をさがしていた。

洋子の口ぶりが気になっていた。

いったい彼女はなにを知ったのか？

島の北端は岸壁がするどくすばまり、波が長い年月石灰岩をえぐりつつている。

あれかな？

太郎は電燈の光をふった。

黄色いあかりに洞窟が口を開けていた。

近づき、内部を照らしてみた。

意外と深い。奥は真つ暗だ。

太郎はそろり、と用心しながら進んだ。なかには誰かが生活をしているのか、粗末な食器や火をおこしたあとがある。天井を照らすとほそい電線が通っている。電気は通じているらしい。懐中電燈のあかりに、ラジオが見えた。どうやら完全な世捨て人というわけではなく、最低限の世間の情報には接してられる生活はできるようだ。

「だれだ！」

するどい誰何の声がした。太郎はさつと電燈の明かりをそちらへふった。

「わ！」

ちいさく悲鳴をあげ、ひとりの人物がまぶしさに手で顔をおおった。

謝罪して太郎は光を足もとにおろした。

「だれだい、あんた？」

その人物は目をしばたかせながら話しかけてきた。

太郎の鼻にぶん、と相手の体臭がにおってきた。どうやら数ヶ月は風呂にはいっていないようだ。髪の毛はのばしほうだいになって背中までのびている。顔はごわごわの髭でおおわれ、表情がよめない。着ているものもぼろぼろで、もとはどんな服だったのか判別もできなかった。年令は五十にちかい。

「僕は只野太郎といいます。父親の只野五郎のことを知りたくなつてやって来ました。あなたはなにかご存知ですか？」

太郎が名乗ると相手は黙り込んだ。じつと目を見開き、太郎をにらむ。

「帰ってくれ！ あんたなんかには用はないよ」

「なにかご存知なのですか？」

太郎が一步近づくと、男はあとずさった。

「帰れ！ おまえなんか知らない！」

「しかし……」

「知らんといったら、知らん！」

そう言うつとぷい、と横をむき顔をそむけた。ごろんと横になると背中をむけ、全身で拒絶をしめしている。

太郎はあぐらをかき、男の背中に話しかけた。

「僕はちいさいころから父親を知りません。母は僕が生まれたころ、父は死んだと言っただけです。高倉さまのお屋敷に奉公してからも仲間の召し使いに聞いたのですが、だれも父のことを話してはくれませんでした。お願いです。あなたがなにか知っているなら教えてください」

「なにが知りたいんだ」

ぼそり、と男は背中をむけたまま答えた。太郎は勢いづいて質問した。

「僕の父さんは最高の召し使いだったとだれも言います。どういう風だったんです？」

「最高の召し使いね……。たしかにそうだよ」

太郎は待った。

男は語りだした。

「やつはあんたの高倉男爵の屋敷に奉公した。男爵の財産がいまのようになつたのも、五郎の手腕さ。やつはさまざまな企業の有力者とコネをつくつて、男爵の財産を運用して優良企業に育て上げた」

太郎は口をはさんだ。

「ですがいまは男爵は破産しました。いまの男爵家には財産は残っていません」

男はふりむいた。驚きの表情になっていた。

「本当か？ なぜそんなことに？」

太郎は木戸の行ったことを説明した。男はにやりと笑った。

「あいつか！ あいつならやりそうなことだ。あいつには忠誠心な

ど、かけらもないからな。男爵は人間的には理想的だったが、経営者の才覚はなかった。たぶん、木戸のやつは全経営権の譲渡を画策したんだろう。男爵はまんまとそれに乗せられたってわけだ」

「ええ、そのシヨックで男爵は心臓麻痺でなくなりました」

「死んだ……。ふむ、残念なことだ」

「父が高倉家の財産をふやしたことはわかりました。それでどうなつたんです。なぜ当時の仲間が父のことを話すのをしぶるんです」

「あいつは召し使いの本分を踏み外したんだよ。召し使いがやってはいけないことをやらかしたんだ！」

「それはなんですか？」

「かけおちしたのさ。妻も子供いるというのに、男爵の召し使いの女とかけおちしたんだ。当時、召し使い仲間ではたいへんなスキヤンダルだ」

「なんですって？」

「くくく……、と男は乾いた笑い声をあげた。

「男爵はかけらほども疑っちゃいなかったが、ほんとうのことだ。

たぶん、高倉男爵はいつのまにか只野五郎が消えたのを不思議に思っていたらうね。なんであんな忠実な召し使いがじぶんのまえから消えたのだろうと……。当時、只野五郎とかけおちした女には子供がいた。只野五郎は妻の名前をつかって世間から身を隠した」

「それでふたりは？」

「さあ、知らんな。幸せになったか、それとも世間をおそれて不幸せになったか。知りたくもないことだ」

「あなたはなぜこんなところで生活しているのです？」

「おれのことはどうでもいい。もう帰れ。聞きたいことは全部話した」

太郎は黙った。

やがて口を開いた。

「あなたはもしかしたら僕の父さんなんじゃないですか？」

「なんだと！」

男はじろりと太郎をにらんだ。太郎は男の髭にかくれた顔にじぶんの顔の輪郭を見出したような気になった。

「僕はここに高倉家のお嬢さま、美和子さまときています。この島でおこなわれているトーナメントに勝ち抜けば、賞金がもらえるからです。その賞金を手にすることができれば、高倉家の窮状を救えるかもしれません。かつて高倉家の財産をふやした只野五郎のように、僕は一文無しになった高倉家をふたたび男爵の爵位にふさわしい家に育ててみようと思います。それが僕の召し使いとしての使命ですから」

太郎は立ち上がった。

「それではさようなら。あなたがもしも僕のお父さんなら、いつか小姓村にもどってください。母はひとりで待っています」

そのまま背を向け歩き出した。

洞窟を出る直前、奥から押し殺したすすり泣きの声が聞こえてきた。

## 後（前書き）

トーナメントは波乱の結果になった。  
いよいよ緒方勇作との対決がせまる。  
この戦いに勝利するのはどちらか？



## 後

5

じゃらじゃらとテーブルにばらまかれたバッジの数に係員は目を  
まるくした。無数のバッジが朝の日差しにきらきらと輝いた。

「これはこれは、ずいぶん集めましたねえ！」

「百個はあるはずだ。数えてくれ」

バッジを持つてきた勝田勝はふんぞりかえって命令した。両替所  
の係員はうなずくと、さっそく数をかぞえはじめた。

勝は両替所の内部を興味深げにのぞいた。このトーナメントに参  
加して五回目だが、このようなシステムになったのは今回がはじめ  
である。バッジを奪う、というアイディアは手っ取り早くていい。  
去年までは参加者全員の勝ち抜き戦だったから、じぶんの番がまわ  
ってくるまでずいぶん退屈な時間をすごさなければならなかった。

両替所の入り口近くに名簿が貼られていたので勝は見上げた。

名前のよこに数字がある。

「こいつはなんだ？」

係員は眼鏡をずらして顔をあげた。

「ああ、そりゃバッジを獲得した連中の順位ですよ。両替にくると、  
その枚数が連絡されるんで、そのたびに更新されるんです」

「ふん、そうかい」

勝は名前を読んだ。

名簿の一番うえに高倉美和子の名前がある。獲得枚数は二百をこ  
える。

勝の顔に血がのぼった。

なんと二番目にあるのは勝の名前である。

「この女……」

係員はにこにこ笑いかけた。

「ああ、高倉美和子のこつてすね！ いや、すごいもんです。初日からどんな相手を倒して一番手を譲ったことはないです。二番目の勝田勝ってやつは去年までの最終決戦まで残ったつわものだそうですが、なんでも初日にその女に手もなくひねられたそうで、今年はこの女が緒方勇作さまと戦うことになりそうですな……」

しゃべりながら係員は勝の顔にうかんだ怒りの表情に気づいた。さつと係員の顔色が変わった。

「あ、あんた、もしかして……」

「数え終わったのか？」

勝は押し殺した声をあげた。係員はふるえる手で金と銀のバッジをさしだした。

「へ、へい！ ちょうど百二十枚になっております」

勝は金のバッジ一枚と銀のバッジ二枚を係員の手から奪い取るとものも言わずに交換所を飛び出した。

朝のまぶしい日差しが目をつつた。

「くそ！」

叫ぶと次の獲物をもとめて島の廃墟をさがす。しかしトーナメントはすでに三日をすぎ、バッジをもたない参加者は島から退去させられ、残った参加者はすくなく、あたりに人影はなかった。

二百枚だと！

勝は歩き続けた。

廃墟のなか、ひとりの少女が必死になって逃げている。着ているセーラー服は泥によごれ、スカートのすそはびりびりに破れ、そうとう戦ってきたらしいことを示していた。三日目にもなるのに、彼女の胸にひかっているバッジは銅の一枚きりだった。ほかにかくしているような様子はないから、もしかしたら決闘すらしていないのかもしれない。

年令は若く、たぶん十四、五といったところだろう。そんな若さ

でトーナメントに参加するとは無茶である。

髪の毛は短く、ショート・カットにしている。ほかの女性参加者がスケバンらしく念入りに化粧して、髪の毛もさまざまに結い上げているのに比べれば、まるで素人のようないでたちである。

島のあちこちにある廃墟はほとんど天井がぬけおち、落下したコンクリートのかたまりが地上をおおい、歩きにくいことおびただしい。うっかり走るとたちまち足をとられひっくり返ってしまう。

そらやった！

少女は破片に足をとられ、ずっでんどうとばかりに転んでしまった。

転んだとき足をひねったのか、しばらく動けないでいる。

「だいじょうぶかい？ 走るとあぶねえよ」

からん、と破片をふみしめ、数人の学生服の男が太陽を背に近づいてきた。少女ははっ、と振り返った。じりじりと手についてあとずさる。

男たちの顔にはいちように下卑た表情がうかんでいた。無抵抗の獲物を前にしたハンターの笑顔だ。

少女の顔に恐怖がうかんだ。

「ねえきみ、ひとりきりでさびしくはないかい？ トーナメントに残るにはおれたちみたいにチームを組むべきだ。おれたちひとりくらしい女の子の仲間がほしいとおもってたところだね、よかったら一緒に来ないか？」

男たちのなかでもっともうぬぼれの強そうなやせた男が話しかけてきた。にやにや笑いをうかべ、じりじりと近づいてくる。

「あっちにいきなさいよっ！」

少女はさけぶとさつと右手をふった。

「！」

やせた男はのけぞった。鼻のわきにかすかな切り傷がうかぶ。はっ、と男は手を顔にあてた。手のひらを確認するとわずかに血がにじんでいる。

「きさま……」

少女は手にかみそりの刃を隠し持っていたのである。それを一瞬のうちに宙にとばしたのだ。

「刃物は違反だぞ!」

男たちの間に緊張がはしった。

「このアマ、ふてえやつだ!」

がらりと口調がやくざっぽくなった。本性がむきだしになったというわけだ。

「押さえる!」

男たちは少女に殺到した。あつというまに彼女の両手、両足が押さえつけられた。

かちやかちやと男たちがズボンのベルトのバックルをゆるめる。みな興奮していた。

「や、やめてえ!」

少女は悲鳴をあげた。やせた男はぎらぎらと欲望を両目にたぎらせ話しかけた。

「心配するな、痛いのは最初だけだ。あとは気持ちよくなる。おれたちがお前を守ってやるから、仲良くしようなあ……」

ひひひひ……、と顔を近づけた。歯を磨いていないらしくむつとする口臭が少女を襲った。

ひゅう、と小石が宙をとび、いまにもズボンをずりおろそうとした男の後頭部を襲った。がん、と後頭部を直撃され、男はうん、と白目をむいて気絶した。

「だれだ!」

男たちはさっ、とあたりを見回した。

ふたりの人影が太陽の光をバックにシルエットとなっていた。ひとりは男、もうひとりは女のようにだ。

「あなたたち、ここは戦いの島のはず。そんな行為は許されていないのではなくて?」

女のするどい叱責の声がとんだ。なんだあ、と男たちは立ち上が

り身構えた。

「なに言つてやがる。おれたちはこの娘とチームを組もつて相談していたんだ。お前らの邪魔はさせねえ！」

どうせあいてはふたりだけだ。こっちは十人、負けるわけない。そういう安堵感がかれらの行動を大胆にしていた。

女が一步前に出るのを、かたわらの男が制した。

「お嬢さま、このような連中の相手をなさることはありません。僕がかわりに相手しますので」

美和子と太郎だった。

男たちはせせら笑った。

「聞いたか！ お嬢さまだつてよ！」

ひゃっひゃっひゃっ、とおたがいの肩をたたきながら笑いあつた。すすす、と太郎は足音もなく近づいた。瓦礫を踏んでいるのに、まるで絨毯の上を歩いているように軽やかである。

太郎の動きに男たちはぎくりとなった。

かれらが構える間もなかった。

太郎はかれらの間を一陣の風となってかけぬけた。くるくると太郎の両腕が旋回し、倒れていた少女のところに達したとき、すでに男たちは全員身動きもできなくなっていた。

がく、とひとりが膝をおる。ばたばたと男たちはいつせいに倒れこんだ。みな苦痛にうめいていた。

太郎は少女の腕をとり、立たせてやった。

「だいじょうぶかい？」

「あ、ありがとう……」

少女はぼうぜんと倒れている男たちを見下ろした。たいした怪我もしていないはずなのに、みな立つこともできないようだ。

「なにをしたの？」

「たいしたことはしていない。苦痛をつかさどる神経を刺激しただけだ。半日はたてないだろう」

太郎は倒れていた連中の胸からバッジを回収した。それを少女に

さしだす。

「正式な戦いとはいえないから、これはもらえない。きみにあげるよ」

「いらないわ!」

太郎の目が見開かれた。

「きみはトーナメントの参加者なんだろう?」

「あたし、トーナメントなんか知らない。ここにはお兄ちゃんを探しにきたの!」

「お兄さん?」

こつくりと少女はうなずいた。

美和子が近づき、話しかけた。

「どうということなの?」

少女はそこでなにかに気づいたようだった。さつと一歩あらずさと足を開き中腰になる。右手を前へつきだし、手のひらを上にむけた。

「失礼しました! あぶないところお助けくださいまして、挨拶遅れました! どうかお控えなせえ!」

美和子がぼうぜんとして立っているのを見て少女はもう一度声をかけた。

「どうぞお控えなせえ!」

美和子は太郎と顔を見合わせ小声で話しかけた。

「あの……、どうしたんでしょう?」

太郎も首をかしげた。

「さあ……、でも挨拶といっているからにはなにかの儀式かもしれません。お嬢さま、あの女の子のまねをなさってはどうでしょう?」

美和子はうなずき、ぎこちなく少女のまねをして中腰になり手をつきだした。少女はそれを見て口をひらいた。

「さつそくのお控え、ありがとうござんす! あつし姓名をはつしますところ姓は勝田、名は茜あかねともうします。生まれは蘇州そしゅう、蘇州蘇州こうれいくんといいましても広うござんして、蘇州は交霊郡、飯田県は勝田村

の生まれ、松田川のほとりで産湯をつかり、十五のときまで育ちま  
してございます。この番長島へまいりましたのは行方不明の兄を探  
しにまいったというわけでして、この番長島には全国より腕自慢が  
集まるということで、あつしの兄もまたそのひとりでござんす。こ  
の勝田茜、西も東もわからない若輩者でございますがどちらさんも  
どうかおひきまわしくださいまして、ご指導ご鞭撻よろしくお願い  
いたします！」

そこまで一気に喋り終えると彼女はほつと息をつき、姿勢をもど  
した。美和子もとまどい一つも背をのばした。

「あのう……いまのは？」

茜と名乗った少女はこたえた。

「仁義をきったんです。お姐さんに助けてもらったからには、仁義  
をきるのが筋つてもんですよ」

彼女はにつ、と笑った。

太郎は口を開いた。

「勝田茜っていうと、勝田勝という参加者とはなにか関係あるのか  
い？」

茜と名乗った少女は手を打ちあわせ、ぴょんぴょんとはねた。

「ええ！ それ、あたしのお兄ちゃんよ！ やっぱりこの島にいる  
のね！」

「まあ……ね」

太郎は口をにごした。まさか最初にやつつけた相手だとは言えな  
い。

美和子は茜に話しかけた。

「ところでこれからどうなさるの？」

茜は元気にこたえた。

「お兄ちゃんをさがすわ！」

「そう、でもひとりではあぶないんじゃない？ さつきみたいなの  
ともあるし、よろしければあたしたちと一緒に行動しませんこと？」

茜は美和子の提案に迷っているようだった。ちらりと倒れている

男たちを見る。そして視線を美和子と太郎にうつした。そしてうなずいた。

「うん……そうしてもいいわ」

美和子はにつこりと笑った。

「あたしたち、いいお友達になれそうね。どう？ お友達になってくださる？」

「友達？」

茜は不思議そうに問い返した。美和子は優雅にうなずいた。

「そうよ。お友達。わたしはある理由があつてこの島でのトーナメントに勝ち抜く必要があるから、いずれあなたのお兄さまとはどこかで会うことになりそうよ。だから一緒に行動していれば……」

「いつか会えるわね！」

茜はいきおいよくこたえた。

と、ぐうーっ、という音がなった。はっ、と茜はじぶんの腹をおさえた。

美和子はまるで気にしない様子で茜をさそった。

「それじゃ、朝食にしましょうか？ あなた、ご飯は？」

茜は真っ赤になってこたえた。

「ええ、ぺこぺこ！」

「それじゃ、行きましょう」

三人はちかくの食堂目指して歩き出した。

監視センターで勇作はモニターを鋭い目で見つめていた。

「いまの戦いを再生してくれ！」

勇作の命令で、モニターに太郎と男たちの戦いが再現された。

「スローにしてくれ」

こんどはスローで再生される。太郎の動きに勇作は眉をよせた。  
「妙な動きだな……。たしかにやつの手が相手の体に触れているのはわかるのだが、それでどうやって敵を倒す……？」

スローモーションで再生された太郎の動きは、かるく相手の体の



あちこちをなでるような動きを見せていた。ただそれだけなのに、触れられた相手は電流にふれたように体を硬直させ、倒れこんでいく。

「あれは執事の習う護衛術です」

勇作のうしろにひかえていた洋子が口を開いた。勇作は首をねじむけ、洋子を見た。

「ほう、きみは知っているのか？ あの技のことを」

「はい。同級生ですから」

「そうだったな……。じゃ、教えてくれ。どうしてあんな動きで、敵を倒せる。なにか目には見えない武器かなにかを持っているのか？」

洋子は首を振った。

「そんなものではありません。人間には無数の神経節があります。いわゆる壺のことです。それらの神経節を適切に刺激すれば、相手に苦痛をあたえることもできますし、反対に苦痛をいやすこともできます。あの技の高度な拾得者は、それをつかって人を殺すこともできるそうです」

「きみもそれを？」

「ええ、太郎ほどうまくはありませんが。かれは執事学校でもっとも優秀な生徒でした。太郎ならそれくらいできるかもしれせん」

ゆつくりと勇作はモニターに向き直りうなずいた。

「ふうん……。おもしろい……。いや、じつに楽しみだ。いつか只野太郎と戦ってみたいもんだ。あいつの技が僕にきくかどうか、試してみたい」

勇作はモニターを見つめた。モニターではくりかえし、くりかえし太郎の戦いの様子が再生されていた。

「召し使い？」

食卓についた茜は目を丸くした。美和子と一緒にテーブルで朝食をとって、美和子が太郎のことを説明したとき茜は心底驚いたよう

な顔になった。信じられないというように首をふる。

「そんなものがまだいるなんて、信じられないわ！　ねえ、本当なの、太郎さん。あんた召し使いなの？」

「はい、そうです」

美和子のかたわらに腕にナプキンをかけ立っている太郎はにこやかにこたえた。美和子の給仕をしている太郎は非のうちのところのない執事振りを発揮していた。

食堂は閑散としていた。

トーナメントが進み、敗北者はどんどん帰されているからである。初日には込み合っていたテーブルも、今日は半分も埋まっていはい。

紅茶のカップをおいて美和子は茜に尋ねた。

「それで、いままでどうしていたの？」

「あたし喧嘩には自信ないしさ、このバッジがないと島にいられないでしょ。だから昼間はずっとかくれていて、夜になって試合が休みになったら食堂にもどってお兄ちゃんをさがしてたんだ。でも島はひろいし、食堂は島のあちこちにあるからなかなか出会えなくて……」

美和子はうなずいた。

「あなたのお兄さまは強いからきつと決勝戦まで残るわよ。だから最終日まで残れば、きつと出会えるんじゃない？」

「そうね、きつと会えるわ！」

茜はにっこりと笑った。そして美和子の顔をまじまじと見る。美和子は小首をかしげた。

「どうなさったの？」

「美和子さん、あんたこのトーナメントに勝つつもりなんでしょ？　なんでも優勝賞金を手に入れるつもりなんだって？」

「ええ、そうよ」

「それにしちゃ、あんまり気合がはいっていないみたいじゃない。そんなんじゃない、相手になめられちゃうよ！」

「なめられる？」

美和子はぼんやりと問い返した。あきらかに茜の話を理解していない。

茜は強くうなずいた。

「そうよ！ この島には全国の番長、スケバンが集まっているんだから、美和子さんだってそんなお嬢さまっぽい格好じゃなめられちゃうよ！ ほら、あそこのテーブル見て！」

茜は顎をしゃくって食堂のすみのテーブルをしめした。美和子と太郎はその方向を見る。テーブルには数人の男女が食事をとっている。全員、敵意をこめた視線をかわしあいもくもくと食事をつめこんでいた。

「ほら……ああやってメンチをきってるだろ？ ああやってなめられないようガンをとばしあってるんだ」

茜の言うとおり、テーブルに座っているかれらはおたがいの力量をはかっているようだった。じろじろとなめるようにお互いの全身に視線をおくり一触即発の状態である。やがて食事がおわり、かれらはだまって食堂を出て行った。

食堂から出るとするどいわめき声が聞こえてくる。

「てめえ！ なめやがって」

「そつちこそなんでえ！」

「やるかっ？」

「あたりめえよ！」

たちまち乱闘がはじまる。食堂は安全地帯で戦うことが禁じられているのですつと我慢していたのだ。

茜は美和子に顔を近づけた。

「ね、あたしが教えてやるから。そうすりゃあんたも一人前のスケバンになれるさ」

翌日、三人は連れ立って島を歩いた。

美和子は茜の忠告をつけがらりと格好を変えていた。髪の毛をア

ツプにし袖を短く切り、スカートも太もがあらわになるようミニに仕立てている。仕立ては太郎がやった。主人の服を仕立て直すということは執事として重要な技能であつたからである。茜は化粧も変えるべきだと力説したが、それだけは美和子は拒否した。

「まあまあ格好だけはなんとかなつたわね。でもまだ目つきがだめよ」

「そうなの？」

「もう……そのお嬢さまっぽい口調もなんとかならないのかなあ。まあ、黙ってりゃわからないか。とにかく目つきひとつで勝てる相手も勝てなくなるからね。まず最初にメンチをきるんだ。こうやって……」

茜はやや猫背になり美和子の全身をじろじろと見る。

「こうやってあんた、あたしに勝てるの？　って無言でメッセージをおくるの」

「こうかしら？」

美和子は茜のまねをした。茜はふきだした。

「だめよ。こうやって顎をつきだすようにして、もっと怖い顔をするの！　違つて、それじゃ怖いどころかなめられるよ。もっと目に力をいれなきゃ！」

「よくそんなんでいままで島に残っていられたわね。つぎはガンをとばすよ！」

ぐっ、と眉間にちからをこめ目つきをすどくさせる。

「これひとつで相手をびびらせることだつてできるんだ。違つよ、そりゃ寄り目だつて……！」

美和子はため息をついた。

「難しいのね……」

茜はぽん、と肩をたたいた。

「まあね……。練習すればなんとかなるわよ」  
美和子はうなずいた。

「あたし一生懸命練習するわ」

茜はあーあ、と両手をあげた。

最終日もちかくなるとあらかた敗者は島を去り、対決の場を見つけることが難しくなってくる。もともと廃墟だった島はひと気がなくなり、ただ風の音が聞こえるだけのさびしい場所に戻っていた。かつてにぎわった商店街も、窓ガラスはわれ、シャッターはへこみ、大売出しの張り紙がぺらぺらと風に吹かれている。

「ねえ、美和子さん。こっちにお兄ちゃんがいるって本当なの？」

茜は美和子に話しかけた。茜の胸には銅のバッジがいちまいひかっているだけだが、美和子の胸には金色のバッジが三枚も光っている。つまり三百人ものライバルから勝ち上がったというわけだ。美和子はうなずいた。

「ええ、両替所の係員が勝さんがよく立ち寄るからと言っていたから、たぶんこのあたりでお兄さまは戦っておられるのでしょう」

茜はくすりと笑うと、美和子の肩をどすんとたたいた。

「いやだあ、お兄さまだなんて！ あんなやつにはもったいないわよ！」

そう言うのとけらけらと腹をかかえて笑う。肩をたたかれた美和子はぼうぜんとなっていた。いままでこんなに気安い接し方にふれたことがないのだ。しかし悪い気分ではなかったようで、身を折って笑い転げる茜をほほ笑んで見ているだけである。

三人は島の南東部を目指していた。ここらあたりは昔は繁華街だったのか、シャッターをおろした商店街が立ち並んでいる。商店の窓という窓はことごとく窓ガラスがわれ、うつろな空間をぽかりとのぞかせている。

あいかわらずひと気はない。もしかしたら隠れているのか？と、太郎が足をとめた。

「ちよつとお待ちを……」

さつと片手をあげ、美和子と茜をひきとめる。

「どうしたの、太郎さん」

「声が……」

そついうと耳をすませた。美和子と茜も太郎の言葉に耳をそばだてた。

「あつ」

茜がちいさくさけんだ。

「お兄ちゃんの声だ！」

たたた……、と太郎が止めるまもなく駆け出す。

太郎と美和子は顔を見合わせた。うん、とどちらかともなくうなずくと、茜のあとを追って走り出した。

「このやろつっ！」

曲がり角のむこうから勝の怒声が聞こえてくる。ついでどすつ、ばきつというようなくぐもった音がする。がらがら……というような瓦礫が崩れる音がして、二、三人の学生服の男が曲がり角から姿をあらわした。かれらは顔や体のあちこちをおさえ、苦痛に顔をゆがめていた。

その学生服を追って勝田勝の巨体があらわれた。かれの学生服にはあちこちかき裂きができ、ひどく汚れていた。顔には殴られた痕があり、片方の瞼がふくれあがって目をふさいでいた。しかしまるでそんな傷を気にすることもなく闘志にあふれた口元は楽しそうな笑みをうかべていた。

獰猛な虎のように勝は相手に躍りかかると、拳骨を握り締めて殴りつけた。ひゃあ、と殴られた相手は悲鳴をあげ身を縮めている。勝はかれらの襟首をむんずとつかんで吊り上げ、その胸からバッジをむしりとった。

かれらのバッジをすっかり奪うと、勝は満足そうにぱんぱんと手を打ち合わせた。奪われた連中はほうほうのていで逃げ出す。

そのときかれは近づいてくる新手に気づいた。

勝の目が驚愕にまるくなった。

「茜……」

ぽかんと口が開いたままになる。

「お兄ちゃん……」

勝の妹の茜が立っていた。

「お前、なんでこんなとこにきたんだ」

勝はあきれたように大声をあげた。まったく意表をつかれたといったていだ。茜はつかえつかえ言葉をおしだした。

「だってお兄ちゃんたら、家を飛び出して連絡すらしてくれないんだもん！ トーナメントのことを知って、きつとここにくると思って探したんだよう……」

最後の「よう……」は泣き声になった。勝はこまったように頭の後ろをぼりぼりとかいている。

と、勝は茜の背後から近づいてくるふたりの人影に気づいた。その正体を知り、かれの顔つきが陰しくなった。

「お前ら……」

さつと身構える。茜はあわてて勝の前にとびだすと両手をひろげた。

「待つてよ！ 太郎さんと美和子さん。あたしのことを守ってくれて、それでお兄ちゃんを探す手伝いをしてくれたんだ。喧嘩なんかしちゃだめだよ！」

「馬鹿野郎……、おまえなに言っただ」

「こんにちわ、勝さん」

美和子はまるで初日に戦ったことなど忘れたようににこやかに挨拶をした。勝は拍子が抜けて戸惑っている。美和子は勝にゆっくりと近づき、話しかけた。

「妹さんの茜さんの話を聞いて、ぜひあなたに会わせなくてはと思い、勝手ながら案内させていただきました」

ちっ、と勝は舌打ちをした。まったく戦う拍子はずされ苦りきっている。

「余計なことを……。おれはトーナメントにかけているんだ。家に帰る気はないからな！ それよりあんた！」

さつと美和子を指さす。

「なんですか？」

「いまここでおれと勝負しろ！ はじめに会ったとき妙な手を使っていたのだが、こんどはそうはいかねえ。いまあんたがつけているバツジ、ぜんぶもらいたい！」

「しかたありませんね……」

ふつ、と美和子はため息をついた。

勝はにったりと口元をひろげた。闘志が全身にみなぎり、両手を握り締める。

「おっと、その前におれと勝負しな！」

だしぬけの大声に勝はぎくりとなつてふりむいた。

勝よりまだ頭ひとつ背の高い巨漢が立っていた。まるでゴリラが立ち上がったかのようなたくましい体つきである。男は勝と目があうと歯を見せて笑った。勝はその歯を見て目をほそめた。男の歯はすべて義歯で、しかも鋼鉄製であった。特別につくらせたのか、犬歯がまるで剣歯虎のように巨大である。

「おれは風祭淳平！ 去年の最終決戦にのこったという勝田勝をさがしていた。どうやらめぐり合ったみたいだな」

「なにおう……」

勝のこめかみに血管がうき、みるみる顔が紅潮する。

「どうだ、おれと勝負するか？ それとも女と戦うほうがいいか？」

「おもしれえ……。どうやらおまえと勝負したほうがおもしろそうだ」

にやつと笑うと美和子をむいた。

「そういうわけでちょっと待ってな。こいつをかたづけたら、相手してやるから」

「どうぞ」

美和子のはかるく頭をさげた。

勝はくるりと淳平のほうに向き直った。ばきばきと両手の指をならす。

「行くぜ！」



だっ、と地をけり淳平にむかう。淳平はぐわつと両腕をおおきくひろげ待ち受けた。

がつーん！

両者の額がぶちあたり、はつきりとおおきな音をたてた。まるで二台の戦車が真正面から衝突したかのようだった。

「！」

「……」

くらくらつ、とふたりの巨漢はかるく脳震盪をおこしたのかたじたじとなる。が、すぐに正気に戻りこんどはがっしりと両手を組み合わせた。

くくくく……、とふたりは全身にちからをこめて押し合った。勝と淳平はびくとも動かないでいるが、おそろしいほどのちからがこめられていることはあきらかだ。

ぼたり、ぼたりとふたりの顔から大粒の汗がふきだし、地面にしみこんだ。

淳平の顔に勝利の笑みがうかんだ。

頭ひとつ分背が高い淳平は、じりじりと勝の体をおしこんでいく。勝の背骨がゆっくりと弓なりにそって淳平の巨体を押しのけようと必死になっている。

ついに勝はがくりと膝をおった。

が、つぎの瞬間、勝は淳平のふところにもぐりこみ、その胸倉をつかんだ。

「わ！」

淳平の巨体が宙にうかんだ。

どっすーん！ と、地面に顔からつつこみはでな砂煙をあげる。

勝のいちかばちかの巴投げである。

「くそおっ！」

すぐに身を回転させ立ち上がった。が、その顔は砂にまみれ、口の中にこぶし大の石がはさまっている。淳平はがりがりつ、とその石を平然と鋼鉄製の入れ歯で噛み砕いてしまう。

と、そこへ勝がとびこんでくる。腕をひき、淳平の顎をとらえようとこぶしをかためた。

ぷーっ、と淳平は口の中の砕いた小石を吹き飛ばした。

「わっ！」

勝は手をあげてさけたが、いくつかは目のなかにはいったようだ。目が見えないのか、手探りで淳平をさがしている。

勝利の雄たけびをあげ、淳平は勝につかみかかった。巨大な手のひらがまともに勝の顎をとらえた。

ばしーん！ と、勝のほほがなり、かれはくるくると片足を軸にしてひっくりかえった。

ぶるぶるつと頭をふって立ち上がる。が、そうとういまのダメージはきいているようで、足もとはふらふらとおぼつかない。

淳平はさらに勝利を確実なものにしようとめったやたらと殴りかかった。こうなると勝はサンドバッグ状態で、反撃もかなわない。

とうとうがつくりと膝をつき、倒れてしまう。

「お兄ちゃん！」

茜は悲鳴をあげた。

淳平はにやりとわらうと勝に近づいて膝をつきのぞきこんだ。胸にひかるバツジを見つけ手をのばした。

「これはいただきぜ」

と、その伸ばした腕を勝がつかんだ。

「！」

うつ、と淳平の身がかたまった。血だらけの顔で勝は淳平を見上げにやりと笑った。

「まだはやい！」

ぶん、と伸ばした足が淳平の首にからみついた。ぐ、と淳平は息をつめ、ほほをふくらませた。あわててからみついた足はずそうと手をかけたがもう遅かった。勝の両足はがっちりと淳平の首をしめあげていた。みるみる淳平の顔が真っ赤になった。勝は歯をくいしばり、さらにちからをこめた。

「……！」

ついに淳平の顔は真っ赤から紫にかわってしまった。むきだした両目がくるりとひっくりかえり、白目になる。がくりと勝のふとももにかかつていた手がはずれ、ちからがぬけていく。

気絶したのだ。

ほっ、と勝は息をはくと身はずした。虚脱したような表情でたったいままで死闘をくりひろげていた相手を見下ろす。

「勝った……」

信じられない、というように首をふった。こめかみの傷口からどくどくと血が流れ、顔を真っ赤にそめて凄惨な状態になっている。さらに学生服もあちこちやぶれ、ズボンの膝におおきな穴があいていた。

じろり、と勝は美和子を見た。

「これで、ようやくお前と戦える……」

にやりと不敵な笑みをうかべると一歩、足を踏み出した。

と、ふらりとかれの上体がかしいだ。

う！ と、勝はじぶんの体におきていることが信じられないというような表情になった。がくがくと膝が笑って、勝はどつとばかりに地面に倒れてしまった。

「お兄ちゃん！」

悲鳴をあげて茜は駆け寄った。

「来るな！」

勝はさげんだ。茜は立ちすくんだ。

「勝負するんだ……邪魔するな……」

両腕にちからをこめ、立ち上がるうと必死になっているがうまくいかない。かれの両目はひとと美和子にそそがれ、闘志はすこしもおとろえていないようだ。いかんせん体の自由がきかないようだ。「茜さん、お兄さまを介抱してあげなさい。いくら勝負したくとも、その状態では無理でしょう」

美和子に言われ、茜は勢いよくうなずいた。勝の腕をとり、じぶ

んの肩にまわす。

「さあ、お兄ちゃん。どつかで休もうよ」

彼女は大柄な勝の体をじぶんの肩でささえ、歩き出した。よろよろと歩きながら、勝はじろりと美和子を見た。

「くそ！ 情けをかけるつもりか？」

ゆつくりと美和子は首を振った。

「いいえ。ただそんな状態のあなたと戦ったとしてわたしの名誉にはなりませんから。あなたの傷がいえたらお相手いたしますわ」

勝はけもののような唸り声をあげた。

「よし、その言葉おぼえておけ！ かならずお前を倒す！」

腕をあげ、ぶるぶるふるえる指先をつきつけ勝はさげんだ。美和子にはっこりとほほ笑んでうなずいた。

「楽しみにしています」

けっ、と勝はそっぽをむき、茜の肩をかりて歩き出した。

六日目の朝、美和子は窓をふるわせる轟音に目覚めさせられた。ベッドから起き上がると空を見上げる。

「ごおおん……ごおおん……」

エンジンの音をとどろかせ、飛行船がゆつたりとやってきた。ドアが開き、となりの部屋にひかえていた太郎がはいつてきた。太郎は美和子に声をかけた。

「おはようございます」

美和子はうなずくと飛行船のほうにふたたび顔をむけた。飛行船はゆつくりと船首をめぐらせるとその横腹をむけた。スクリーンが美和子の正面にくる。

スクリーンに勇作の顔がうかんだ。かれはスクリーンのむこうからまっすぐ前を見つめている。まるで勇作と美和子は顔を見合わせているかのようだった。スピーカーから勇作の声がひびく。

「諸君、いよいよ明日は最終日だ。そろそろ参加者もしばりこまれ、最後の決戦をむかえる。それで明日は島の中央にあるコロシウムに

来てもらいたい。そのコロシアムが、最終決戦場というわけだ。諸君は今日は体を休め、明日の決戦にむけ準備をしてもらいたい。僕もそこで待っているでしょう。では、よい戦いを！」

スクリーンの勇作はにやりと笑うと、飛行船はへさを島の中央にむけ去っていった。

ドアの開く音にふりむくと茜が立っていた。彼女は美和子のとなりに立つと飛行船をにらんだ。

「気障なやつ！ だいつきらい！」

茜が吐き捨てるようにさげんだ。美和子にはっこりと笑った。

「あなたは勇作さんが嫌いなのか？」

「そうよ！ あんな男、あたしのお兄ちゃんにやつつけられちまえばいいのよ！」

「お兄さま、あれからどうなさったの？」

「お兄ちゃん、傷をなおすためだつてどっかの宿泊施設にこもってるわ。あたしがいちや勝負に集中できないっていうからもどつてきたの……」

そこまでしゃべって茜はふと美和子の顔をみつめた。

「ねえ、美和子さん。どうしてあいつを勇作さんってよぶの？ なんだか知り合いのような言い方じゃない？」

「勇作さんはわたしの許婚なのよ」

ええっ、と茜は大声をあげた。

「でもどうして、そんなことになってるのに、トーナメントなんかに？」

美和子は勇作との会話を説明した。

茜は憤然となった。

「馬鹿じゃないの！ だいいち親の決めた相手と結婚するなんて古すぎるわよ！ それにトーナメントに勝たないと結婚しないなんてあんたの考えがわからない。ねえ、肝心の美和子さんの気持ちはどうなのよ？」

「わたしの気持ち？」

美和子は胸をつかれたような表情になった。

「そうよ、あんた勇作とたった二回、会ったきりなんでしょう？  
そんな相手、好きになれるの？　いくら親のきめた許婚といっても、  
ひどすぎるわ！」

「そんなの考えたことなかった……」

ぼんやりと美和子はつぶやいた。茜はうなずいた。

「そうでしょうとも。ねえ、あたしは美和子さんより年下だけど、  
結婚するなら好きな人とするべきだってことくらいわかるわ。親の  
決めた相手じゃなくてね！　それにあんた！」

茜はくると太郎にむきなおった。

「え？　僕？」

いきなり話しかけられ、太郎は狼狽した顔になった。

「そうよ、召し使いかなんか知らないけどあんたもあんだだわ。給  
料ももらわないで、ただ誓いをしたからってこの女についていくな  
んてさっぱりわからない！　あんたは女の子を好きになったことな  
いの？」

たちまち太郎の顔は真っ赤に染まった。

「そ、そんなこと……考えたこともないよ！」

いつもの冷静さがくずれ、しどろもどろになる。

茜は両手をあげた。

「もう、あんたたちって……！　処置なしだわ！」

飛行船は島の中央にあるコロシウムへ飛行した。ローマの闘技場  
をまねたこの建物は勇作が作らせたものである。総石造りの円形の  
競技場は、客席はなく、ただ楕円形の広場のまわりを古典様式の壁  
がとりまいていただけの施設である。

しかし壁の一端に貴賓席がしつらえられており、その屋根は飛行  
船が着陸できるようになっている。飛行船のゴンドラから紐がたら  
されると係員がわらわらとあつまり、地上の繫留塔へとめ、飛行船  
は高度をさげた。

タラップが横付けされ、ゴンドラのドアが開くと勇作が姿をあらわした。背後には木戸と洋子をしたがえている。

今日のかれはいつもの伝説のガ克蘭に肩から足もとまでとどく真っ黒なマントをはおっていた。飛行船のプロペラがたてる風にマントがおおきく波打っている。ポマードできつちりとまとめたリーゼントもその風ですこし乱れ、勇作はポケットから櫛をだしてちよつと髪のを直した。

勇作が地面に足をおろすと、飛行船からロープがはずれ、エンジンの轟音とともにさつていった。かわりに階段から無数の人間があらわれた。かれらはテレビ・カメラをかつぐカメラマンや、写真撮影のためのカメラマンをしたがえている。このトーナメントを取材しに來た報道陣である。

勇作のまわりに数人の記者が集まってつぎつぎにマイクを突き出してきた。

「緒方さん、今年のトーナメントはどう評価しますか？」

記者の質問に勇作はちよつと考え、にっこりと笑顔を見せた。ここぞとばかりに無数のカメラのフラッシュがたかれ、シャッター音が響いた。

「大成功、といっていいでしょう。今回の参加者はみな水準が高く、いい試合を見せてくれました」

「去年は緒方さんが挑戦者をしりぞけたのですが、今年も勝つ自信は？」

「当然です。勝つ自信はありますが、そろそろ僕を負かして、賞金を手にする挑戦者があらわれてくれないかと思っています」

どつとばかりに報道陣がわいた。

きつい化粧をした女性のリポーターがマイクをつきつけ口を開いた。

「ことしの挑戦者のなかの女性で、高倉美和子という参加者がいますが彼女をどう評価しますか？」

「彼女はもつともおおくの対戦者をしりぞけています。おそらく最

終決戦にのこる可能性がもつともたかい挑戦者でしょう。対決を楽しみにしていますよ」

さっきの女性リポーターはうなずき言葉をついだ。

「なんでも彼女はあなたの許婚だそうですね？　それが戦いに影響するのでは？」

彼女の言葉にほかの報道陣は顔を見合わせ仰天したような表情になった。あきらかにいまの情報ははじめて聞いたという顔つきである。

勇作は首を振った。

「まったく影響しません！　彼女は立派な武道家ですし、僕もまた神聖な勝負に私情をまじえることはしたくありませんから。それではこれで失礼します。明日のための支度がありますから……」

くるりと背をむけ、マントをひるがし去ろうとする勇作に記者たちがおいすがった。

「あつ、まってくださいよ！　いまの話は本当なんですか？」

「彼女を愛しているのですか？」

「おふたりの関係をもうすこし詳しく！」

勇作はまったくとりあわずさつさと下り階段へ急いだ。わらわらとりまこうとする記者たちを木戸と洋子が盾になつてふせぐ。勇作はあつというまに記者たちの視界から消え、あとにはぼうぜんと取り残された報道陣がさっきの女記者にだしぬかれたことをじわじわとかみ締めていた。

ひとりの記者がじろりと女リポーターをにらんだ。

「おい！　あんた、いまの話は本当なのか？　どっからあんな話を聞きつけた？」

つめよられ、女性リポーターはうろたえた。

「本当よ！　あんたたち、緒方財閥から提供されたビデオを見ていなかったの？　あのなかに高倉美和子と勝田茜というふたりのやりとりがあつたのよ。まあ、放映されていなかったから、ちゃんと提供されたビデオを見ていなければ知らなくても無理はないけどもね



！

彼女の言葉にはかの記者たちはくやしそうに頭をかきむしった。あきらかに素材をちゃんと取材していなかったかれらのミスだった。「こりやもうすこし緒方勇作のことを調べないとだめだな……」ひとりがつぶやいた。それは記者全員の思いでもあった。かれらの胸にあらたな闘志がわいた。みな、緒方勇作と高倉美和子というふたりの情報を集めようという意欲がわきあがっていた。

6

ぞろぞろと無数の参加者が島の中央にあるコロシウムへと集まってくる。

みなこの一週間、戦いに勝ち残り、身につけているものはぼろぼろにやぶれ、あちこちすり傷や打ち身だらけだったが元気いっぱいだった。島のあちこちに点在する宿泊施設で出される食事は栄養の吸収がよく、また提供される医薬品も傷をなおすことに役立っていた。そもそも異常な体力の持ち主でなくては勝ち残ることすら難しい。ふつうの人間なら癒えるのに数週間もかかる傷も、かれらはあつというまに傷口がふさがり翌日には平気な顔で戦うことができる。そんな男女が勝ち残っているのだ。島に残っている参加者の人数はすでに三分の一に減っていた。

島のほとんどの建物が風雨にさらされ、崩壊寸前にあるのにたいし、コロシウムはまぶしいほどに外壁はかがやき、新築であることを主張していた。

コロシウムをめざす参加者たちはおたがい値踏みしあいながら歩いていた。これからの戦いで強敵となる相手を探しているのだ。

そのなかに勝田勝の姿があった。

歴戦の証拠のガクランは泥に汚れ、あらゆるところにかぎ裂きがのこり、その顔には無数のあらたな傷跡があった。しかし淳平との死闘も、わずか一日の休息ですっかり元通りになっていた。かれは

一日中、体力を回復させるためじっと動かずにすごしていた。それは獣の回復の方法に似ていた。

勝の歩く姿はまるで巨大な猫を思わせた。二メートル近い巨体なのに、まるで足音というものをたてない。前に踏み出す一歩からつぎの一步までなめらかな歩行である。ゆったりとした歩幅なのに、どういうものか人の倍は早く歩く。この数日間の戦いの経験が、かれに練達の勇士のような風貌をあたえていた。周りの試合の参加者たちは、勝が近づくのと気配を感じて無意識にか遠ざかってしまう。それはまるで船のへさが波をかきわけるとようなものだった。

コロシアムの入り口にたどりつくと勝はぐいと首をねじむけて壁面を見上げた。

唇がゆがみ、歯がむきだしになった。それはまるでこれからの戦いに緊張しているかのように見えたが、これは勝の笑顔なのだった。

「やってやるぜ……！」

つぶやくと勝は足を踏みだし、コロシアムのなかへはいっていった。

勝のはいつていった入り口の反対側に美和子と太郎、そして茜の姿があった。

「茜さん、どうしても中に入るつもりなの？」

美和子は隣でコロシアムの入り口を見上げている茜を見て話しかけた。茜はつよくうなずいた。

「ええ、お兄ちゃんがこの中にいるんだもの。なんとしても、お兄ちゃんを家に帰したいんだ！」

茜に太郎が話しかけた。

「それじゃ、僕のちかくにいなさい。僕ができるかぎりきみを守ってあげるから」

茜はきつと太郎をにらんだ。

「あたしにかまわないで！　じぶんの身くらい、じぶんで守れます！」

そうですか、と太郎はひきさがった。もちろん彼女に言われただけでかまわないでおこうと思ったわけではない。いよいよとなったら助けにはいるつもりだった。

美和子はすっ、と足を踏み出した。コロシアムの入り口に進んでいく。太郎、茜がそれにつづく。

三人の姿はコロシウムにすいこまれていった。

百名あまりの参加者がコロシウムに勢ぞろいしていた。

ひゅー……、と一陣の風がまつたいらなコロシアムのなかを吹き渡った。コロシウムに無数にあげられている窓から、風が吹き込んでくるのだ。このコロシウムが立っているのは島の中央で、もっとも標高が高く、風の通り道になっているため四六時中、風がやむことはない。コロシアムの地面には砂がしきつめられ、それらの砂が風にまきあがっている。なぜ砂がまかれていくかというと、戦いによる血が足をすべらせるのを防ぐためである。コロシアムの会場の壁ちかくには、このトーナメントを運営するための係員が背をぴんとのばし、無表情に立ち並んでいた。かれらはここでの戦いで戦闘意欲をうしなった脱落者を運び出すためにひかえているのだ。コロシアムの壁の上にはこの戦いの模様を中継するため何台ものテレビカメラがさまざまな角度でレンズをむけていた。この戦いは全国の視聴者たちの関心のまとなっていた。

参加者たちは戦いの時を待っていた。

かれらの視線はコロシアムの北端にしつらえている貴賓席に集中している。

と、その貴賓席に動きがあった。

緒方勇作がマントをひるがえし、姿をあらわしたのだ。背後に木戸と洋子をしたがえているのはあいかわらずである。

勇作は腰に両手をあて、息をすいこんだ。

「諸君！」

かれの声はコロシウムにろろろと響き渡った。マイクもなしで、

勇作の肉声は会場のすみずみまで聞こえている。コロシウムを設計した技術者は音響効果を計算しつつ、この貴賓席からの位置からなら、コロシウム中に声がとどくよう設計したのだ。

「今日が最終日だ！ 今日の戦いで、最終勝者がきまる！ さあ、この伝説のガ克蘭を僕から奪い取ってみせてくれ！」

勇作はマントをばさりとひるがえし、その下に着込んでいる真っ赤なガ克蘭を見せ付けた。マントをはずし、洋子に渡す。そしてくるりと背をむけた。

きらりと金の刺繍でぬいつけられた「男」の文字が陽光に反射した。

「この”男”の字をぬいつけたガ克蘭を着たものは伝説の番長とよばれるだろう。もしそれが女なら、伝説のスケバンとよばれることになる。さあ、伝説を受け継ぐものはだれだ？」

うおおお、と勇作の挑発に参加者たちは喚声をあげた。勇作はそんな参加者たちの反応に満足そうな笑みをうかべた。

さっ、と勇作の右腕が天をさした。

「はじめ！」

とたんにコロシウム中に緊張がみちた。

最初に動いたのは勝だった。

雄たけびを上げ、勝は手近にいた参加者に戦いをいどんでいった。勝のこぶしがまっすぐ最初の獲物にむかって突進する。最初のねらいはひよろりと背が高い、うすい灰色のガ克蘭を身につけた男だった。

が、さすがにここまで残っていた参加者である。ぶうんと音をたててふりまわされた勝の拳をさつとさけると身構え、あたまをひくくするとまるで地面にとびこむように身をおどらせた。勝の足をねらったのだ。それと見た勝ははつとばかりに宙に飛び上がった。

と、勝の背後からもうひとりの敵が回し蹴りをとばしてきた。宙に浮いた勝の足をねらい、体勢をくずそうというのだ。第二の相手は背中までたらしした長髪の太った男で、空手着を身につけていた。

肥満体にかかわらず、かれの身ごなしは敏捷だった。くると足を旋回させ、勝の膝をねらってくる。

空中で勝の足と空手着の男の足ががつと音をたてて数度にわたって噛みあった。

だつ、とふたりは地面に降り立ち、にらみあった。すすす、と最初の相手が空手着の男のとなりに位置取りをして身構えた。

「ふたりがかりかい？」

勝は声をはりあげた。

細いのと太ったのふたりは顔を見合わせた。無言でふたりで協力しようという相談がまとまったようだった。かるくうなずくと勝にむけて突進する。細いほうは上半身をおりまげ、勝の下半身をねらい、太ったほうはとん、と地面をけり空中にとびあがり、とび蹴りをくらわしてくる。

勝は両腕を交差させ、とび蹴りをブロックした。がつん、と音がして太ったほうは勝のブロックにはねとばされ、くるくると空中で回転すると猫のように着地した。

勝は腕をそのままふりおろし、下半身をねらって飛び込んできた細いほうの後頭部にたたきこんだ。

ぐえ、というような声をあげ、細いほうの男はべしゃりと地面に四肢をなげだして倒れてしまった。そのままひくひくと両手両足を痙攣させている。気絶したらしい。

太った空手着の男は足から着地するとそのまま勝をめがけて次の攻撃を開始した。

が、一歩すすんだとき驚愕の表情がその顔にうかんだ。

がく、と膝がおれつんのめる。

勝がかれのとび蹴りをブロックしたときおそろしいほどのちからがその膝にくわったのだらう。だしぬけの苦痛が膝から脳天につきささる。たちまちその顔が真っ赤になり、たらたらと脂汗がうかんだ。

「くそ！」

真っ赤だった顔がさつと青くなった。どすどすと地面をふみしめ、勝が近づいてきたのだ。勝は拳をかたく握り締めていた。その目的はあきらかだ。

太った男の顔に恐怖がうかんだ。

弱々しく両手をあげ勝の攻撃を防御しようとしたところみる。

ぐわしゃ！ と、勝の岩のかたまりのような拳がその両手もとでも炸裂した。ぶわーっ、と太った男の鼻から鼻血がふきだした。かれの両目はくるりと裏返り白目をむいた。どたとあおむけに倒れこむとがくりと首をねじまげた。ぽかんと開いた口から折れた歯がぼろぼろと地面にこぼれ落ちる。

勝はふっ、と額にうかんだ汗をふくと一息ついた。

「畜生、あの女どこにいやがる……」

もちろん、美和子のことだ。

その美和子はコロシアムの反対側にいた。

美和子を中心に、太郎、茜がその両側にいた。どの顔ぶれもこの参加者のなかで勝ち抜けるようには見え、したがって当面の勝利をえるためまわりの参加者たちの標的となっていた。

つぎつぎと無数の参加者たちが闘志をむきだしに襲いかかる。

そのなかを美和子と太郎はごくふつうの足取りで淡々と歩いている。ときどき襲いかかる挑戦者たちにむけかすかに腕をのばす。その指先が襲いかかるものたちのどこかに触れるか触れないかという瞬間、相手はまるでじぶんから飛び上がるかのように跳ね飛ばされていった。

ちぎっては投げ、ちぎっては投げ、という形容があるが、美和子と太郎のコンビにはあてはまらない。まるで平和に散歩しているだけで、まわりの参加者が勝手に跳ね飛ばされているように見える。それらは跳ね飛ばされたあと、どこをどうされたのか地面で悶絶して立ち上がることもすらできずにいた。

ふたりの後を歩く茜はあつけにとられていた。

「ねえ、どうということなの？」

茜は太郎に話しかけた。

「何がです？」

「なにが……って、あんたたち何もしていないみたいに見えるんだけど。どうしてあいつらつぎつぎ倒れてしまうの？」

「まあ、ちよつとしたコツみたいなものです。ほら！」

そう言うのと太郎は襲いかかったひとりの学生服の男の腕をねじりあげた。男は苦痛に声もでないようだった。その背中 of まんなかを太郎はついてみせた。

ぎゃっ、と男は悲鳴をあげるとぴん、と背中をつっぱらかせ、そのままどすんと棒のようになって倒れた。

「適切な神経の集まったところを刺激すれば、人間は簡単に気絶します。もちろんあやまった攻撃は危険で、命すらうばう可能性がありますからこの秘法は教えられません」

茜はぶるっ、と首をふった。

「知りたくもないわ……」

そのうち三人のまわりに人がいなくなってしまった。ようやく美和子と太郎というふたりの本当の強さが認識されらしい。まわりをとりまく男女は輪を描いて敵意をもった視線をそそぐだけで、だれひとり襲いかかるうとはしない。

じろじろとおたがい、だれが三人にむかっていくかけん制しあっている。

「どうした！ 戦うものはいないのか？」

それを見ていた勇作が貴賓席から声をはりあげた。勇作の声はロシアム全体にひびきわたり、臆していることがあらわになった。まわりをとりまいた男女はその声にふるいたった。

わあ、と喚声をあげ三人にむかっていつせいに駆け出した。おおくは素手だったが、なかには武器を手に行っているものもある。

密集した攻撃陣のなかに太郎と美和子は飛び込んだ。とたんにその中心から噴水のように無数の男女が四方八方に飛び散る。ぐえ、ぎゃっ、というような押し殺した悲鳴があがり、つぎつぎと地面に

倒れ気絶していった。それら倒れた連中はコロシアムの壁ちかくにひかえていた係員の手によってつぎつぎと担架に乗せられ、会場のそとへ運ばれていった。たちまちコロシアムのなかはまばらになっていった。

日差しがかたむいたころ、ようやくかたはついた。

太郎、美和子、茜の三人はコロシアムの中心にいた。コロシアムには夕日がななめにさしこみ、あたりをオレンジ色にそめていた。

勝田勝もまた勝ち残っていた。

勝はふうふうはあはあと荒い息をつき、くたびれきっていたが目からはららんと輝き、闘志はうしなつてはいなかった。

それにたいし、太郎と美和子は汗ひとつかいてはいない。茜はもともと戦闘に参加しておらず、じっと兄の姿を見つめていた。

「見事な戦いだった！」

勇作が声をはりあげた。勝ち残った四人はいっせいに貴賓席の勇作を見上げた。

「この四人で最終決戦をしてもらいたい。戦いに勝ち残ったものが僕との戦いの挑戦権をえることになる」

勇作が身振りをするとコロシアムの中心あたりにかすかな土煙がおきた。ごとん、と音がして中心がもりあがった。ごごとと機械が動くような音とともに円形の台座が姿をあらわした。ごと、ごごと、と円形の台座のまわりが階段を形作った。

「そこが戦いの舞台だ。一対一でそこにあがり、戦ってくれ。最後までその舞台に残っていたほうが勝者とする」

勇作の言葉に台座に駆け上ったのは勝だった。

じろりと美和子を見ると腕を上げ、指さす。

「おまえ！　こんどこそおれと勝負しろ！」

美和子はうなずき、台座に近づいた。

そのとき勇作が声をかけてきた。

「そのまえに只野五郎、そして勝田勝の妹、茜のふたりはこれからどうするんだ？　見たところ、いままで勝負に加わってもないし、



バッジも奪ってはいないようだが」

太郎は勇作を見上げた。

「僕は召し使いにすぎません。ここにはお嬢さまのお世話にきているので、勝負はするつもりはないんです」

茜もさげんだ。

「あたしだってお兄ちゃんを家に帰すためにきたから、勝負なんかしたくないわ！」

勝は茜にむかってほえた。

「茜！ おれは家に帰るつもりはないからな！ まだまだおれは勝負をする相手をさがして生きるつもりだ。おまえ、いいかげん帰れ！」

茜はぷつ、とふくれた。

「なに言ってるのよ、お兄ちゃん！ いいかげん、頭を冷やしたらどうなの？ それじゃ、いつになったら帰るのかわかんないでしょ」

「おれの勝手だ」

「ああそう。それじゃこうしましょう。ここで美和子さんに勝てたらお兄ちゃん、好きに生きればいいわ。でも、もし美和子さんに負けたなら、家に帰るって約束して！」

勝はぱくぱくと口をあけたり、しめたりした。

「な、なに言ってるんだ！ なんて、おれがそんな約束しなけりやならねえんだ？」

「自信がないの？」

「馬鹿いうな！」

「じゃ、約束したっていいじゃない？」

ぐ、と勝はつまった。

「よ……よし。約束する。この女に負けたら家に帰る！ それでいいんだな？」

うん、と茜はうなずき美和子を見上げた。

「こういうことになったから、美和子さん。がんばってね！」

美和子はくすりと笑った。彼女にとっても茜の天真爛漫な様子は

このましいものだったのだろう。彼女は勝のほうを見やり、声をかけた。

「勝さん、妹さんに心配かけてはいけませんね。茜さんのためにも、あたしががんばりますのでよろしくお願いいたします」

そう言うのと軽く頭をさげる。勝はすっかり調子をはずされ、惘然としていた。

「まったく……、わけわかんねえよ！」

ぶつぶつぶやくと身構えた。

「こい！」

美和子はそんな勝に対し、まったく構えを見せない。ただ、すつと姿勢よく背をのびし立っているだけだった。勝はそれでも用心深く、じりじりと距離をつめていった。

美和子に対し、勝は身長で頭ふたつ分、体重で三倍はありそうだ。ほっそりとした彼女がまんがいちにも勝に勝てる見込みなどなさそうに見える。が、勝は油断をしていない。最初の出会い以来、彼女の強さは身にしみていたからだ。

そろそろと間合いをつめると、勝は腕を前にのばした。

さつ、と勝が動いた。

敏捷な獣のような動きで勝は美和子の肩をつかもうとする。美和子はさつ、と頭をさげ勝の手首をつかもうと腕をあげた。が、勝もそれはこころえていて、美和子の手をさけすばやくひっこめた。

しばらくおたがいの攻防があつて、ついに勝のグロープのような手が美和子の肩をがっちりつかんだ。勝はこのちいさな勝利ににやりと笑みをうかべた。美和子は身をねじり、手をのばして勝の手首をつかもうとしたが、勝はそれは心得ていて美和子のほっそりとした身体を乱暴にふりまわして対抗した。

勝は自由な片手をふりかぶり、美和子の顔をねらった。

それが待ち望んだ美和子のチャンスだった。

美和子の白魚のような指先が勝の手の甲につきささったように見えた。

勝は絶叫した。

手の甲には痛点が集まっている。そこを美和子の指がぎりぎりにつきさしたのだ。あまりの苦痛に勝は彼女の身体をつかんでいた手をはなし、うずくまった。

「畜生……！」

真っ赤な顔で美和子をふりあおぐと、勝は彼女の足めがけて体当たりをこころみた。これはうまくいった。体重百キロ以上の勝の巨体が美和子の足にあたると、彼女は身をかわすまもなく仰向けにたおれこんだ。すかさず勝は美和子に馬乗りになり、首をしめにかかる。

と、美和子は足をはねあげ、抜き手を勝の鳩尾にたたきこんだ。最初の戦いとき、勝は彼女の抜き手に鳩尾を突き刺され、気絶している。が、こんどは勝は平気な顔であった。美和子の表情にはじめて狼狽の色がうかんだ。

「見る！」

勝は学生服のボタンをはずし、上着を開いた。その前面に木の板がはめこまれている。ちよっとしたプロテクターである。

勝は勝利を確信した。

しかし美和子は上手だった。勝の上着の前がはだけたのにつけこみ、今度は抜き手をかれの喉仏につきさした。

ぐえっ！ と、勝はせきこみぐらりと上体をおった。さっ、と美和子は勝の巨体からぬけだし、距離をとる。

げほげほと勝はせきこみ、うずくまった。ひいーひいーというような甲高い笛のような音がその喉からもれる。くくくく……、とうらみがましい目で美和子を見上げ、じりじりと膝立ちになって近づこうとする。たちまちその顔に大量の脂汗が浮かぶ。

美和子は声をかけた。

「あなた、呼吸ができなくなっています。吸うことはできませんが、息をはくことができないのでしょうか？ そのままでは肺が破裂してしまいますよ。いま、降参なされば、あたしがもとにもどしてさし

あげます。降参なさい！」

勝の目に涙が浮かんだ。悔し涙であろう。それでもいやいやをするように首をふり、降参しようとはしない。ぐっ、と美和子を睨んだ視線はそのままに、じり、じり、と近づいていく。ひっしになって腕をのばし、戦う姿勢を放棄しようとはしない。

と、ついに勝の意識が飛んでがくりとかれはうつぶせになった。ひくひくと全身が痙攣している。

美和子は勝を背後から抱き起こし、活を入れた。

くふっ、というような息が勝の口から漏れ、ふうーっとおおきく息をはく。たちまちふいごのような呼吸音が勝の口から聞こえてきた。

美和子は茜を振り返った。

「茜さん、お兄さんを介抱なさってください。しばらくすれば意識をとりもどします」

数回呼吸をくりかえすと勝の両目がぱっちり開いた。ぐるぐるとあたりを見回し、じぶんのおかれている状況を確認する。敗北感にかれの口元がぐっ、と引き締められた。

茜が台座にあがると勝はするどくさけんだ。

「来るな！ 寄るんじゃねえ！」

「でも……」

勝は立ち上がった。じろりと美和子を見る。ふっ、と息をはくと肩をすくめた。

「負けたよ。あんた、強いな」

苦い笑いがうかんだ。肩を落としたかれの後ろ姿はなんだかさびしそだった。茜の前を無言で通り過ぎ、出口へむかう。

「お兄ちゃん……」

「わかつてる。家に帰るさ。修行のやりなおしだ」

振り向かずそれだけぱつりと言つと、彼は出口へ歩いていった。出口の向こうには水平線が見え、そこに夕日が沈んでいる。勝はその夕日のなかへ去っていった。

茜は美和子に向かいぺこりと頭をさげた。そして兄を追って駆けていく。

残されたのは太郎と美和子のふたりだった。

「さてと……」

勇作は貴賓席からふたりを見下ろした。

「これで僕ときみの最終決戦ということになったね。楽しみだ。見事僕を倒し、賞金を手にできるよう、がんばってもらいたい」

「ちよつと待つてください！」

叫んだのは太郎だった。

え？ と、美和子と勇作は太郎を見た。

意外な出来事にふたりの目は見開かれた。

いままでまったく存在感を消していた太郎がいまになって何を言いつ出すとするのか？

太郎は貴賓席の勇作を見上げた。

「あなたにひとつ質問があります！」

「なんだい？」

勇作は面白がるような表情になった。

「この書面に見覚えがありませんか？」

太郎は上着から一枚の書類をとりだした。

コロシアムの無数のテレビカメラがいつせいに太郎が手にしている書類をクローズ・アップにする。書類はかすかな風にふかれ、ひらひらと動いていた。

貴賓席のテレビでその書類を見た勇作の顔色が変わった。

「それは……」

「そうです。これは高倉男爵のもとに届けられた承認を求める書面です。僕は万が一のことを考え、コピーをとっておいたんです。この書類は全国執事協会に届けられ、弁護士の精査を受けています。内容は、男爵の全財産を第三者の管理下におくというもので、その第三者は緒方財閥につながっていることが調査の結果判明しています」

太郎の爆弾発言に美和子はあおざめた。

「太郎さん、それ本当のことなの？」

「はい。本当のことです。男爵の屋敷、財物は競売ですべて緒方財閥のものになりましたが、それ以前に勇作さんのものとなっていました。これはあきらかな法令違反です。あまりよい言い方ではありませんが、いわゆる籠脱け詐欺と呼ばれる手口です」

美和子は勇作を見上げた。彼女の顔にめずらしく怒りの表情がうかぶ。

その勇作は貴賓席で両手をぐっ、とにぎりしめ立ちすくんでいた。  
「貴様……」

怒りがその端正なマスクを醜くゆがめていた。  
くるりと身をひるがえすと背後にひかえている木戸をにらんだ。

「木戸！　どういうことだっ？」

木戸はぱくぱくと言葉もなく口を開いたり閉じたりしていた。あまりの展開に思考が停止しているかのようなだった。

と、壁に設置されている電話のベルが鳴り響いた。

ぎろりと勇作は電話機をにらむ。ぐい、と顎をしゃくって木戸に出るよう指示する。木戸は勇作の追及からのがれることができ、あきらかにほっとした様子で受話器をとった。

耳にあてがうと顔色が変わった。

勇作を見る。

「あのう……あなたにです」

おそろおそろ受話器をさしだす。

無言で勇作は木戸から受話器をひったくるようにして受け取ると耳に押し付けた。

「こちら全国執事協会の田村と申します」

声は中年の女だった。勇作は眉をひそめた。

「なんだ。いま忙しいんだ！」

うなるように答えると、田村は冷静につづけた。

「いま只野太郎があなたの不正について申し立てた件で、こちらか

らもお知らせしなければと思いましてご連絡さしあげることになりました。当方は全国すべての執事、召し使いの利益を守る組織です。その利益とは召し使いが使える主人の利益もふくまれます。只野太郎はかれが仕える主人である高倉男爵が、あなたの詐欺行為についていちじるしい不利益をこうむったむね報告してきました。わがほうでそれについて調査した結果、それが事実である可能性が高いと判断いたしましたので、法的解決をとる用意があります」

「なんだと！ そんなことできるものか！ 証拠があるのか？ あの書類がおれがつくらせたという証拠などない！ あの只野太郎というやつが、でっちあげたのかもしれないじゃないか？」

勇作がかみつくように怒鳴ると、電話の向こうの声は静かにつづけた。

「証拠などいくらでもありますよ。高倉男爵の財産、屋敷、有価証券すべては直接あなたの支配下にありませんが、あなたがおつくりになったトンネル会社についての定款や振込先、あらゆる事実があるあなたが高倉家の財産を奪ったことをしめています。裁判になれば、これらはすべて提出されるでしょう。そうなればあなたは終わりです。そうなりたいですか？ その前に、高倉家の財産をすべて美和子嬢にお返しなさい。そうすれば、当方はなにも追及しようとは思いません。傷の浅いうちに、もともどすのです。裁判になれば、あなたのイメージは地に落ちます。そうなれば、緒方財閥といえど、とりかえしのつかないダメージをおうでしょうね」

「黙れ！」

ひと声さけぶと勇作はたたきつけるように受話器をもとにもどした。

くるりとコロシムを見下ろす位置にもどるとらんらんとひかる目で太郎をにらんだ。そして木戸に命令する。

「中継は中止だ！ クルーはすべて引き上げさせる」

勇作の命令をうけ、木戸はマイクをつかって会場を映し出しているテレビカメラのすべてに命令を伝達した。カメラマンたちのそば

に警備員が近づき、ケーブルの接続をつぎつぎと切断した。突然中継を中断されたカメラマンは驚き、抗議の声をあげたが警備員たちはかまわずカメラマンたちを引きずるようにして引き上げさせた。それを確認した勇作は素早く身をひるがえし、屋上へとつづく階段に歩き出した。

「社長っ！」

木戸が慌ててその後を追った。洋子はどうしようかとためらっていたが、結局そのあとにつづいた。

貴賓席を見上げていた太郎と美和子は勇作の姿が消えたことに眉をひそめた。

あいつ、どうするつもりだ？

と、貴賓席の屋上からばたばたという音が聞こえてきた。

ひゅーん……というローターが回る音がして、二軸ローターのジャイロコプターが姿をあらわした。ジャイロコプターには勇作と木戸、洋子が乗り込んでいる。

「あっ！」

太郎は一歩前にでて空にうかぶジャイロコプターを見上げた。

「逃げ出した！」

「どうするつもりなんでしょう？」

美和子がつぶやき太郎はさげんだ。

「証拠を隠滅するつもりですっ！ あいつが男爵の財産をまきあげた証拠を消し去るつもりなんだ！ お嬢さま、追いましょー！」

うん、とうなずき美和子はコロシアムの出口を振り返った。

と、彼女の瞳がおおきく見開かれた。

出口にはコロシアムの警備員がずらりとならび、立ちふさがっている。

ひとりがずい、と前にでると口を開いた。

「ここから出て行かせるわけにはいかない。勇作さまのご命令だ」  
警備員はそう言うのと腰の麻酔銃をかまえた。

太郎と美和子が身動きするまもなく、警備員は引き金をひいた。



銃口から麻醉弾がひゅつと音をたてて飛び、ふたりに命中した。ぱあん、と麻醉弾は身体にあたると四散し、白い粉が飛び散った。思わず吸い込んだふたりはたちまち意識をうしなった。

ばたりと倒れこんだふたりに警備員は近づいた。

「お兄ちゃん！」

茜に声をかけられ勝は立ち止まった。

「なんだ？ 言われたとおり、家に帰るといったらう？」

「違うつたら！ そんなことじゃないのよっ！」

妹の様子に勝は眉をひそめた。

茜はコロシアムのそばにぴたりを身をよせ、中を覗き込んでいる。そして必死に勝を手招きしていた。

「なんだってんだ？」

勝は茜のそばに近づいた。茜は首をねじむけ、コロシアムの中を見つめている。勝が近づくと、彼女は肩をつかんで自分の見ているものを指し示した。

「なんだ？」

勝は目をほそめた。

夕焼けの中、コロシアムのまんなかで太郎と美和子が倒れふしている。そのまわりに警備員がとりまき、担架を運んできた。そしてふたりを担架に乗せると、どこかへ運んでいった。

「あたし見たのよ。コロシアムのほうからなにか話し声が聞こえたんでぞいたら、あの勇作つてのがジャイロコプターに乗ってどこかへ言っちゃったと思ったら、警備員が麻醉銃でふたりを撃つたの」「なんだって？」

勝は驚いた。

「それじゃ最終決戦は？」

「そんなのなかったみたいよ」

「妙だな……」

ひとつつなずくと勝の顔にじわりと笑みがうかんだ。戦いの予兆

に晴れ晴れとした感じだった。

「面白え……おれはここに残るぜ」

茜を見やると彼女もうなずいた。

コロシウムを見るとふたりを運んだ担架は貴賓席の下にある出入り口へむかっていた。そのまわりを取り囲むようにして警備員たちがぞろぞろとついていく。最後のひとりが入り口に姿を消す前に勝と茜はコロシウムのなかへ足を踏み入れた。

コロシウムはしんと静まり返っていた。

あれほどいたカメラの砲列もいつのまにかなくなっている。

勝と茜は貴賓席の下ドアに近づいた。勝はドアに耳を当てた。

かつかつ……と、数人の足音が遠ざかっていく。

うん、とうなずき勝はドアのノブをためした。

鍵がかかっている。

けっ、と勝は肩をすくめぐつと全身にちからをこめた。学生服のうえから勝の筋肉がはつきり目にわかるほどに盛り上がった。

むむむむ、と勝は額に血管を浮き上がらせている。めりめりめり……いやな音をたて、ドアの枠が歪んでいく。ぼろぼろと壁の漆喰がはがれおち、ばきばきとドアの蝶番がねじきれていく。

ごっこん、とようやくドアが勝の攻撃に耐え切れず枠からはずれ落ちた。

外れたドアをそばに立てかけ、勝は中をのぞきこんだ。

「お兄ちゃん、あいかわらず馬鹿力ねえ。そのちからを、なにか有意義なことにつかえばいいのに」

勝の背中に茜が話しかけた。勝はむっとなってこたえた。

「なにが馬鹿力だよ。さあ、いくぞ。用心しろよ」

「わかってるって……」

ふたりは足音をしのばせ、内部に踏み込んだ。

「どういうことだ！ 説明してくれ！」

そのころむりやり棧橋につれてこられた記者たちは警備員たちに

かみついた。警備員たちは無表情に対応した。

「説明する義務はない。とにかく中継は終わりだ！　すぐ船に乗って、本土に帰ってもらいたい」

「取材テープを返してくれ。没収は納得できんぞ！」

そうだそうだと記者たちのあいだから声が上がった。コロシウムでのテレビカメラのテープはすべて警備員たちによって取り上げられたままだったのだ。

そのなかから警備隊長が鋭い目で記者たちを眺め渡した。

「はつきり言っておく。この番長島は緒方財閥の私有財産なのだ。したがって治外法権の権利を主張できる。この島でおきたすべての出来事を記録したものを公表するもしないも、すべてわれわれの自由だ。もし勝手にあなたがたが取材の結果を公表したならば、緒方財閥は全力をあげて法的手段にうつたえることをお忘れなく」

「そうか、そっちがそう出るならおれたちにも考えがあるぞ。報道の自由というのはあんたらが考えるような軽いものじゃないんだ！　おれたちはすべての能力をつかって、緒方勇作のことを嗅ぎまわってやる。それでいいんだな！」

隊長はうすく笑った。

「お好きなように。しかしあんたらが言う報道の自由なんて、そうたいしたもんじゃないよ。なにしろ緒方財閥はあんたらの報道機関のほとんどの有力株主だ。いわばあんたらの雇い主でもある。それでもあんたらが緒方さまのことをほじくりかえそうとするなら、身の破滅というものをその本来の意味で知ることになるだろうよ」

記者たちの顔色は蒼白になった。冗談ごとでなく、緒方勇作にはそれだけのことをやってのける財力がある。しかしそれでも記者たちの胸に闘志が燃え上がった。緒方勇作にはなにか隠さなければならぬ重要なことがあるのだ。

記者たちは押し黙り、警備隊員の誘導に従って棧橋に横付けされている客船へそろそろと移動した。やがて全員が乗り込むと、船は汽笛をならし、ゆっくりと島を離れた。

記者たちは船の舷側にあつまり、離れていく番長島をながめた。島は水平線に没しかけた夕日の最後の残照をうけ、燃えるようにそまっていた。しろい石灰岩の岸壁は夕焼けにそまり、真っ赤になっっている。

「おい。大京市に帰ったらどうするよ」

ひとりの年配の汽車が部下らしい若い記者に話しかけた。若い記者は年配の記者を見上げ、にやりと笑った。

「きまつてるでしょう。辞表を書いておきますよ。これからひどくあぶない橋をわたることになりそうだ」

年配の記者はうなずいた。かれもおなじ思いだったのだ。

島は見る見る遠ざかり、やがて水平線のかなたに消えていった。

「だいぶ下がったみたい……」

心細そうに茜が勝に話しかけた。

ふたりは太郎と美和子が運び込まれた貴賓席の地下につづく階段を降りていった。階段は幾重にもつづき、おそらく地下数階分はさがっているはずだった。しかし途中廊下やドアはなく、道筋はまっすぐだったので迷う心配はなさそうだった。

「黙ってるよ。あいつらまだ近くにいるんだぜ」

勝は声をひそめた。その通りで、かれの耳に警備員たちの足音がかつーん、かつーんと遠く響いているのが聞こえている。ふたりの足もとはやわらかなスニーカーなので注意深く歩けば足音を聞きつけられる心配はなかった。

と、遠くからがちゃんというドアを開け閉めする音が聞こえてきた。

勝は足をとめた。

茜は声をかけた。

「どうしたの？」

「もどつてくるみたいだ」

勝は身をひくくして耳をすませた。ばたばたと数人分の足音が近

づいてくる。

「どうするのよ！ 隠れるところなんてないわよ」

「なあに、かえって好都合だ」

勝は笑った。

「待ってろ」

そう言つと勝はだしぬけに走り出した。

とりのこされ、茜は立ちすくんだ。

勝の足音が遠ざかる。

と、数人分のあわてたような足音がばたばたと交錯した。

ぐふっ、わっ！ というような押し殺した声がして、どたりとなにかが地面にぶちあたる音がした。

そして静かになった。

茜は胸をときどきさせて待った。

いまにも目の前に麻酔銃をかかえた警備員があらわれるのではないかという恐怖がじわりと全身をつかむ。

「もういいぞ！」

勝の大声に茜はほつとなった。

あわてて駆け寄ると、階段が下り終えたところで短い通路になっていて、そこにさっきの警備員たちがのびていた。そのまんなかに勝が立っている。勝は倒れている警備員のひとりに近寄り、膝をついてなにかを捜していた。やがて目当てのものを見つけたのか、ひとりうなずくと立ち上がった。その手に鍵束がにぎられ、ちゃらちやらと触れ合つてかすかに音をたてた。

「太郎と美和子のふたりはここに運ばれた。どうやら牢屋みたいだな」

「牢屋ですって……。そんなものがどうしてあるのよ」

「まあ、ほんらいは倉庫かなんだろうが、ひとを閉じ込めるには絶好の場所だ。こんなところに部屋があるなんて、ふつう思わないものな」

「どこにいるの、ふたりは」

「こつちだ」

勝は茜をてまねきして通路のつきあたりのドアに近づいた。ドアは鋼鉄製で、両開きになっている。勝は鍵穴に鍵束の鍵をつきさした。何本かためして、ようやく合う鍵を見つけがちゃがちゃと音を立て鍵をはずす。

ぐっ、とちからをこめ、勝はドアを開いた。

勝の背後から茜はなかをのぞきこんだ。勝の言うとおり、内部にはいくつものコンテナや梱包された荷物が満載になっていた。やはりこの部屋は倉庫として使っていたのだろう。そのあいだに太郎と美和子が横たわっているのが見えた。

「美和子さん！」

茜は悲鳴のような声をあげ駆け寄った。ふたりは床の上にマットをしかれたうえに横たわって、目を閉じやすらかに眠っている。茜は美和子の肩をつかみ、ゆすった。がくがくと美和子の首がゆすられ、長い髪の毛が波打った。しかしぐっすりと眠ったままでいっこうに起きる気配はない。

「麻酔薬で眠らされているみたいだな。薬がきいているあいだは起きないだろう」

勝の言葉に茜は泣きそうな顔になった。

「そんなあ……、どうするのこれから」

勝はこまったような顔になった。

「さあてね……」

「もうお兄ちゃんつたら、頼りにならないんだから！」

「おいおい」

やりこめられ、勝は渋面をつくった。

「そこにいるのはだれだ」

だしぬけに声がして勝はきつとその方向をにらんだ。

「そういうおめえはだれだっ！」

わあん、と勝の大声に倉庫の中に反響がひびいた。

ぺたぺたという足音が近づいてくる。どうやらあいては裸足らし

い。

倉庫のなかを照らす電球のあかりにひとりの人物が姿を現した。茜はその人物を一目見て思わず身をのけぞらした。

まるで襤褸のかたまりだった。身につけている服は長年の酷使にたえかね、もとの色がわからなくなっている。髪の毛はぼうぼうにのび、顔の半分は髭でうまっている。ぷうん、とその人物からたえがたい悪臭がただよってきた。

勝は緊張をといた。どうもその相手からは敵意というものを感じない。

「わたしはこの倉庫に食料をさがしにきたんだ。あんたらはどうやら島でおこなわれているトーナメントの参加者らしいな。結果はどうなったね。ずっとラジオで実況を聞いていたんだが、とつぜん放送が中断してしまったが……。なにかあったのか？」  
ふたりはぼうぜんとなった。

「なるほど、そういうわけだったのか……」

男は倉庫の中をあさって食料をせしめ、そのあいだ勝と茜から説明を聞いてうなずいた。

「どうも緒方勇作はまずいことになっているようだな」

「なあ、あんた。いったいだれなんだ」

勝はじりじりして男に話しかけた。

「わたしかね。わたしはただの世捨て人さ。わけあってこの島のはずれで暮らしている。この倉庫にわたしの暮らしている洞窟がつながっているの、ちよいちよいここで食料をもらって生活しているのさ」

「なんでそんなことして捕まらない。あんたのやってることは、泥棒だぜ。この島には緒方勇作の雇った警備員がうようよいやがる。そんな生活をしていりゃ、すぐ捕まるだろうに」

ふっ、と男は笑った。

「勇作はなにも言わんよ。あいつはわたしがここで生活しているこ

とを黙認している」

「黙認しているだって？」

「そうさ。そうだな、こうなったらわたしもここで隠遁しているわけにはいかなかったみたいだ。とにかくみらを本土に帰す算段をつけないと」

「あんた、いったい何者だ」

勝の語気がするどくなった。だんだん腹が立ってきたのである。

「わたしの正体をあかすのは太郎が目覚ますまでまっててくれな  
いか。これには太郎もかわってくるのでね」

「なんだって……」

勝はぼうぜんとつぶやいた。ますますわけがわからなくなってくる。

男はぼりぼりと体中をかいた。痒いらしい。

「それじゃちよつと待っててもらおうか。ともかく話をするにはこの格好ではまずい。まあ心配するな。この子が目覚める前には戻ってくるから」

にやりと笑うと男はくるりと身を翻し、もと来た道に戻っていった。勝と茜は男の去っていった方向をのぞきこんだ。うずたかく積みあがった荷物のすきまに道ができている。そちらの方向は自然の岩石になっていて、洞窟とつながっているようだった。

勝と茜は男の帰りをまつた。

どのくらい時間がたったのだろうか。待つ身にはそれは数時間にも感じたが、実際は三十分もかからないくらいだろう。やがて洞窟のほうから足音が近づいた。こんどは裸足ではなく、革靴のたてる足音だった。

「だれだあんた？」

ふたたび電燈の明かりの下にあらわれた男を見て勝は叫んだ。

男の様子は一変していた。

ぼさぼさの髪の毛はきれいに櫛があてられ、後頭部でまとめられている。顔の髭はすっかり剃られ、男の素顔があらわになっていた。



なにより身につけているものがすっかり様変わりしていた。あの襪はぴしりとのりの利いたシャツと、しわひとつないタキシード、きつちりと折り目のついたズボンになっていた。風呂にもはいったらしく、さわやかな石鹸の香りがただよっていた。

男は肩をすくめた。

「いやなに、こんなこともあるうかと身につけるものはつねに用意しておいただけだ。最高の召し使いというのはつねに身の回りに気をつけていないとならないからね」

「召し使い？　というと、あんたは……」

そのとき横たわっていた太郎が身動きをした。

ぴくぴくと瞼がうごき、やがてぱちりと目を覚ました。

その気配に気づき、勝は太郎の顔を見た。

「どうやら目覚めたようだな」

男はしずかに宣言した。

太郎はまっすぐ男の顔を見上げている。

「あなたは……」

太郎は話しかけた。男はうなずいた。

「そうだ。わたしはお前の父だ。只野太郎の父親、只野五郎さ」

太郎と美和子、そして勝と茜は只野五郎のあとをついて洞窟の道を歩いていた。

道々、五郎は四人に物語った。

「わたしは以前、高倉男爵のもとに仕えていたころ、メイドのひとりとひそかに愛し合うようになっていた。そのころ小姓村の妻から子供がうまれたという便りがあって苦しんだが、結局はわたしはその女をとった。妻も子供いるというのに馬鹿なことをしたものだ。当時、女には一人息子がいたが、なにしろ物心つかない年頃だ。わたしを父とおもって育った。それが勇作だ」

その言葉に太郎と美和子は衝撃をつけたようだったが、なにも反応しなかった。が、茜は大声をあげた。

「ちよつと待つて！　そ、それじゃ緒方勇作というのは？」

五郎はうなずいた。

「緒方というのはメイドの苗字だ。わたしはその名前をつかうことにした。高倉家のときとおなじように、わたしは彼女のために働き、さまざまな手段をつかつて財産をふやした。やがて緒方家は有数の財閥に育っていった。しかしわたしが馬車馬のように働いているとき、勇作の母親はひそかに病にかかっていった。わたしはそれに気づかなかつた。彼女は病死し、わたしはすべてに絶望して世捨て人の生活にはいった。そのころ勇作はわたしの事業のやりかたをまなび、すべてを引き継いだ。やつはわたしが世間にあらわとなることを嫌つた。それでこの島に暮らすようにさそつた。わたしはどこで暮らしても変わりなかつたから、そのさそいに応じ、ここで暮らした。それでも世間とのつながりは断ち切れなかつたんだなあ。ラジオを手に入れ、この島で開催されるトーナメントのことはずっと聞いていたよ。しかしまさか太郎が美和子嬢と一緒にこの島にやってくることまでは予想しなかつたがね」

茜は首をふつた。

「それじゃ勇作が美和子さんの許婚というのは？」

五郎は否定した。

「わたしはそれについてなにも知らない。おそらく木戸がなにか男爵にふきこんだのだろう。しかしどうして勇作は美和子さんとの結婚にこだわるんだろうな。もしかしたら……」

「もしかしたら、なによ？」

「いや……。憶測だけだ。しかし許婚うんぬんはまるつきりでたormeだよ」

美和子はなにも言わなかつた。いったいその胸に去来しているのはなんだつたろうか？

やがて一行は五郎の住んでいた洞窟にたどりついた。洞窟の出口には夜空が広がり、星が瞬いている。ざあああ……、という波の音が聞こえてくる。

「本土とこの島をつなぐ客船は夕方出港したばかりだ。明日になればつぎの便がくるが、警備員が見張っているから密航するのはむずかしいだろうな。しかし太郎と美和子さんはなんとしても本土に帰って、勇作と対決する必要がある。こっちにきたまえ」

五郎は四人を案内して岩場につれていった。

岩場には階段がきざまれ岸壁につづいていた。ほそいその階段を全員たどりながら岸壁のうえへ移動していく。夜空には満月がかかり、じゅうぶんに明るかった。

「ここは……」

太郎はぼうぜんとつぶやいた。

そこには思いもかけないものがあつた。

飛行機だつた。

岸壁の頂上は飛行場になっていて、一台の飛行機が翼をやすめていた。

「これが役に立つ日がくるとは思わなかったが、用意しておいてよかったよ」

「どうしてこんなものが？」

勝の問いに五郎は説明した。

「もともと勇作がこの島で映画をとる計画があつてね、そのとき飛行場を整備して飛行機を運んだのだが、その計画が変わつてあのトナメントになったから必要なくなった。それで勇作はすっかりこのことを忘れてしまった。だがわたしはひそかにここに通じる道をつくり、ときどき飛行機を整備をつづけていたんだ。これをつかって本土へわたろう」

「おれはいやだ！」

勝は悲鳴をあげた。見ると顔色がすっかり変わっている。月の光だけでなく、その表情には恐怖がうかび蒼白になっていた。

「お兄ちゃん……」

茜はあきれた。

「怖いのか？」

勝はぶるっ、と顔をふった。

「ち、違う！　だいたいこんな飛行機に乗って無事でいられるわけがないだろう？　その五郎さんはいったいなんだい？　執事だろう？」

「そうとも、わたしは執事だ。だが執事だって車は運転するし、資格があれば飛行機だって操縦するよ。わたしは飛行資格をもっている。それにいつも整備はかかしたことがない」

五郎は胸をはった。

茜は勝の前にすすみでた。

「お兄ちゃん、この飛行機に乗らないと帰れないのよ！」

勝の顔にだらだらと冷や汗がつかぶ。いやいやをするようにちいさく首をふった。

「だ、だめだ。おれ、乗りたくねえ！」

すっかり硬直している勝の背後に太郎が音もなくしのびよった。

すっ、と片腕をのばし、勝の後頭部と肩のあたりに指をつきさした。びくん、と勝がとびあがり、そのままどたりと地面にくずれおちた。

「ちょっと意識をなくしてもらいました。さあ、勝くんをこれに乗せましょう」

茜はあつけにとられていた。

太郎と五郎は勝の巨体をつぎあげ、飛行機の座席におしこんだ。座席の安全ベルトをかけると、五郎は操縦席に移動した。美和子、茜のふたりも飛行機に乗り込む。

「さあ、出発だ」

五郎は手早く計器を点検し、いくつかのスイッチをいれた。

ぶるぶるぶる……、と飛行機のエンジンがかかってプロペラがまわりだす。ぐおーん……、と飛行機がゆっくりと飛行場を動き出す。とにわかに茜の胸に恐怖がこみあげた。

となりですわった太郎に話しかける。

「ね、ほんとうに大丈夫なの？」

さあ、と太郎は首をふった。

「そうだといいんですが。ぼくも飛行機に乗るのははじめてなので、茜はまっさおになった。」

飛行機はがたとゆれた。飛行場といっても地面をたいらにならしただけで、舗装もされていないむきだしの地面である。あちこちでこぼがあり、草もはえている。茜は目を閉じ、座席にしがみついた。

それが最高潮にたつしたとき、ふいにゆれがとまった。

彼女は目をあけ、窓に顔をおしつけた。

月の光に照らされ海面がしたに見えている。

飛んでいるのだ。

いま、飛行機は飛び立ったのである。

安堵に茜はほーっ、とため息をついた。

と、ひゅーっ、というような息をすいこむ気配に背後をふりかえると、勝が意識をとりもどしたところだった。

「ここは……」

勝はつぶやき、窓のそとをむき、目をまるくした。ぐっ、と無意識に座席の肘掛をつかむ。見る見る顔色が蒼白になり、ぐっと歯をかみ締めた。

「い、いやだあ！ おろしてくれ！」

じたばたとわめく。立ち上がるうとするがベルトがかけられて身動きがとれない。どうやらじぶんの身体にベルトがかけられていることにも気づいていないようだ。

「しばらくの辛抱だ。夜明け前には大京市につくよ」

操縦席から五郎が声をかけてきた。

7

「くそ、どういうことだ。まるで見当違いだ！」

椅子の肘掛をばしりとたたき、緒方勇作ははきすてた。

緒方財閥の本拠である屋敷の最上階にあるオフィスである。窓の外には大京市の全容がひろがっている。夜明けの最初のひかりが窓から差込み、しろうく部屋の中を照らしていた。部屋はどちらかというとな簡素なつくりで、実用一点張りの事務机とインタホンの通話装置。それにさまざまなファイルがおさまる書棚くらいで装飾のたぐいはほとんどなかった。

屋敷はまるで城のようだった。どっしりとした石組みの建物の四隅に尖塔がつきだし、切妻屋根には出窓がならんでいる。敷地はひろびろとして、森がひろがってちよつとした公園ほどの規模がある。もともとは公爵の屋敷だったのを、その持ち主が没落して緒方勇作が買い取り、さまざまな改築をくわえ、いまにいたっている。勇作のオフィスもまたその一室をリフォームして使っているが、さすがに暖炉などは撤去するわけにはいかず、実用的なつくりのなかでそれだけが異彩をはなっていた。

勇作は椅子から立ち上がり、部屋のなかを歩き回った。

と、ドアが開き木戸が姿を現した。

「あのう……、正門に記者たちがきていますが」

「なにい！」

勇作は木戸をにらんだ。木戸は首をすくめた。

「勇作さまのお話をうかがいたいと言っています」

けっ、とさけぶと勇作は窓に身をよせた。眉をひそめ、正門のほうをにらむ。

広大な前庭のむこうに正門が見えているが、朝霧にけむつてよく見えない。勇作は身を翻すとデスクの表面にならんでいるボタンのひとつをえらび指をおしつけた。

勇作の操作におうじ、部屋の天井の一部がひらき、なかからテレビモニターがするすると降りてきた。つぎに勇作がボタンを押すとモニターがあかるくなり、そこに正門にしかけられているカメラからの映像がおくられてくる。正門には十数人の男女がたむろしていた。記者たちはレコーダーやカメラを用意して屋敷を仰ぎ見ていた。

「おいはらえ。あいつらにさく時間はない」

はあ、と木戸はうなずいたが賛成できかねるといように立ち止まっていた。

勇作はぐいと顎をあげると木戸に質問した。

「どうした？ なにか意見があるなら言え！」

意を決したように木戸は口を開いた。

「はあ、やはり記者会見はすべきだと思いますが。このままではあることないこと書き立てられますよ。それは損だと思いますが」

みるみる勇作の顔がけわしくなった。

「損だと？ お前にそんなこといわれるすじあいはない！ いいから追い払え！」

まだ木戸は動かなかった。

「なんだ？ まだなにか言いたいことがあるのか？」

「ええ。島から只野太郎と高倉美和子が逃げ出しました」

勇作の目がまるくなった。

「どういうことだ？ あいつらは警備員たちに拘束させておいたはずだぞ。なんでそんなことができる？」

「報告によれば勝田勝と茜という兄妹が逃亡を手助けしたということです」

「あいつらがどうしてそんなことできる？ 船はどうした？ 密航を見逃したのか？」

「いいえ。船に乗り込んではいません」

「それじゃどうして脱出できた？ あの島から出る手段は船しかないはずだ」

「それが信じがたい話ですが、島から一台の飛行機が出発したという報告があります。どうやらかれらはその飛行機に乗っていたようです」

「飛行機だつて……」

勇作はぼそりとつぶやいた。あまりに信じがたい話にがっくりと肩がおちていた。

「そんなことがあるわけない……」

ぼんやりと窓の外を見る。

と、かれの目があるものをとらえた。

朝日がのぼる空のむこうになにかが動いている。

それは見る見るおおきくなり、ある形をとりはじめた。

背後に太陽の光をうけ、銀色の翼がきらめいている。

ぐおおん という轟音が窓ガラスを振動させていた。勇作は

おもわずガラス戸を押し開き、身を乗り出した。

飛行機だ。

一台の飛行機が勇作の屋敷めざし、まっしぐらに近づいてくる。

ぼうぜんと勇作は近づいてくる飛行機を見つめていた。

飛行機は屋敷にぎりぎりに近づき、急角度で上昇した。

ばたばたと飛行機が巻き起こした風で窓のカーテンがひるがえり、デスクのうえの書類がまきちらされた。飛行機はいったん上昇して上空で円を描いた。

と、飛行機のエンジンの音が変わった。

ぷるん、ぱすん、というような頼りない音になり、プロペラの回転がとまった。

そのまますーっ、と高度を落としおおきく旋回して屋敷の敷地に近づいていく。

飛行機は屋敷の敷地にひろがる森につっこんだ。

ばきばきと枝が折れる音がして、ぎゃあぎゃああとさわがしい声をたて数十羽のガラスが驚き騒いで飛び上がった。

「なんなんだ、あれは？」

勇作はつぶやいた。木戸のほうをふりむき、命令した。

「すぐだれかやれ！ いや……こういつときのためにあいつらがいる……。そうだ、武装召し使いをだすんだ」

はっ、と木戸は上体をおりまげ、部屋から出て行った。

「まったく、どうなってるの！」



「すまん。燃料切れだ」

茜はぷりぷりして五郎を問い詰めた。五郎は操縦席から這い出すと、客室のドアを開けようと格闘していた。

窓の外には樹木が密生していた。飛行機は森の真上に墜落したのである。が、樹木が飛行機の衝撃をうけとめ、全員怪我はなかった。がちやりとロックがはずれ、ドアが開いた。

「わー！」

五郎はあわててドアの枠にしがみついた。見ると地面がはるか下に見えている。飛行機は森の樹冠ちかくにとまっているのだ。

うつ、といううめき声が聞こえた。

勝が目をさましたのだ。

あれから勝はふたたび機内で気絶していた。そのほうがほかのみんなにとって救いだった。なにしろ飛行中、ひどく騒いでいたのである。

「なんだ、どうなってる？」

勝はぼんやりとつぶやいた。

ドアにしがみついている五郎を見る。

勝の顔に血がのぼった。

「あんた、おれを無理やりこんなものに乗せやがって……」

「お兄ちゃん、そんなこと言ってるひまないって！」

勝は茜をふりかえった。

「なんだと？」

「窓の外を見てよ！」

いわれて窓に顔をおしつける。わー！ と口が開いた。

「な、なんだ！ どうなってるんだ！」

「ここは緒方勇作の屋敷の庭だよ」

勝のとなりにもすわる太郎がつぶやいた。勝はぐっ、と太郎をにらんだ。

「なんだと……。ここがそうか」

と、かれの視線が屋敷の建物にとまった。

「なんでえ、ずいぶんごてごてしてやがら」

勝の言うとおりだった。勇作が改築した屋敷は悪趣味といえるほど装飾過多で、無数の尖塔と出窓、それに外壁をかざるさまざまな彫刻が複雑な形状を見せている。さらに屋敷まわりには増築をかさねた無数の建物が様式の統一もなく、まるで蛸が手足をひろげたようにとりまいていた。それらの建物はいくつもの廊下がつなぎ、迷路のようになっていた。

「ありや、あいつらなんだ？」

勝の言葉に太郎と茜が窓のそとをのぞきこんだ。屋敷の方向から数人の人影がわらわらと集まってくる。

「緒方家の武装召し使いたちだ。気をつけろ、やつら軍隊なみの装備をもってるぞ」

ドアからしたを見ていた五郎がさげんだ。

飛行機がひっかかっている樹木の根元に集合しているのはプロテクターとヘルメットで身を固めている武装召し使いたちだった。身につけているプロテクターはタキシードに似せてデザインされている。ヘルメットも山高帽のようなデザインである。武装召し使いたちは樹上を見上げ、ひとりが銃をかまえた。ばすっ、という音とともにフックのついたロープが打ち上げられた。フックは枝にからまりロープがぴんと張った。ロープには足がかりがあり、縄梯子となっている。召し使いたちは縄梯子をつかみ、つぎつぎと登りはじめた。よく訓練されているらしく、その動きにはむだがない。

「どうする、おい？」

「出迎えがきたんだ。挨拶するしかないだろう」

五郎はにやりと笑うとひよい、と足を宙にふみだした。あっ、と一同は目を丸くした。五郎は空中にスワン・ダイブをして頭から落下した。と思うと、かれは枝のひとつを両手でつかみくると回転してつぎの枝へ飛んだ。

「すげえ……」

勝はつぶやいた。

「それじゃ僕も行かなければ」

太郎はつぶやくとドアへ近寄った。

「おい！ 待てよ！」

勝はあわててさけぶが、太郎はさつと空中へ飛び出し、枝をつかんだ。そのまますると幹にとりつき、おりていく。

「ちくしょう、あいつら格好付けやがって」

勝はくやしそうにつぶやいた。いつのまにか高所恐怖もわすれているようだ。

そのときぎぎぎ……という異音がひびいた。勝はきよときよとあたりを見回し叫んだ。

「なんだ、いまの音？」

「枝がおれる音よ」

茜がこたえた。

その通りだった。飛行機をうけとめていた枝がついにへし折れつつあるのだ。がたり、と飛行機がかたむく。

美和子がするどくさげんだ。

「はやく！ 外へ出ないとあたしたち……！」

茜と勝はうなづきドアにとりついた。目の前につきだしている枝へ飛び移る。三人が飛行機から脱出したところでついに枝がばきばきという音をたて折れた。飛行機は枝と葉をまきちらし、派手な音をたてて落下していった。がっしょん、と音がして地上に飛行機は上下さかさまになって落ちていった。

「あぶなかった……」

茜がほつとため息をついた。

「安心してはだめよ。敵はまだいるんだから」

美和子の言葉に茜は下をみた。その通りで、ふとい幹をのぼる数人の武装召し使いたちがつぎつぎとせまってくる。

「お前たち、家宅侵入で訴えてやる。おとなしく命令にしたがえ！」  
召し使いのひとりが銃をかまえた。番長島で警備員がつかっていた麻酔銃である。命をつばうことはないが、こんなところで意識を

うしなったら落下して死亡する可能性はある。銃口をむけられ勝た  
ちはその場でかたまってしまった。

と、ざざざざ！ というような葉ずれの音がして、銃をかまえた  
男はさつと上を見上げた。が、間に合わなかった。枝のなかからあ  
らわれたのは只野五郎だった。かれは男の背後に落下すると、ぐつ  
とその首に腕をまわした。

それを見ていたもうひとりが銃をふりまわしたが今度は太郎が枝  
をかきわけ飛び出した。太郎は枝に降り立つと男がもつ銃を蹴り上  
げた。がちゃんと銃は宙に飛び、男はうなり声をあげて太郎に襲い  
かかった。太郎はすい、と身をかわずと背負い投げをかけた。男は  
わあ、とさけんで空中に投げ出された。どさり、という音がしたか  
ら聞こえてきた。太郎はしまった、というように地上を見つめた。

投げ飛ばされた召し使いは苦痛に身をそらしていたが、生きてはい  
た。たぶん身をかためていたプロテクターがまもっていたのだろう。  
太郎はほつ、と息をはいた。殺人者にはなりたくない。

いっぽう、五郎もまた最初に声をかけてきた男をかたづけていた。  
ぐつ、と首に回した腕にちからをこめ、召し使いは意識をうしなっ  
て崩れ落ちた。落下しようとするその身体をささえ、五郎は銃を奪  
った。

「さがれ！」

その銃でしたから登ってくる召し使いたちにねらいをつける。召  
し使いたちは上からねられわれ動きが止まった。その両手は縄梯子を  
握っているでふさがっている。五郎は銃をぴたりとかまえたまま  
だ。召し使いたちはしぶしぶ縄梯子を降りていった。

太郎たちは五郎にまもられ縄梯子をつたって地上へ降りた。そば  
に地面にたたきつけられた飛行機の残骸があった。

武装召し使いたちは五郎の麻酔銃のまえにたちすくんでいた。五  
郎は引き金をひいた。ばすつ、ばすつという音が連続してしろい麻  
酔薬がかれの身にふりかかった。召し使いたちはつぎつぎと膝を  
おって倒れていく。

「こんなところで手間取るわけにはいかなからね、悪いがこれらには眠ってもらう。さあ、屋敷に乗り込もう」

太郎と美和子はうなずいた。命をとるわけではないということがかるうじてかれらの行動を正当付けていた。五郎はその場に銃をほおりだすと走り出した。

勝はばしつ、と手のひらをうちあわせた。すっかり元気になっている。地面に立っていることと、これから行動する目当てがあるということがそうさせている。

「おもしれえ！ おれもいつしよにいくぜ」

太郎はうなずいた。味方はおおいほどいい。

「やくたたずめ……！」

窓から身を乗り出していた勇作は齒を食いしばった。木戸にふりむき命令する。

「木戸！ おまえ相手をしろ」

木戸はうなずき身を翻して部屋から出て行った。

ひとりになった勇作はするどい視線で床にちらばった書類をながめた。膝をつき、その書類の束をかきあつめる。くしゃくしゃにしたそれを両手一杯にかかえると、暖炉を見た。書類をそのなかにしこみ、デスクのうえのライターで火をつけた。めらめらとオレンジ色のほのおが書類をなめ、たちまち燃え上がった。

そこへ洋子が朝食の盆をささげ入ってきた。

「あの……、お食事は？」

勇作はするどい目つきで洋子をにらんだ。洋子はその視線の恐ろしさに立ちすくんだ。

「いらん！ どっかへうつちゃっておけ！」

「は……はい……」

洋子の目は暖炉のなかで燃えている書類のたばにさまよった。勇作は声をはりあげた。

「あっちへいってろ！ しばらくおれが呼ぶまでどっかにいってて

くれ！」

洋子の顔が一瞬、怒りにそまつたがすぐ平静を装いつなずいた。

「わかりました……」

一礼して退出する。

暖炉では書類の束が燃え上がり、ちりちりと黒い灰になっていった。それを確認した勇作はほっとため息をつき、額の汗をぬぐった。

「これでいい」

ひとりうなずきどっかりとデスクの椅子に腰掛け、両手を組み合わせた。

そして待った。

玄関のドアが開き、そこからあらわれた人物を見て太郎は立ち止まった。

「木戸さん……」

木戸は太郎を見るとものもいわずにおそいかかった。

びゅっ、と音を立てかれの拳が空を切る。

太郎ははっ、と飛び下がった。眉がけわしくなった。一瞬で木戸の実力を悟ったのだ。木戸はにやりと笑いかけた。

「おまえは小姓村の執事学校で格闘術をならったそうだな。おれも執事のたしなみとして少々こころえている。さあこい！」

「おまえのあいてはおれだ！」

木戸はあらたな声にぎよっとなった。

見ると五郎が木戸にむかい、かまえていた。

五郎は太郎たちにさげんだ。

「おまえたち、こんなところで手間取っていないでさっさとさきにいけ！　ここはおれにまかせておけ」

ふうん、と木戸はあごをあげた。

「なるほど、まあいい。おれはお前らのだれでもいいんだ。さあ、やるぜ！」

木戸はその長身を躍らせた。長い手足が旋回して五郎へ襲いかか

る。五郎は手をあげ、その攻撃をうけとめた。ばしつ、というすごい音がしてふたりはがっしりと組み合った。五郎は太郎を見て「行け」というように顎をしゃくった。太郎はうなずいた。

太郎たちが屋敷の中に姿を消すと五郎はぐつとちからをこめ木戸の身体をはねとばした。木戸はさつと離れると身体をゆらゆらとゆらして五郎を待ち受けた。五郎は木戸の動きに眉をひそめた。

「酔拳か？」

五郎がたずねた。木戸はにやりと笑ってうなずいた。

ぐらり、と木戸の上半体がゆれた。とつ、と足もとがふらつき五郎のほうへたおれかかる。と見せかけ、両手を地面につくととん、とそのまま一回転して両足をそろえつきかかる。五郎は両手をあげそれをうけとめた。が、木戸の攻撃はそれでおわったわけではなかった。地面についた腕を左右にひろげ、五郎の足元をすくった。

わ！ と、五郎は倒れかかった。あやうくとんぼをきり、一回転して着地する。木戸の動きはまったく予想がつかなかった。

けけけけ……、と木戸は奇妙な笑い声をあげ五郎に襲いかかった。ふらふらとその足取りはさだまらず、手足はとんでもない角度でまがった。が、その動きはすべて五郎にむかっており、一撃必殺の威力を持っていた。もし木戸の動きにまどわされ、油断すればひどい打撃をこうむるだろう。

酔っ払い拳法とはよく言った。

五郎は思い切って木戸のふところへ飛び込んだ。

たちまちふたりの間で手と手、足と足がいそがしく交錯した。おたがい必殺の打撃をあたえようとぎりぎりの攻防をしている。一瞬間の間にふたりの全身に打ち身やあざがうきで、額から滝のような汗がふきだした。

実力は伯仲していたが、手足が長い分どうやら木戸のほうに有利だった。それにかれの奇妙な動きは、五郎の目をまどわせた。ついに木戸の拳が五郎をとらえた。

ど！ と、五郎は宙を飛び、地面に横たわった。急所をやられた

のだろうか、全身が麻痺している。

木戸は勝利を確信した。

とどめをさすため、のしのと大腿に倒れている五郎に近づいていく。地面で五郎はなんとかおきあがろうともがいていた。その背後に膝まづくと、木戸は五郎の首を腕にまきつけもう一方の腕でかえこんだ。そのままねじきり、頸骨を折ろうという算段だ。

ぐぎぎぎぎ……！　おそろしいほどのちからに五郎の全身の関節が悲鳴をあげた。

遠ざかる意識のなか五郎は数人の足音を耳にした。  
ばすつ、という噴射音。

と、かれの鼻に奇妙な刺激臭がした。たちまち五郎は意識をうしなった。

「だいじょうぶですか？」

声をかけられ、五郎は意識をとりもどした。

まだ生きている。それが信じられなかった。かたわらに木戸がその長い身体を横たえ、倒れている。木戸はやすらかな寝息をたてていた。五郎の顔をのぞきこんでいるのは若い女だ。太郎とおなじくらしい年頃だろうか。まるい輪郭の顔立ちに、血色のよいほが健康的なピンクにかがやいている。身につけているのは緒方家のメイド服である。

「きみは……」

「あたし山田洋子といいます。太郎とは小姓村でおさなじみでした。失礼とは思ったんですが、これをつかって木戸さんを……」

そう言うとき彼女は武装召し使いがつかっていた麻酔銃をかけた。「かれだけを狙ったんですけど、すこしあなたにかかってしまったみたいです。ごめんなさい。でもわずかしき吸い込んでいないから、すぐ目が覚めてよかったですわ」

五郎は身をおこした。まだすこしくくらするが、二度、三度と息をおおきく吸い込むとたちまち頭がはつきりしてきた。



「ありがとう、たすかったよ。しかしこんなことして勇作に怒られるんじゃないのか？」

それを聞いた洋子は怒りに顔を赤くさせた。

「あんなやつ！ もうご主人さまだなんて思いません！ 太郎をあの目にあわせるなんて、ひどすぎるわ！」

五郎の顔がほころんだ。

「ありがとう。太郎に代わって礼を言うよ」

「あの、あなたはどなたです？」

「わたしは只野五郎。太郎の父親だ」

洋子の目が驚きに見開かれた。

「えっ！ じゃあ島の洞窟で暮らしていたという……」

「そうだ。思い切って隠遁生活をやめて太郎を手助けすることにしたんだ。しかしどうしてそんなときみが知っているんだ？」

洋子は肩をすくめた。

「だって、勇作のメイドになったといってもまるで仕事がないんですもの。一日中ひまで、それでしょうがなくて書類の整理とかしていて、そのとき過去の帳簿を見ていたら決裁の名前が緒方五郎となつているのが不思議で、いったいだれのことだろうと調べたんです。それが太郎さんのお父さんのことだと知ってびっくりしましたわ」

五郎は苦笑いをした。

「まったくつけはいつもまわってくるもんだ。さて、こうなったら太郎をたすけて勇作と対決しなければならぬ……。ん？ あれは！」

かれの視線は屋敷の最上階の屋根の煙突からたちのぼる煙にすいよせられた。

「あれは勇作が暖炉で書類をもやした煙です。なにか大量の書類を燃やしていました」

五郎は立ち上がった。

「くそ！ 証拠隠滅だ！ 勇作のやつ……」

洋子はきりつと五郎を見上げた。

「大丈夫よ！ 証拠はあの書類だけではないわ！」

「どういうことだ？」

「あの屋敷の中に、勇作が高倉男爵の財産を不正に横領した証拠があるのよ。べつのかたちでね」

五郎は洋子の肩をつかんだ。

「それを教えてくれ！ こんなことは許しちやいかん  
彼女はうなずいた。

「行きましよう。勇作が気づく前に」

うん、とふたりはうなずきあい、屋敷へ向かって走り出した。

8

「広いぜ。広すぎらあ！」

勝は茜とともに屋敷のうちをさまよいつぶやいた。

まったく屋敷は広大だった。

屋敷にはいつてすぐ、その規模のあまりのおおきさに、手分けして勇作の行方をさがそうということになり、勝は太郎と美和子とわかれたのだ。が、その決断を後悔していた。行けども行けども部屋は続き、部屋と部屋をつなぐ廊下は果てしなかった。

屋敷は行き当たりばつたりに増築、改築を繰り返した結果、廊下は奇妙な角度におれまがり、妙なところに階段があったり、行き止まりがあったりして、たちまちふたりは迷ってしまった。

「ねえ、お兄ちゃん。さつき通ったところじゃない？」

勝の背後から茜がうんざりした声をあげた。勝はうなった。たしかにいま通っている部屋は前に見たような気がする。

「なんでひと気がねえんだ？ さつきの武装召し使い以外、だれとも出会ってねえ」

「いいじゃない。喧嘩しなくてすむもの」

「そうはいかねえよ。だれかいたら、ひっつかまえて勇作のいそうなどころを吐かせてやるつもりだからな！」

屋敷のなかをさまよう勝の目があるものとまった。

「見る、エレベーターだぜ」

「ほんと……」

ふたりはエレベーターのドアに近づいた。

「さすがこれだけのかい屋敷ともなると、エレベーターでも使わないとやってられねえんだなあ……」

勝はすなおに感心している。茜はかれの袖をひっぱった。

「ねえ、もしかしたら勇作のやつ最上階にいるんじゃない？ だつたらこのエレベーターをつかえば……」

「そうか、近道だな！」

エレベーターのボタンをおすとすぐ扉が開いた。操作するハンドルをつかむと、勝はそれをいっぱいにまわし、最上階へあわせた。がくん、と箱はうごきだし、目盛りの針が上昇する階数を表示している。

あつというまに最上階にたっし、ふたりはエレベーターからおりた。おりたすぐが短い通路になっていて、そのさきが階段になっていて朝の光がさしこんでいた。ふたりはその階段をのぼっていった。「わ！」

勝はたたらをふんだ。

ひゅう……、と一陣の風がかれの頭髮をさかだてさせた。

屋上だった。最上階は屋上になっていたのだ。

「しまった、引き返すぞ！」

つぶやくと階段をおり、通路を走ってエレベーターのドアの開閉ボタンを押す。

が、ドアは開かなかった。

「動かねえ……。ほかに階段はないのか？」

すばやくあたりを見回すが、したに通じる階段はなかった。

「畜生……、しめだされちまった」

「僕に会いたいのか？」

だしぬけに勇作の声が聞こえ、勝は飛び上がった。

「ど、どこだ！」

「お兄ちゃん、あそこ！」

茜が指差す方向を見ると、天井からちいさなテレビモニターがさがつていて、そこには勇作が映し出されていた。モニターの上にはテレビカメラがあり、ふたりをとらえていた。モニターの画面から勇作が笑いかけた。

「わざわざようこそ。きみの活躍は楽しませてもらっているよ」

「野郎……出てきておれと戦いやがれ！」

「そうしてもいいよ。きみが僕のところへくる気があるなら」

「なんだとう……えらそうに！」

「僕のオフィスは妹さんの推測どおり、最上階の棟にある。きみが乗ったのは別棟のエレベーターだ。屋上から僕のオフィスに通じる通路があるから、そこを通ってくるがいい」

「ちよつとまで、なんで茜の喋ったことをお前が知っているんだ？」

「この屋敷のすべての部屋、すべての通路にカメラとマイクがしかけてあるんだ。番町島であつたのとおなじシステムでね。きみらが飛行機で墜落してからずっと観察させてもらっているよ」

「のぞき屋め！ まってる！ たたきのめしてやる！」

勝が吼えると勇作はうなずいた。

「待ってるよ。屋上の通路だよ」

モニターが暗くなつた。

勝はぱしりと手を打ち合わせた。

「やつとやつと戦える。去年の借りを返してやる！」

闘志を満面にみなぎらせ、勝は屋上へ駆け上つた。

通路をさがす。

あつた。

その通路を見た勝の顔が蒼白になつた。

通路は空中をわたされた一本の橋だつた。

が、その橋には手すりがなかった。わずか数十センチの幅の板がべつの棟につながっていただけだつた。

「う、う、う、う！」

勝はたじたとじとなっていた。

恐怖に足がすくんだ。もしこれが地上にあつて、ただの地面にひかれた線だったらだれでも楽々と歩けるだろう。しかし空中にあるのだ。ましてや勝は強度の高所恐怖症である。そばに近寄るだけでも背筋に冷たいものがはしる。

勝は通路のさきをにらんだ。

青空に切妻屋根がうかんでいる。通路のさきにドアがあり、おそらくそれは勇作のオフィスにつながっているのだろう。ふつつつと勝の額に冷や汗が浮かぶ。

ぐっ、とつばを飲み込み、一步をふみだす。

「お兄ちゃん……」

茜が背後で息を呑んだ。

「お前はそこで待っている……」

勝はそろりと歩き出した。

いっぽう、太郎と美和子も屋敷のなかをさまよっていた。

ふたりもまた勝とおなじようにこの屋敷の広大さを身をもって思い知っていた。さまよったあぐく踏み込んだのは屋内にしつらえられた中庭だった。

数階分のふきぬけ天井はガラス張りで、どういう仕組みをつかっているのか外光がガラス越しに中庭をあかるく照らしていた。中庭にはさまざまな観葉植物が植えられ、ああおおとした芝生には色とりどりの花々が咲き誇っている。

「いったい勇作さんはどこにいるのかしら……」

美和子のため息をついた。屋敷の広大さにあきれはてている。

太郎はだまってなにかに耳をすませていた。

「太郎さん、どうしたの？」

「足音がします」

「え？」

美和子はぎくりとなった。あらたな敵か？

太郎はじつと動きをとめ、待ち受けた。

「お父さんと洋子のふたりです。あの足音には聞き覚えがあります」  
「聞き覚えて……」

「リズムでわかります。ひとの足音には固有のリズムがありますから。それを覚えておけば、個人をあるていど特定できます」

「あなたって……」

「執事学校で訓練をうけました」

美和子はあきれた。執事の訓練でそんな忍者じみたことを教えるとは驚きだった。

「洋子さんって、だれのこと？」

ああ、と太郎は笑った。

「すっかりしていました。山田洋子といいまして、ぼくの小姓村でのおさなじみです」

「そうなの……」

ふたりが話しているうち足音が近づいてきた。

太郎の言うとおり、只野五郎と洋子のふたりが肩をならべてやってくる。

「やあ、こんなところにいたのか。捜したぞ」

五郎が声をかけてきた。

「木戸を倒したんですね。お父さん」

太郎に言われ、五郎は苦笑いをうかべて首をふった。

「いいや、この洋子さんにたすけられた。彼女は勇作の不法行為の証拠をつかんでいるというんだ。それを手に入れるため、一緒に来てもらっている」

太郎は洋子を見つめた。洋子は肩をすくめた。

「あたしも決心したの。やっぱりあたしには召し使いはむかないみたい」

そう言うのにやりと笑った。

「かたをつけたら小姓村に帰るわ！」

五郎は太郎をふりかえった。

「それでわたしと洋子さんは証拠を手に入れにいく。太郎と美和子さんは勇作と会う必要がある。洋子さんが勇作の居所を知っている  
そうだ」

太郎は洋子をむいた。

「教えてくれ。こんなひろい屋敷、だれかの案内がなければまよって  
しまうよ」

うん、とうなずいた洋子は両手をあげすばやい動きをした。それは奇妙な動きで、腕や指先をさまざまな角度で動かし、ひらめかせる。その動きを目で追った太郎はうなずいた。

「なるほど、わかったよ」

「なにがわかったの？」

「勇作の居場所です。そこへたつするための道筋を教えてください  
です」

「たったあれだけで？」

「執事特有のボディ・ランゲージの一種です。道筋を覚えることは執事の技能の重要な部分ですから、いちいち言葉で教えあっている時間は時間がかかるのであいつた動きでシンボルにして短縮している  
んです」

「そうなの」

美和子はうなずいた。もう、いちいち驚いてばかりはいられなかった。  
った。

「よし、それじゃここでお別れだ。気をつけるよ」

太郎はうなずき、美和子をうながし歩き出した。五郎と洋子もすばやく別の道を取り立ち去った。

「わ！」

ひゅっ、と勝は息をはきだした。

突風がふき、あやうく足をとられるところだった。

橋をわたるだけなのに、半分までたつするだけでかなりてまどっ

ている。一步、一步が恐怖の連続だった。見まい、見まいと思っているのについ視線が足もとに落ちる。そのたびに目もくらむ高さに勝の足はすくんだ。

勝は天をあおいだ。

「まずい……」

つぶやいた。

さっきまでのぬけるような青空はいつのまにかどんよりと曇ってきている。

空気にじつとりと湿り気がまじっている。

勝の肘がしくしくと痛んだ。数年前の喧嘩の古傷で、雨がちかいつつ痛む。

なまあたたかい風が勝の髪の毛をなぶっている。

ぽつり、と額に最初の雨粒がふれた。

ぽつ、ぽつ、ぽつと降りはじめた。本格的な雨である。

勝はぐつ、と行く手を睨んだ。橋の終端は切妻屋根に接し、屋根の一部がななめに切り込まれそこにドアがある。

一步、一步と近づいていく。

と、ドアががちゃりと開き、勝はぎくりと歩みをとどめた。

勇作だった。風がリーゼントの髪の毛をみだし、膝までとどく長いガ克兰の裾をはためかせている。赤いガ克兰の裏地の黒がはたはたとひらめいた。

「やあ、きみが高所恐怖症だとは知らなかった。すまなかったな」

「ぬかせ！ 勝負しろ！」

勇作はうなずいた。

「もちろんだとも。まずここまできみがこなければ話しにならない。さっさとその橋をわたってくれないか」

「畜生……」

怒りに勝の目がくらんだ。恐怖を一瞬にしてわすれさり、ただだと足音をとどろかせて駆け出した。たちまち橋をわたりきり、踊り場でまっっている勇作へおそいかかる。



ざあああつ、と雨の勢いがました。屋根にあたる雨粒がしろくしぶきをたてた。

「うおおおつ！」

勝の渾身のちからをこめた拳がふりまわされた。勇作はそれをさけもせず、片手をむぞうさにあげてブロックした。

ばしーん、とものすごい音がして勝は歯を食いしばった。まるで壁をなぐりつけているようだった。勇作はにやりと笑うとぐいと勝の拳をにぎった手をひいた。わつ、と勝はひかれてあやうく転ぶところだったが、なんとかふんばりこんどは勇作の顔めがけて頭突きをする。

がつん、とこんどは手ごたえがあった。

勇作の額からひとすじあかい血がながれた。たちまち雨粒があらう。が、勝のほうもダメージをうけた。くらくらと一瞬めのまえが暗くなる。頭突きには自信があったが、勇作の頭の固さも相当なものだ。勝はめくらめつぼうに腕をふりまわした。まさかあたるとは思ってはいなかったが、なんとそれが勇作の顎をとらえていた。

どう、と勇作が踊り場の床にたおれた。

すぐさま上体をおこし、指を唇にもっていく。口の中が切れ、手のひらに血がにじんだ。

「貴様……！」

端正なマスクがゆがみ怒りに眉間にしわがよった。

へへへへ、と勝は勝利に笑みをうかべた。

すばやく立ち上がった勇作は前傾姿勢になって突進した。頭から勝のふところに飛び込みそのまま押していく。どす、と勝の背中が屋根瓦にあたった。うぐ、と勝は胸の空気をはきだした。かれは両腕をのばし勇作のわきの下に手をいれ持ち上げた。

「ぬおおおつ！」

さけぶと勇作の身体を突き飛ばす。が、勇作は突き飛ばされる直前両足を交叉させて勝の足もとにからめていた。

「うあつ！」

どう、と勝はころばされ地面に横になった。すぐさま勇作が馬乗りになって勝の首をしめあげてくる。勝は必死になってそれからのがれようと自由な足をじたばたさせてぐいぐいと身体を動かした。たちまち踊り場の端にたっし、勝の首が空間につきだされた。首をよこにして勝はぎよろぎよると目を動かせた。

「！」

目もくらむほどの高さに乗り出している。地面ははるかかなただ。つぎつぎと落ちていく雨粒がたちまちいさくなって見えなくなっていく。恐怖が勝の動きをとめていた。勇作は馬乗りになって殺意をこめた笑みをうかべている。

「死ねえ！」

勝の太い首に勇作の両手がくいこみしめあげた。どくん、どくんと血流が聞こえ、ごうごうという轟音になった。勝の顔が真っ赤に染まった。眼球がふくれあがり舌がつきだされた。しだいに目の前がくらくかる。勝は死を覚悟した。

と、胸の重みがすつと軽くなった。首にまきつかれていた勇作の両手がなくなっている。

どうしたんだ、と勝は顔をあげた。

なんと勇作が踊り場のかたすみにうずくまり、こめかみのあたりを押さえていた。

その反対側に太郎と美和子がいた。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

はっ、と顔をあげると茜が心配そうにのぞきこんでいた。

「お前……」

「ごめんね、心配できちゃった」

えへ、と茜は笑顔をうかべた。勝は空中にわたされた一本橋を見やった。

「あれ、わたってきたのか？」

うん、と茜はうなずいた。勝はなさけなくなった。じぶんがあれほど恐怖した一本橋を妹はかるがるとわたってきている。

勇作がゆつくりとたちあがった。じろりと太郎を見つめ、ぺつと口の中の血を吐き出した。

「早かったな。よくここまでこれたとほめておこう」

「勇作さん、もうおしまいだ。あんたのやったことはすべてあかるみになっている。美和子さまにすべての財産を返還するんだ」

勇作は美和子を見た。美和子はその表情を見てはっ、となった。勇作の表情は奇妙にうつろなものであった。

「僕は財産なんかに興味はないよ。美和子さんがのぞむならすべての財産は返還してあげよう。それよりひとつ彼女に聞きたいことがある。美和子さん、あなたは高倉家を再興させるため、あの番長島でのトーナメントに参加した。きみはつぎつぎと敵をうちやぶり勝ち残った。そのときなにか感じたのじゃないか？」

美和子は唇をふるわせた。勇作の言葉は彼女になにかを訴えていた。

「わたしは喧嘩のためにそれまで修行してきたわけではなかったわ。ましてや高倉家のためとはいえ、トーナメントなんていやだった。でも……つぎつぎ勝負をくりかえしているうち正直それが楽しくなってきたのもたしかよ」

勇作ははれとした表情になった。

「そうか、それならいいんだ。ぼくの格好を見たまえ。伝説のガ克蘭、最強の番長。そんな称号をきみはどう思うだろう。きみは生まれながらのお嬢さまだ。ほんらいなら僕とはまるで接点がない。それを埋めるため僕はきみの財産のすべてをうばった。お父さんが倒れたのは計算外だったが、今ならきみは僕のことを理解できるんじゃないのか？」

「そんなことのために……」

「そうさ！僕は不器用だ。只野五郎の築き上げた財産を受け継ぎ、緒方財閥を運営しているが結局のところ生まれはただの貧乏人だ。贅沢は身につかず、愛情のしめしかたも知らない。こんなことをするしか、きみにじぶんのことを知らせることはできないんだ。なあ、

あらためてきみに求婚する。ぼくの妻になってくれ！」

美和子はおおきく息をすった。

そしてゆっくりと首をふった。

「ありがとう、勇作さん。でもその申し出はお断りします。わたしはまだじぶんの将来についてなにも考えることができないの」

くくく……と勇作は唇をかんだ。怒りがこみあげてくる。

「そうか、わかったよ！ それならきみに財産は返さない！ びた一文たりとも渡すものか！ 僕がそうだったように、貧乏というものを精一杯あじわうがいい！ その前にその召し使いをたたきめしてやる。召し使い風情で僕にこんな恥辱をあじあわせたお前だけは許すことができない！」

勇作は太郎を指さした。太郎はゆっくりと勇作の前に進み出た。ざああつ、と大粒の雨がよこなぐりにたたきつけてくる。ばたばたと勇作のガ克兰の裾がはためきめくれあがった。

活つ……。

青白い稲光があたりを染め上げた。一瞬の間があつてぱりぱりという雷鳴が響き、空気がオゾンくさい、つんとした金臭さがたちこめた。

ぴしーん、と屋根の避雷針に落雷する。

勇作はそのなかで口を開き太郎に突進した。

わめき声も雷鳴のなかではかきけされる。勇作の攻撃を太郎は腕をあげてブロックする。勇作は足をあげ、蹴りをいれた。二度、三度！ ふたりの攻防はすさまじく、まためまぐるしかった。

「すげえ……」

勝がぼかんと口を開いた。あまりのはやさにふたりの手足の動きはかすんで見えた。

ついに太郎のキックが勇作の胸に炸裂した。勇作はその攻撃をそらすため上体をそらしとんぼをきった。

がちゃん！ 勇作はあやうく屋根にのがれた。四つん這いになり屋根をのぼっていく。太郎はとん、と飛び上がり屋根瓦に足をのせ

た。勇作はそんな太郎を見ると手足をいそがしく動かしすると屋根の頂上へ登っていく。

どぼどぼと滝のように雨がながれおち、屋根をぬらしている。まるで氷のようにすべりやすい屋根瓦に太郎はあやうくバランスをとって立っていた。

はははは……！ 四つん這いのまま勇作は哄笑した。

「馬鹿め！ 屋根におびきだされたな！ お前のわざも、こんな足場がわるいところでは使うことはできないだろう？」

太郎は足もとに目をやった。たしかに勇作の指摘はあたっている。太郎はいつもの革靴で、靴底には鋏をうっている。こんな靴ではすぐすべってしまう。勇作はスニーカーだ。靴底はゴム引きでまだましだった。

位置は勇作のほうが上にいた。その有利な位置から勇作は太郎に襲いかかった。

ふんばることもできず、太郎は胸倉をつかまれたまま仰向けにたおれかかった。がちやがちやと音をたて屋根瓦をすべっていく。

勇作は太郎の胸倉をつかんだままひきよせ、がんと屋根瓦にたたきつける。がちやんと音をたて屋根瓦がわれる。さらにたたきつける。もう一度！

「この……召し使い……おれをだれたと思ってる……伝説の番長だぞ！」

馬乗りの姿勢でなぐりかかる。たちまち太郎の顔が紫色にはれあがった。太郎は身をよじり、両足をはねあげ勇作の背中を蹴った。

「うあ！」

のけぞり、勇作はごろごろと屋根瓦をころがった。あやういところで屋根瓦につめをたて、ころげ落ちる寸前でとまる。その勇作めかけ、太郎はとびかかった。おたがいの身体をつかみあい、ふたりはごろごろと屋根の斜面を転がり落ちていく。

「あぶないっ！」

美和子は悲鳴をあげた。

がちゃがちゃと派手な音をたて、太郎の身体は屋根からすべり落ちた。そのまま空中に飛び出す。が、その寸前太郎は雨樋に手をかけた。ぶらん、と片手でぶら下がる。

ばきいっ、と雨樋がはずれる。いくら太郎が体重が軽いとはいえ、雨樋は本来そんな荷重に耐えるように造られていない。たちまちとめていたリベットがはじけ飛び、太郎はぶらぶらと左右にゆれている。

太郎は必死に雨樋をたぐりよせ、屋根瓦に手をかけた。

勇作はにやりと勝利の笑みをうかべると太郎の手を踏みつけようと足をあげた。

「やめてーっ！」

美和子はさけび屋根に駆けあがるとそのまま全速力で走った。はっ、と勇作が顔を上げる。美和子はだっ、と飛び上がり両足をそろえキックした。

「ぐあっ！」

美和子の全力の蹴りで勇作は弾き飛ばされた。屋根瓦をはねとばし、ずるずると滑っていく。

「わああっ！」

今度は勇作が屋根からすべり落ちた。ひっしになつて屋根に指先をかけぶらさがる。両足がぶらぶらとゆれ、勇作はおもわず見下ろした。はじめてその表情に恐怖がうかんだ。

太郎はなんとか屋根に這い上がった。美和子を見上げる。

「お嬢さま……」

「よかった。さあ……」

美和子は手をさしのべた。太郎はその手にすがり、立ち上がった。勇作を見る。

「くくく！」

勇作は脂汗を流し屋根にかじりついている。が、その手はつるつるとすべり、いまにも落ちそうだった。目を見開き、足元を見た。魂をすいこまれそうな高さに、勇作の口から悲鳴が漏れた。

「た…… たすけてくれえ！」

どかどかと屋根瓦をふみしめ、勝が近づいてきた。

「へへへ…… ざまあねえな。あんなにいばつても、命は惜しいってか！」

にやにや笑いながら見下ろした。勇作は恐怖の表情で勝を見上げた。

「たすけて…… たすけて！」

「ほう、さっきはおまえこうしようとしたな」

勝はひよい、と片足をあげた。勇作はこおりついた。

「これからどうするつもりだったんだ？」

ぐい、と勇作の手を踏みつけようとする。

「やめてください！」

太郎が声をかけ、勝は動きをとめた。

「お前、どうする気だ？ こいつ、お前を落とそうとしたんだぞ」

「それでもだめです」

太郎は身をかがめ、手をのばした。勇作の目に感謝の色がうかんだ。がっしりとふたりの手が握り合い、太郎は勇作を救い上げようと全身にちからをこめた。

「う、う、う、う！」

が、勇作の身体を持ち上げるにはちからがたりない。

と、太郎の腰を勝がつかんだ。そのままぐいぐいと引っ張りあげる。

「しょうがねえなあ。お前、ひとがよすぎらあ」

勇作は屋根に引っ張りあげられぜいぜいとあえいでいた。顔色はまっしろである。ぶるぶると手の震えがとまらない。

勝は勇作の襟首をつかんだ。

「おい、まだやるか？」

勇作はぶるつと首をふった。すっかり戦意を喪失していた。

勝は勇作の襟首をつかんだまま引っ立てた。

「さあ、これからお前の悪事をあらいざらい白状するんだ。もうお

しめえだ！」

雨は小降りになっていた。

激しかったが、通り雨らしかった。

暖炉で薪がぱちぱちとはぜていた。

勇作のオフィスである。

勇作はデスクのむこうにすわりこみ、ぐったりとなっていた。全身はぐつしよりと濡れ、ぼたぼたとあしもとに水たまりができている。髪の毛はすっかりみだれ顔にかかっていた。その勇作を太郎、美和子、勝、茜の四人がとりかこんでいた。

「さあ、どうするつもりなんだ。高倉家の財産をすべて返却し、すべてを白状するんだろ？」

勝が大声をあげた。勇作はうつろな目で顔をあげた。

「なんでそんなこと僕がしなきゃならないんだ……」

ぽつりとつぶやき、にたりと笑みをうかべる。勝はかっとなった。

「なんだと！ お前は負けたんだ！ 太郎と美和子に負けたんだ！」

「喧嘩に負けたただけだ。ただのなぐりあいになんて負けて、どうして財産を返却しなければならなんだ？」

言われて勝はぐつ、とつまつた。首をふりつぶやく。

「きたねえ……なんてきたねえやつだ！」

こうなったら……、と拳をにぎりしめる。

と、そのときドアを開け部屋にはいつてきたのは五郎と洋子だった。

「勝くん、その必要はないよ。証拠はすべて握っている」

五郎の声に勝はぎくりとなった。

「あんた……」

勇作は顔をあげた。まじまじと五郎を見つめる。五郎はうなずいた。

「ひさしぶりだな。いったいお前はなにをしようというんだ？」

「なにをって？」



勇作の顔が妙にあどけないものになっていた。五郎はかれの父代わりになつてくれた育ての親である。つい、そのときの癖がでてしまふのだらう。

「美和子さんのことさ。たぶん木戸に命じて高倉男爵に許婚だと吹き込んだんだらう。どうして美和子さんなんだ？ 彼女に執着する理由はなんだ？」

ふっ、と勇作は笑った。

「おぼえてないだらうな。知つての通り、僕は高倉家に奉公していたメイドの息子だ。幼いころ、高倉家で育っている。だから美和子さんともちいさいころ顔をあわせているんだ。そのころから好きだった……。まあ、幼稚園にもあがらないころの話だったから好きといつても今とは違つていたけどね」

美和子は目を見開いた。

「ある日、木戸が高倉家に雇われてきた。僕と美和子さんはいつものように庭で遊んでいた。そのとき木戸に言われたんだ。お前は召し使いの子供だ。美和子さんとは身分が違う。そのことを忘れるなとね……。僕はわけがわからなかった。それ以来ずっとそのことを考えていた。身分が違うなら、おなじ身分になつてやろうと！ そして緒方財閥を手に入れた。五郎のおかげだ。美和子さんと結婚すれば僕は男爵位をつぐことができる。緒方家には男子のあとつぎがいなかったからね」

「それは間違いだわ」

美和子が口を開いた。

え？ と勇作が顔をあげた。

「男爵という爵位は一代かぎりです。お父さまは国への貢献で爵位をいただいたけど、あくまで一代限りの爵位に違いはありません。爵位をうけつぐことができるのは、子爵以上の爵位ですよ。あなたがわたしと結婚しても、爵位はつげないのよ！」

「そうか……。知らなかった」

勇作の肩ががっくりと落ちた。

「まったく……馬鹿な話だ。これを見たまえ」

五郎はポケットからいくつかのカセットをとりだした。それを見た勇作の顔色が変わった。

「それは！」

「そうだ。これはこの屋敷にしかけられている監視カメラの映像を保存したテープだ。お前は屋敷じゅうにカメラをかけ、映像と音声を保管しているな。なかにおさめられているのはお前の取引相手で、おそらくあとの証拠のため隠し撮りをおいたんだろう。洋子さんがその保存場所に案内してくれたよ」

勇作は立ち上がった。がたん、と椅子がひっくりかえった。

「きさま！ おれの召し使いになったはずだぞ！」

「もうやめたわ。あんたに仕えるなんて、もうこりごりよ」

洋子は肩をすくめた。勇作の唇がぶるぶると震えている。五郎は手を伸ばし、デスクのボタンを押した。かたり、と天井の蓋が開きテレビが出現した。画面が明るくなり、午後のニュースの映像があらわれた。

「正門に集まっていた記者にこのテープの写しをわたしておいた。ほら、見てごらん」

アナウンサーが口を開いた。

「ただいまより通常の番組を変更し、緒方財閥の不正行為の証拠をごらんにいれます。なお、この映像は警察庁、検察庁へ提出をすませております」

画面が切り替わり、隠しカメラの映像になった。カメラは固定で、勇作のオフィスにさまざまな人物が出入りをした。テロップでその人物の名前と、身分が表示される。ほとんどが政財界の大物で、なかには外国の要人もふくまれていた。

「なんとまあ……。わたしは緒方家の財産をふやそうといういろいろ努力をしたが、こんな裏取引はやったことがない。そんなことに手をもめればかならず自分に跳ね返ってくるからね」

勇作はぼうぜんとなっていた。

そして木戸が勇作に命令をうけている場面になった。まだ高倉家に仕えていたころのもので、木戸はふるくさいタキシードを身につけていた。会話は、木戸に勇作が高倉家の財産を横領するための方策をさずけているところだった。その内容は、あきらかに不正なものだった。

「これで証拠は万全だ。お前がやった不正行為は全国に知れ渡った。お前に緒方財閥をわたすのではなかった……」

五郎はつぶやいた。

「さあ、行こう。ここにはもう用はない」

五郎は全員をうながし、部屋を出て行った。

部屋を出る直前、美和子は勇作をふりかえった。

勇作はがっくりと肩をおとし、デスクにつつぶしていた。

9

ばしゃばしゃと無数のフラッシュがたかれ、記者会見用の金屏風がまぶしく輝いている。

そこにはあでやかに着飾った美和子の姿があった。

美和子の両側には高倉家の役員が勢ぞろいし、全員緊張した表情でフラッシュのまぶしさに耐えている。

記者代表の男が口を開いた。

「ただいまより高倉家のあらたな事業の発表会をおこないます。高倉美和子さんはお父さまの死去にともない、高倉家をつがれました。ご存知のように高倉家は一時破産の憂き目にあいましたが、それも法律上の手続きで間違いがただされ、美和子さんは高倉コンツェルンの代表取締役として役員の満場一致による選出をうけております。まずは代表取締役就任、おめでとうございます」

美和子はうなずきにつこりと白い歯を見せてほほえんだ。ばしゃばしゃとフラッシュが激しくまたいた。今日の美和子は唇にルーージュをひき、かすかにまぶたにシャドウをいれている。ただそれだ

けの化粧なのに、まるで人が違って見えた。ほんのりはいたほほの紅が、彼女の白い肌をひきたてていた。

「ありがとうございます。今日はわたしが役員会に提出し、承認をうけたあらたな事業の説明をおこないたいと思います。その事業の名称は……」

美和子はさつ、と腕をあげた。

ばさりと天井にまかれていた垂れ幕が会場に垂れ下がった。

垂れ幕には墨痕あざやかにこう書かれていた。

「番長島トーナメント」

おお……、と記者たちの間から喚声がおきた。

「番長島でのトーナメントは昨年、緒方財閥によって成功をおさめました。しかしトーナメントの最終日、支障があつて最後まで放映されていなかったことにより視聴者のみなさまに不満があつたことはたしかです。それで高倉コンツェルンはこのトーナメントをひきつぎ、ふたたび開催しようと決定しました。条件はおなじです。このトーナメントに参加して勝ち抜いたかたには優勝賞金、百万両が渡されます」

ぱちぱちぱちと盛大な拍手がまきおこつた。会場にいるすべての招待客全員が興奮している。

「やったあ！」

会場に勝の叫び声がひびいた。

勝、太郎、茜の三人は会場のすみで美和子の発表を見守っていた。「美和子のやつびつくりさせることがあるからって言つてたけど、このことか！」

「お兄ちゃん、美和子さんでしょ」

茜は勝の裾をひっぱった。

「いいじゃねえか。とにかくあのトーナメントがまたやれるんだぜ。これで家に帰るのはおくれるな」

「もつ……。父ちゃんも母ちゃんも心配しているよ」

「お前がうまく言つてくれよ。おれはまだ帰らないってな」

「知らない！」

へへっ、と勝は太郎を見た。あいかわらず太郎は静かに美和子の姿を見つめている。

「おい」

「なんですか」

「お前、トーナメントに出るのかよ？」

「え？」

なぜ、というような表情になる。

「だってよ、お前だってなかなかやるじゃねえか。おれ、お前と手合わせしたいんだ。出るよ、トーナメントに！」

太郎は首をふった。

「僕は召し使いですから。美和子さまの世話がさきです」

「ちえ！ つまんねえやつ」

会場のざわめきが一段落すると美和子は立ち上がった。なんだろうと会場の全員の視線が彼女に集まる。全員の注目があつまったところで美和子は口を開いた。

「みなさん、このトーナメントに出場なさるかたはみな腕自慢のかたばかりです。わたしも前回のトーナメントに出場して、勝負をきめる戦いのすばらしさを知りました。だからこのトーナメントでわたしにふさわしい夫をさがしたいと思っています」

ぐっ、と美和子は衣装をひっぱった。

ばさり、と彼女の衣装がはずれ、そのしたからセーラー服があらわれた。

「わたしはこのトーナメントでもっとも強い男のかたと結婚します！ 最終決戦でわたしと戦い、勝ったかたを未来の夫とします！」  
会場がどよめいた。

「なんだと……」

勝はぽかんと口をあけた。太郎を見る。太郎はめずらしく興奮していた。

「おい、いまの聞いていたか？」

いいえ、と太郎は首をふった。

「おもしれえ……おもしれえ……。考えてみりゃ、あんな美人を嫁さんにできるなんて男冥利につきるってもんだ！　よし、きめたぜ！　おれ、ぜったい優勝してやる！」

「いいえ、あなたには美和子さんはわたしません」

えっ、と勝は太郎を見た。

太郎はまっすぐ勝を見つめた。

「美和子さんの夫は僕です！　僕もトーナメントに出場します！」  
にやり、と勝は笑った。うん、とおおきくうなずく。

「そうでなきゃな！　へへっ、おめえと戦うのが楽しみだ！」

「聞いたか、妙な具合になったな」

番長島の洞窟である。

ラジオから聞こえる美和子の発表を聞いて、只野五郎は眉をあげた。

あれから五郎はふたたび番長島に帰ってこの洞窟に住み着いていた。もともと財産とか世間に執着はない。すべてがおわり、ふたたび住み慣れたこの洞窟で隠者の生活に戻っている。

そのそばに勇作がいた。

かれの不正行為があばかれ、あらゆる特権を剥奪されすべてを失って、いまは五郎と一緒に暮らしている。几帳面になでつけていた髪の毛はいまはぼさぼさにのぼしほうだいになり、まっかなガクランはいまはあちこちつぎあてだらけである。いまは洞窟でなにかを鍋で煮ている。ぐつぐつと煮あがったそれを木のスプーンでかきまわし、ときどき味見をしている。

「おれ、トーナメントに出るよ」

ぼそりと勇作がつぶやいた。

え？　と五郎は勇作を見た。

勇作はうつむいたままにかを決意しているようだった。

「聞いただろ、このトーナメントに優勝すれば美和子と結婚できる

んだ。おもしろいじゃないか！」

ふうん、と五郎はうなずいた。

勇作が逃げるようにこの洞窟にやってきて、いっしょに住まわせてくれと頭をさげてきたときはこいつはもうおわりだな、と思っていたがいまの勇作はかつてのぎらぎらした欲望がふたたびふきだしているようだ。

「いいだろう。やってごらん」

五郎がそう言うのと勇作は顔をあげた。

「頼みがあるんだ」

「なんだ？」

「あんたの息子、太郎の執事の格闘術、教えてくれないか。あんたも知っているんだろう？ あの格闘術にはけっきょく勝てなかった。おれはあれを身につけたい！」

五郎はにやりと笑った。

「そうか……。よし教えてやろう。しかし修行はつらいぞ」

「そんなの覚悟している！」

ふたりは立ち上がった。

五郎は勇作の前にたち、みがまえた。

「かかってこい！」

勇作はわめき声をあげ、五郎にむかって突進していった。

了

## 後（後書き）

いかがでしたでしょうか？

あなたの感想・批評などお願いします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6738c/>

---

スケバン！

2010年10月8日14時22分発行